0042282000

0042282-000

255. 2-45

西洋教育史講義案

石山脩平・著

賢文館

上巻

昭12

AHC

帝國圖書館藏

石山脩平著

西洋教育史

〈希臘教育史〉

東京 寶文館藏版

昭和十二・帝國圖書館

.624
ㅏ4W81

255
4.5

石山脩平講述

西洋教育史講義案

上卷

〔希臘・羅馬・中世篇〕

東京 賢文館 發兌

帝國圖書館藏

石山脩平著

西洋教育史

〈希臘教育史〉

東京 賢文館藏版

昭和十二年 帝國圖書館藏本

255.
452

第一編　希臘教育史

〈目　次〉

序說　希臘教育史の地位とその時代區分……一
一　希臘の文化史的並びに教育史的地位……一
二　希臘教育史の時代區分と主要問題……四
第一章　古希臘時代第一期〔前史時代〕の教育……八
第一節　希臘民族の創業……八
第二節　ホメーロス詩篇の教育的意義……九
第二章　古希臘時代第二期〔古典時代前期〕の教育……一二
第一節　スパルタの教育……一二
都市國家の成立……スパルタの國情と教育……優生學的見地とスパルタ婦人……スパルタ教育の段階……スパルタ教育の內容及び方法……スパルタ教育の全體的特色とその史的意義
第二節　アテーナイの教育……一九
アテーナイの國情と教育……ソローンの教育的法規……幼兒の教育……少年の教育……青年の教育……女子の教育……アテーナイ教育の全體的特色とその史的意義
第三節　汎希臘的競技とその教育的意義……二八

汎希臘的精神と競技……オリュンピア……オリュンピア競技の起源及び復活……オリュンピア競技の經過……オリュンピア競技優勝者の優待……オリュンピア競技の暗黑面……オリュンピア競技の類縁……近世に於けるオリュンピア競技の復活……汎希臘的競技の教育的意義

第四節　エロースの風習とその教育的意義 …… 三七

第三章　新希臘時代第一期〔古典時代後期〕の教育

第一節　黄金期のアテーナイ文化と希臘の新教育 …… 四〇

ペリクレース時代……希臘の新教育

第二節　ソプイステース …… 四三

ソプイステースと呼ばれる人々……ソプイステースの業績

第三節　ソークラテース …… 四七

一　ソークラテースの生涯 …… 四七

生年月と家庭……受けた教養……教育者的使命の自覚……三回の從軍……妻と子供……公的生活……告發とその理由……法廷に於ける辯明……獄中生活及び臨終……死後の反響

二　ソークラテースの教育思想 …… 五五

第四節　プラトーン …… 五七

一　プラトーンの生涯 …… 五八

家系及び幼少時代……ソークラテースへの師事……政界への希望……海外旅行——第一回シケリア行……アカデーメイアの教育事業……再三のシケリア旅行……晩年と最期

二　プラトーンの教育思想 …… 六三

プラトーン教育思想の全體的特質……教育の本質論……教育の目的論……教育の段階論……教育の方法論……プラトーンの史的地位

第五節　クセノプオーンとイソクラテース …… 七九

一　クセノプォーン …… 七九

略歴及び著書……教育思想

二　イソクラテース …… 八三

略歴及び著書……教育事業

第六節　アリストテレース …… 八四

一　アリストテレースの生涯 …… 八四

家系及び幼時……アカデーメイアに於ける修學……小亞細亞遊歴……アレクサンドロス大王の教育……リュケイオンに於ける教育……晩年の不遇

二　アリストテレースの教育思想 …… 八八

アリストテレース教育思想の取扱方……アリストテレース形而上學の教育的意義……アリ

ストアレース心理學の教育的意義……アリストテレースの倫理說と教育……アリストテレースの國家論と教育……一般陶冶と職業陶冶……教育の段階……アリストテレースの史的地位

第四章　新希臘時代第二期(世界主義時代)の教育　……九

第一節　希臘文化の世界化　……九

世界主義時代……希臘文化の世界的傳播

第二節　文化の中心地とその教育的職能　……一〇〇

アテーナイの諸學派……アカデーメイア學派……逍遙學派……ストア學派……エピクーロス學派……アテーナイの大學……アレクサンドレイアの學府……ペルガモン其他の中心地

第三節　思想界の大勢とその教育的意義　……一〇六

世界主義時代の思想界……ストア學派の思想……エピクーロス學派の思想……懷疑派の思想……世界主義時代思想界の全體的特色……希臘より羅馬へ

結　語　希臘教育の全體的特質　……一一三

第一篇　希臘教育史

序說　希臘教育史の地位とその時代區分

希臘民族の教育的業績は文化史的並びに教育史的地位

後の西洋教育史全體を貫ぐ二大潮流の源泉をなしてゐる。更に羅馬・中世及び近世の教育事實並びに教育思想の諸形態が希臘とたゆるぬ者の展開乃至發展として理解せられるといふ意味から、吾々は希臘教育史上の諸契機を、西洋教育史全體の原型的なるものとして取扱ふことが出來るであらう。固より希臘民族と雖も完全無缺せる人格と文時代の苦悶の故に免れ難き幼稚未開の側面を具へ、特に地理的障壁と種族的偏見とが生み出せる不幸の事実は枚挙に暇なしとせられて、彼等の歷史の大部分は紛亂と暴虐の歷史であり、ベック(A. Böckh, 1785—18

化に於けると同樣に、他の古代諸民族のそれに比べて拔群の光輝を放ち、爾の源泉をなしてゐる。更に羅馬・中世及び近世の教育事實並びに教育思想の容乃至發展として理解せられるといふ意味から、吾々は希臘教育史上の諸契機を、西洋教育史全體の原型的なるものとして取扱ふことが出來るであらう。固より希臘民族と雖も完全無缺せる人格と文時代の苦悶の故に免れ難き幼稚未開の側面を具へ、特に地理的障壁と種族的偏見とが生み出せる不幸の事実は枚挙に暇なしとせられて、彼等の歷史の大部分は紛亂と暴虐の歷史であり、ベック(A. Böckh, 1785—18

93)の言へる如く、「希臘民族は多くの人々の信じてゐるよりも遙かに不幸であつた。」然しながら彼等の面目はかくの如き古代諸民族に共通なる暗黑面によつて抹消せらるべきではなく、寧ろその間に輝き出でてそれを照破し美化するかの如き一大光輝の故に、益々讃仰せられねばならぬ。吾々はこの光輝ある業績が、西洋文化史並びに教育史を貫いて、如何に力强き生命を生きて來たかを、先づ一瞥したいと思ふ。

周く人々の認める通り、科學・哲學・藝術・政治組織等を始めとして、文化の殆んどあらゆる領域は希臘にその始源を有する。假令他の諸國例へば埃及・フェニキア其他の諸國に端を發した西洋文化が少くないにもせよ、それ等は希臘民族の手に受取られることによつて、畳かに高く培はれ、洗錬・深化・整頓せられて、永遠の生命を得るに至つたのである。そしてそれ以後に勃興した諸々の文化は、或は自らの助長や基礎づけに希臘を學び、或は自らの行詰りを希臘への回顧によつて打開し、かくて新しき文化の深化・向上・更生は常に希臘文化への復歸を否寧ろ希臘的精神の發展を物語るものであつた。即ち第一に羅馬國民の卓拔の功績として讃へられる武力及び法制も、その始源は希臘より學び受けたものであり、その整備・充實も、それによつて世界を蓋へる大版圖を開拓統制し、その上に希臘文化を移植し繁榮せしめる地盤を用意するに役立つた觀がある。實にホラティウス（Horatius, 65—8 B. C.）の言へる如く、「捕へられたる希臘は猛き勝利者を捕へ、そして學藝を荒れたるラティウムに持込んだ」（Graecia capta ferum victorem cepit et artis intulit agresti Latio.）のであつて、羅馬武力の希臘征服はやがて希臘文化の羅馬征服に外ならなかつたのである。次に基督教の興起は希臘・羅馬の異教文化に對立する新契機を生み出し、そこに凡そ人間性に於ける、そして又歐洲文化の潮流に於ける所謂「異教的・基督教的二元」（pagano-christian dualism）を顯現するに至つたのであるが、それにも拘らず、基督教が理論的根據を以て歐洲人の內面生活を規制し得るためには、希臘哲學を學び取つて自らに奉仕せしめねばならなかつた。更に近世文化の動因となれる文藝復興運動が、當初に於ては羅馬文化を、やがてはその本源たる希臘文化を復活せしめたものであることは言ふまでもなく、新興ゲルマン民族は、その初め基督教に歸依することによつて蠻野粗笨の域を

脱したのであるが、それのみでは未だ十分に自我の要求を充足し得ず、遡つて希臘精神に逢着して眞に全幅の共鳴を感じ發剌たる進展を遂げ得たのである。而も最近の藝術及び一般思想界に於けるヴィンケルマン（J. J. Winckelmann, 1717—68）、ゲーテ（J. W. Goethe, 1749—1832）、フムボルト（W. Humboldt, 1768—1835）等の新人文主義運動を想ひ、一代の巨人ニーチェ（F. Nietzsche, 1844—1900）の名と勢力とを偲び、又哲學界に於けるコヘン（H. Cohen, 1842—1918）、ヴィンデルバント（W. Windelband, 1848—1915）、フッセル（E. Husserl, 1859—）、ハイデッガー（M. Heidegger, 1889—）等の思想の基調を考へる者は、希臘精神が今日なほ如何に强く歐洲人の精神生活を支へてゐるかを認めざるを得ないであらう。希臘民族の文化史的業績は、實にかかる永遠の潮流と豐富なる形態とを、源流として蓄へ原型として用意した點に存するのである。

教育の分野に於ても亦希臘民族は、彼等の特性と環境とに制約せられた獨自の歷史的業績の中に、凡そ教育事實竝びにそれへの理論的反省が一般に取り得べき諸形態を、最も素朴に鮮明に且つ典型的に表現した。故に前述の如き西洋文化史上に於ける希臘的精神の復興發展は、その都度希臘的教育の理想・內容乃至方法を蘇らしめてそれが西洋教育史上の一大基本潮流をなして來たのである。（これを具體的に指摘することは本書の全體を貫く主要課題である）。尙最近の教育思想界に於けるヴィルマン（O. Willmann, 1839—1920）、ナトルプ（P. Natorp, 1851—1924）、シュプランガー（E. Spranger, 1882—）等の所論を底深く捉へる者は、そこに希臘精神の教育的生命が愈々新に生かされつつあることを知るであらう。かくして恰も希臘哲學史が、知識內容としては比較的貧弱であるにも拘らず、哲學的思索の典型的形式を展開させてゐる點に於て、全哲學史中最も教授價値のある部分と

されてゐる如く、希臘教育史も亦教育事實が取り得べき諸々の樣相、教育思想の構成さるべき諸々の契機を、單純ながらも模式的に提示して、教育者及び教育學徒への常に新鮮なる刺戟・指針を與へてゐる。吾々が西洋教育史の出發點に於て、希臘教育史をば、從來の通史の慣例を破つて遙かに詳しく取扱はんとする所以は、上述の如き希臘民族の偉業に對する感激に基づくと共に、又かかる取扱によつてのみ西洋教育史の眞に內面的なる理解を期し得ると信ずるからである。

二　希臘教育史の時代區分と主要問題

希臘教育史は、政治史並びに一般文化史を背景として、通常次の如き時期に分たれる。即ち先づ全體を古希臘時代と新希臘時代とに大別し、その各々を更に二期に小分して、結局四つの時期に區分する。

（一）古希臘時代第一期　前史時代　前十世紀頃まで
（二）古希臘時代第二期　古典時代前期　前六世紀終頃まで
（三）新希臘時代第一期　古典時代後期　前四世紀中頃まで
（四）新希臘時代第二期　世界主義時代　前二世紀中頃まで

古希臘時代の第一期は前史時代であつて紀元前十世紀頃までを指す。この時期に就いては歷史的記錄の徵すべきものがなく、主としてホメーロスの詩により、創業期希臘民族の活動や思想が想察せられるに過ぎないから、これを「ホメーロス時代」とも名づけ、それはまた諸々の英雄達の活躍を傳へてゐることから「英雄時代」とも呼

ばれる。この時期に關する教育史は、主としてホメーロスの詩に現はれた世界觀・人生觀を通して、希臘教育史を一貫する基調としての民族精神を捉へると共に、その詩篇が直接に指示せる當代の教育事實及び教育思想を探し求めて、事實上希臘教育史の發端たらしめることを任務とする。然し吾々はその詩篇の背景を知るために、希臘民族進出以前にエーゲ世界を占據してゐた先住民族の文化並びにかかる舞臺に希臘民族の進出して來た徑路を概觀することを、前史時代の叙述內容に加へねばならない。

古希臘時代の第二期を以て始まる歷史時代は所謂「ドーリア族侵入」の成就せる頃を發端とする。即ち前十五世紀頃より南下し初めたるドーリア族は前十一世紀頃までにペロポンネーソス半島に根據を固めてスペルタを建設し、更に早くより南下せるイオニア族もこの頃までにアテーナイ及び小亞細亞中部地方の植民都市を建設し、エオリア族も亦小亞細亞北部地方を占據して、ここに希臘諸種族の相競へる發展を現出したのである。この時期は、希臘民族が都市國家を地盤として獨自の特色ある生活形態を維持したことの故に、吾々はこれを古典時代に數へ、且つ次の思想的古典時代と區別するために古典時代前期と名づける。教育史はこの時期に關して通常、國家主義教育の原型としてのスパルタの教育と、自由人の教養の原型としてのアテーナイの教育とを取上げる。然し吾々はこの外に、全希臘民族を結合して國際的教育の偉大なる效果を擧げた所の汎希臘的祝祭、特にオリュムピア競技の事實とその教育的意義とを考察しなければならぬ。更に古來希臘社會の一般的風習として教育的に重要なる意義を帶びて居り、且つ後のソークラテース、プラトーン、アリストテレース等の教育思想の主要契機となつた所の社會的事實即ち愛者（ユラスステース）と愛弟子（パイダイカ）との同性愛的關係が、吾々の教育史に於ては大いに注意せられる。

新希臘時代の第一期は前五世紀初頭の波斯戰役（前五〇〇年—四七九年）を期としてアテーナイが希臘の政治的並びに文化的中心地となつた頃から始まる。特にペリクレース治下のアテーナイが文化のあらゆる領域に於て空前の繁榮を示したことは、この時期の代表的特質であるから、これをまた「ペリクレース時代」と呼ぶことも出來る。教育史に於ては、このペリクレース黄金時代の後を受けて、希臘人の生活と思想とが漸く爛熟し混亂し頽廢しつつあつた頃に、それへの批判的意義を帶びて現はれた所の教育思想が前景に立つ。而も希臘教育史の源流的・原型的意義は就中この時期の教育思想によつて荷はれてゐるのである。即ちソフィステース等の教育活動と教育思想、それを機緣として發揮せられたソークラテースの教育者的人格と事業と思想、それ等の意義の把握と深化とに向けられたプラトーンの思索、それを更に學的概念と體系とに整序せるアリストテレースの業績、これ等は希臘教育史上の精華として、爾後の教育史に幾多の原型を供し、永遠に盡きざる源流をなしてゐる。吾々の教育史はそれ故にこの時期の叙述に最大の努力を拂はねばならぬ。通常希臘の古典時代と呼ばれるのは、ペリクレース黄金時代を代表とするこの新希臘時代第一期を指すのであるが、吾々はさきに古希臘時代第二期を古典時代前期と名づけた事情により、この所謂古典時代をば古典時代後期とする。かく前後二期を併せて廣義の古典時代に含ませる所以は、これ等の時期に於ける希臘民族が、未だ世界的傳播と混化とに陷らざる獨自の希臘的生活と思想とをそれ自らの舞臺に於て典型的に培ひ發揚したからである。

「古典的」（classicus）とは本來「第一級」を意味し、それは羅馬の第六代の王セルウィウス・トゥルリウス（Servius Tullius, r. 578—534 B. C.）が市民を土地所有額によつて五階級に分つた場合の第一階級を指した語である。藝術史上に於けるこの

語の用法は多義であるが、何れにしても模範的・典型的なる優越性がそこに含まれてゐる。吾々は希臘文化が他文化との混化による實的低上を示す前の、純粹な、本來の、希臘的面目を保てる場合にこれを古典的と呼び、その中に都市國家時代の生活と黄金期の思想とを含ませたのである。

新希臘時代の第二期は、右の古典時代の後を承けて、希臘民族と彼等の文化とがその本來の鄕土を失つて世界的に傳播し、他の諸民族特に羅馬國民の中に融け入つた時期である。即ちカイローネイアの一戰（前三三八年）を劃して希臘民族の自立は失はれ、アレクサンドロス大王の遠征（前三三四年—三二三年）を通じて彼等とその文化とは亞細亞・亞弗利加に擴められ、羅馬の希臘征服（前一四六年）を期として希臘文化の羅馬征服は促進せられた。希臘教育史の最終期はかくして前四世期中葉より前二世期中葉までを含む。この時期に於て希臘民族は從來の都市國家の「市民」たることを失つて「世界の市民」となり、而も世界を希臘化することによつて世界を獲得した。吾々はそれ故に世界市民時代の意味に於てこれを「世界主義時代」と名づけ又史家ドロイゼン（J. G. Droysen, 1808—84）に從ひ、世界の「希臘化時代」の意味に於てこれを「希臘主義時代」と呼ぶ。この時期に關する教育史は、希臘學藝の世界的普及に伴ふ實質的變化、その主たる中心地に於ける研學の施設狀況等を背景として、教育事實の上に齎らされたる新徵候を捉へ、又この時期の哲學を代表するストア派、エピクーロス派竝びに懐疑派が教育思想的に如何なる意義を有するかを考察し、かくして衰亡途上の希臘を教育的觀點に於て描き出すことを任務とするのである。

第一章　古希臘時代第一期【前史時代】の教育

第一節　希臘民族の創業

印度歐羅巴人種に屬する希臘民族は、西方亞細亞の原住地を發して、カスピ海の東岸より黑海の西岸を過ぎ、ダニューブ河畔の水草を逐ひつつ次第に希臘本土に近づき、やがてオリュムポスの白雪を仰ぎ、テッサリアの綠野を越え、前二千年頃には紺碧のエーゲ海に達した。（これより先、この「エーゲ世界」にはクレーテー島のクノーソスやプァイストス、バルカン半島のミュケーナイ、ティリュンス、小亞細亞北部のトロイア等を主要中心地として優秀な先住民族が所謂「エーゲ文明」を形成してゐたのであるが、希臘民族はこの先住民族と先進文化とに接觸することによつて、本來の天分を急速に發揮し得たのである。）それより約十世紀の間に彼等の中の代表的種族は相次いでバルカン半島・エーゲ海諸島並びに小亞細亞沿岸を獲得した。即ち先鋒たるアカイア族は希臘本土を南下してペロポンネーソス半島に達し、希臘民族の進路と地盤とを開拓した。次に前十五世紀頃より質朴剛健なるドーリア族はアカイア族に代つてペロポンネーソス半島を占據し、更にクレーテー島及び附近の島々並びに小亞細亞南部西岸地方にも進出した。又イオニア族は前十世紀頃までに希臘本土のアッティカ州を獲得し、進んで小亞細亞中部西岸地方に植民地を開拓し、その明朗潑剌たる天性を以て希臘文化の搖籃を築いた。他方エオリア族もレスボス島及びキュメ市方面より漸次に小亞細亞北部西岸地方に發展した。

さて希臘民族の傳說によれば、彼等は同一の祖先ヘレーン（Ἕλλην）の後裔であつて、その二子アイオロス（Αἴολος）とドーロス（Δῶρος）とはそれぞれエオリア族及びドーリア族の祖となり、又ヘレーンの孫アカイオス（Ἀχαιός）とイオーン（Ἴων）とはそれぞれアカイア族及びイオニア族の祖となつた。かく同一の祖先ヘレーンの血を分けたる同族の故を以て希臘民族は自らヘレーネス（Ἕλληνες）と名乘り、その開拓居住せる國土を昔くヘルラス（Ἑλλάς）と呼び、異民族（βάρβαροι）に對して自らの民族と國土と文化とを高き誇に於て區別した。

第二節　ホメーロス詩篇の教育的意義

上述の創業建國の壯圖を記念する金字塔はホメーロス（Ὅμηρος）の名を負へる二大敍事詩『イリアス』（Ἰλιάς）及び『オデュセイア』（Ὀδύσσεια）である。それは早くよりテッサリア平原地方の吟唱詩人團によつて唱へられた祖先の功業讃歌が、イオニア植民地に傳へられ、其處で前九世紀頃の天才詩人ホメーロスにより一大傑作に纏められ、更にホメーロスの後裔と自任せる吟唱詩人團ホメーリダイ（Ὁμηρίδαι）の增補彫琢を經て今日に傳はれるものと推定せられる。『イリアス』篇はテッサリアの英雄アキッレウス（Ἀχιλλεύς）を主人公とするトロイア（Τροία）――別名イリオン（Ἴλιον）、それより『イリアス』の名は來てゐる――への希臘聯合軍遠征記であり『オデュセイア』篇はそれに參加せるイタカ王オデュセウス（Ὀδυσσεύς）が歸國の途上各地を漂浪せる冒險記である。

この二大詩篇が、神々や英雄達の純眞無邪氣なる人間的性情の發露を基調とし、アキレウスの勇氣とオデュセウスの聰明とが事態を終局の勝利幸福に導き行くことを主脈とせるは、希臘人の自由明朗なる人生觀と智勇兼備の生活理想とを暗示せるものと解せられる。而も『イリアス』篇に於けるアキレウスの師傅フォイニクス（Φοῖνιξ）の語れる陶冶理想卽ち「話のよき語り手、仕事のよき實行家であること」は、言葉（ロゴス）と仕事（プラクシス）との兼備、事物の道理をよく觀る所の理論とそれに從わしよく當ずる所の實踐との結合といふ希臘人的陶冶理想を指摘してゐる。更に友軍の名將パトロクロス（Πάτροκλος）の葬祭に希臘軍の催せる戰車競走・角力・拳闘等の競技、オデュセウスがその漂流せる理想鄕スケリア國の人達に示せる圓盤投の驚嘆すべき技倆等は、希臘人の教科內容たる體育（γυμναστική）の遠き淵源を想はせ、又この二大詩篇の彈奏朗吟そのものが希臘人の精神的教科たる廣義の音樂（μουσική）の遠き由來を證してゐる。又オデュセウスが讃嘆せるスケリア王宮の侍女達の家事手藝等の婦德並びに彼の妻ペーネロペー（Πηνελόπη）が二十年の孤閨を守れる貞操は、希臘女子教育の理想及び內容の原型を示してゐる。

かくてホメーロスの詩篇は、前史時代の希臘教育の目標と內容とを含める點に於て教育的意義を有するのであるが、而もその後イオニア・アテーナイを始め普く希臘諸國に互つて、この詩篇が祭典の一大行事として彈唱せられ、又國民教育の主要教材とせられるに及んで、それの教育的意義は測り得ざる重要性を加へ、プラトーンの言へる如く、ホメーロスは事實上「全希臘（ヘラス）の教育者」となつたのである。

第二章　古希臘時代第二期〔古典時代前期〕の教育

第一節　スパルタの教育

都市國家の成立　前史時代の後を受けて希臘の歷史時代を特色づける主要徵表は、面目顯著なる都市國家の成立である。前章に述べたる徑路によつて、希臘本土、エーゲ海の島々並びに小亞細亞各地に進出した希臘民族は、或は先住民族を驅逐乃至克服し、或はそれと和協して、それぞれの地點に永住的本據を建設した。この本據は初めの間は幾つかの小邑として散在したのであるが、やがて相互の競爭・衝突の結果、或はそれ等の一つが隣接諸邑を從屬せしめることにより、或は幾つかの小邑から人々が一箇所に集まることによつて、一段と强固なる「共住團體」となりこれが、對外的には「自由」を、對內的には「自治」を、自己維持のためには「自給自足」を享有するに至つてここに「ポリス」（πόλις）としての都市國家となつたのである。かくして成立せる諸々の都市國家は、その土地の自然的事情と、その支配階級の種族的特性と、被支配階級に對する關係とを制約として、各々の特質を發展せしめた。希臘に於ける政治・經濟・軍事等の文化と、それ等を背景とする教育とは、各都市國家の特質を前提としなければ理解せられ得ないであらう。吾々はそれ故に希臘教育史上最も顯著なる面目を發揮せるスパルタ及びアテーナイの教育を取扱ふに當つても、先づ各々の都市國家の建設とその國情とを背景として叙述しなければならぬ。

スパルタの國情と教育　スパルタ（Σπάρτα）――本名ラケダイモーン（Λακεδαίμων）。それは農耕地の上に建てられたる都邑なるが故に、播種（σπαρτός）されたる土地の意を以て、スパルタと呼ばれた――は眞先にペロポンネーソス半島に南下せるアカイア族によつて建てられた都市であるが、次いで侵入せるドーリア族の中特に强き一群團がこれを占領し、附近の土地をも併せて、前五世紀頃までには全半島に覇を稱へ、希臘全土を通じても最强の國となつた。

スパルタの支配階級たるスパルティアタイ（Σπαρτιάται）は武器を執り得る男子一萬を超えたることなき寡勢を以て、第二階級ペリオイコイ（Περίοικοι）及び第三階級ヘイロータイ（Εἵλωτας）を合せて十倍にも餘れる被支配階級の上に立ち、且つ外はアカイア族並びに他のドーリア族と對抗し、この内外の脅威に對する自衛のため自らを堅固なる軍團として組織し鍛錬する必要に迫られた。この必要に適應せる彼等の生活機構は長き傳統を通じて次第に形成せられたのであるが、彼等はこれを前九世紀頃の傳說的偉人リュクールゴス（Λυκοῦργος）の創設に歸した。リュクールゴスは軍國スパルタの國民生活をば、成文律に記し傳へる代りに、若者の心に深く植付けることによつて永久に傳へんとし、教育をば「立法家の最大最美の仕事」と考へた。强健なる子女を得るための優生學的結婚制度、初生兒の點檢取捨、嚴しき母や乳母による家庭教育、七歲以上三十歲に至るまでの男子の公共の軍隊教育等の内容は、リュクールゴスの名を負へるスパルタ教育として周く知られてゐる所である。

優生學的見地とスパルタ婦人　軍國スパルタに身を獻ずべき强健なる子女を得るために、リュクールゴスは優生學的見地に立つて先づ强健なる母を作ること、並びにその母より多くの子供を得ることを工夫した。卽ちスパルタの婦人は男子と同樣

に各種の體育を勵み、衣服の美しさよりも肉體美を誇り、ひたすらに强健なる妻たるべき修練を積んだ。結婚は相互の自由意志によらずして仲介人の取計に服從し、結婚後も男子は公共の營舍に寢するのを原則とし、時折ひそかに家に歸つて妻と會するのみであつた。この規定は却つて夫婦の愛情を永く新鮮濃厚ならしめ、彼等の活力と健康とを保持するに有效であつたと言はれてゐる。强健なる子女を擧げることは結婚の唯一最大の目的であるが故に、他人の妻又は他人の夫であつても、すぐれた者であり、よき子供の父母であると思へば、自分の夫又は妻の承認を得た上で、その理想の人と通じてすぐれた子女を生むことを國法は禁じてゐなかつた。或るスパルタ人は外人から「貴國に於ては姦通者は如何なる罰を受けるか」と問はれて、「吾々の間には姦通者はあり得ない」と答へた。蓋しリュクールゴスの考によれば、子供は國家公有の財產であるが故に、國家に對してよき子供を生むためには、他の男女と關係しても姦通とはならないのである。尤もこの事の故にスパルタの夫婦が貞節を輕んじたといふのではなく、彼等が操守固くして離婚の如きを殆んど考ふべからざる罪惡としてゐたことは史家の傳へる所である。婦人はかく國家に對する貢獻の故に、男子に對しても何等卑屈の心情はなく、高邁なる態度でこれに臨んだ。或る外人がレオニダスの妻ゴルゲースに向つて「あなた方ラコニケー（スパルタの別名）の婦人だけが男子を支配してゐる」と讃嘆したとき、彼女は「私達だけが男子を生むのだから」と答へた。スパルタ軍人の出征や戰死に關聯して、彼等の母親達が示した健氣な言動は、周く世人の傳へ知る所である。

スパルタ教育の設備　さて初生の男兒は父が「レスケー」のと呼ばれる公會堂に伴れて行く。「レスケー」は何時でも開放せられてゐる集會所で、社交上の會合を行つたり、天候の惡い日に通行人が避難したり、放浪者や貧民の宿所となつたりする場所であるが、そこで各區から出てゐる十人の長老が嚴重に初生兒を檢査し、體格がよく强健であれば、その父に養育を命じ、同時に抽籤によつて土地の分前を與へる。若し虛弱又は畸形であればタイゲトス山の麓にある岩窟、所謂「アポテタイ」に遺棄した。蓋しかかる子供を育て上げるのは、當人のためにも國家のためにも、不利益であると考へたからである。母親も亦初生兒を溫水に浴せしめる代りに葡萄酒に浴せしめた。何故ならばそれによつて、病弱な子供は痙攣を起し感覺を

矣ふのであるが、强健な子供は却つて益々鍛へられて强健な習慣を得ると信ぜられてゐたからである。乳母も亦幼兒を襁褓に包むことなくして四肢の自由な發育を圖り、飲食物を貧澤に流れしめず、暗黑や孤獨を怖れしめず、すねたり泣いたりすることを許さなかつた。スパルタの乳母はこの嚴格な育兒の故に有名であり、外國から雇はれることもあつた。（例へばアーナイのアルキビアデースの乳母アミュクラはスパルタ人であつたと言はれてゐる。）

男子七歲に達すると國家の手に移され、少くとも八千人乃至九千人の兒童が共同敎育場に於て、共通の訓練と養育とを受けた。ここでは國家が最もすぐれた人々の中から選任した兒童監督官が敎育を總轄した。兒童は多數の分隊に分けられ、若干の分隊を合せて中隊が編成せられ、分隊長と中隊長とがそれぞれ上級の青年中から選拔せられて、各分隊及び中隊に附けられ、兒童監督官の指揮を受けて、部下の訓練に當つた。これが卽ちエイレーン若しくはイレーンと呼ばれた者である。兒童は讀み書きに關しては最少限度の用を弗ずる程度のみを學習し、主力を服從・忍耐等の修養と、戰鬪への準備敎練とに注がせられた。彼等は頭髮を短く刈り、素足・薄着で過し、且つ大部分は裸體で遊ぶ樣に慣らされた。十二歲以後は下着を禁ぜられて、唯一年に一着の上着だけが供せられた。そのために彼等の身體は甚だしく汚れたにも拘らず、入浴や油を塗ることは一般に禁ぜられ、唯一年間に若干の日を限り許されたのみである。十五歲以後は彼等自らの手を以てエウロタス河から採取して來た蘆の穗を床として眠り、冬期はそれに所謂リュコポーン（蒭の毛、それに溫熱が含まれてゐると考へられてゐた）を加へた。

食物は粗末で且つ乏しかつた。それは一面には肥滿を防いで體格の美と動作の敏活とを期するためでもあつたが、主たる目的は兒童をして食物を自ら得しめるためであつた。エイレーンは輩下の兒童に對して、成長せる者には薪を、幼ゝ者には野菜等を盜み來るべきことを命じた。彼等は巧妙に盜んだ場合には賞讃せられたが、拙劣で發見された場合には、烈しく鞭打たれ、又飲食の罰を受けた。或る少年の如きは狐を盜んで上着の下に隱し、內臟を喰ひむしられて死するまでそれを顯はさなかつたと傳へられてゐる。

兒童監督官の下には鞭撻係が附いてゐて、兒童に不都合な者があれば常に鞭打つのであつた。更に苦痛を默つて忍ぶ習慣を養ふために年々アルテミス若しくは別名オルティアの祭日に鞭撻の行事が行はれ、兒童は血の出るまで鞭打たれた。最も長い間一言も苦痛を訴へずに忍んだ者は勝利の榮冠を授けられたが、大部分の兒童は人事不省に陷り、中には死に至る者もあつたと傳へられてゐる。

十八歲から青年の仲間に入るのであるが、初めの二年間卽ち二十歲まではメルレイレーン（將にエイレーンたらんとする者の義）若しくはメルリレーン（將にイレーンたらんとする者の義）と呼ばれ、二十歲から三十歲までを眞の青年期とし、エイレーン若しくはイレーンと呼んだ。青年は頭髮及び鬚を蓄へることを許され、專ら軍事の訓練を受け、實戰にも參加した。彼等青年の中、特に優秀なる者三百人が選ばれて國王の護衛軍を編成し、就中オリュムピアの競技に優勝せる者は、戰時に於ては國王の馬前に戰ふの光榮を有してゐた。この三百人の近衛軍は固より衆目仰望の的であつたが、併しそれに列し得なかつた青年と雖も私情を以て不滿・怨嗟の念を抱くことなく、寧ろ自分よりも更に優れた同胞が三百人あることを祖國のために祝福した。第二波斯戰役（前四八〇年）にスパルタ王レオニダスが率ゐてテルモピュライの險に奮戰し、悉く祖國に殉じた有名な三百勇士は、この青年近衛軍であつたのである。

三十歲から大人として完全なる市民權を與へられたけれども、多くは公共の營舍に起居して、諸々の公職を果しつつ生活した。若し特定の職責に當つてゐない場合には、後輩を敎育し又先輩から敎育せられつつ日を過すのであつた。

スパルタ敎育の內容及び方法　以上は年齡の發達に應ずる敎育の段階であるが、その間に課せられた敎育の內容を示せば大略次の如くである。先づ體育に關しては、兒童期には競走・跳躍・角力・槍投・圓盤投並びに軍事訓練が課せられ、青年期に入ると、この外更に、拳劍・乘馬・水泳・狩獵が加へられた。拳鬪と格鬪とは單に競技者のみに必要であつて、戰鬪の準備には適せぬものとして、スパルタでは一般に禁ぜられてゐたが、それに反して舞踏殊に武器を持つて行ふ演武舞踏は大いに愛好・尊重せられた。スパルタがオリュムピア競技管理の實權を握りながら、派遣選手の數も少く、成績の振はなかつ

たのは講技を餘技として修練することがなく、專ら軍事上の目的に從屬せしめたからである。

次に精神的教養は體育に比して著しく制限せられてゐた。イソクラテースがスパルタ人達は「文字さへも知らない程である」と貶したのも至當であつて、假令最少限度の用を辨ずるための讀み書きを習ふことはあつても、より高き精神的教養への憧れと努力とは決して有つてゐなかつた。但し音樂だけは祭典や軍事上の用具として尊重せられ、兒童は早くから竪琴と笛とを奏することを――恐らくは特定の教師によつて――敎へられた。而もそれ等は必ず歌詞に合せて奏せられ、行列歌・諧美歌・舞踏歌・進軍歌等が歌はせられた。これ等は何れも體育及び軍事訓練と結合して行はれ、その單純なる調子、活潑なる律動、勇敢なる歌詞が、軍國の民の心情をそれに適はしく陶冶した。或る祝祭の合唱に於て、老人の一團が先づ「吾等は昔で勇ましき功績を遂げ、强き若者にてありき」と歌へば、青年の一團がそれを承けて「今こそ吾等は斯かる者なれ、いざとなれば試み給へ」と歌ひ、最後に少年の一團が、「吾等はやがて卿等の何れにも優りて强くなるべし」と結んだ。彼等の唱へたる歌詞が凡そ如何なるものであつたかはそれを以ても一斑を覗ひ得るであらう。

その他の精神的教養に關しては、特定の系統的施設の下には課せられなかつたけれども、日常生活の間に屢々これを受けス機會を有つてゐた。兒童や青年も大人の會食團と共に會食し、そこに交される政治・軍事の談論、人々の毀譽褒貶、特にもスパルタの誇りであつた短く鋭き皮肉と諧謔等によつて多大の感化・教育を受けた。殊に兒童の教育を擔當したエイレーンは食事後、彼等に歌を唱へさせる外、國家の偉人やその言行に就いて種々の質問を發し、簡潔にして肯綮に當れる答を要求した。そして答の不出來な者に對しては鞭として親指を噛んだ。大人もこの問答に立會ひ、若しエイレーンが兒童を不當に厳しく、或は不當に寛大に制した場合には、兒童の去つた後にエイレーンを制するのであつた。その他尙後節に詳說する如く兒童及び青年と大人との間に同性愛的結合があり、それによつて愛せられる若者は愛する壯年者から絶えず模範を示され薫陶を與へられた。かくて兒童及び青年は行住坐臥先輩の教育を受け、スパルタの國民生活そのものが實に一大教育機關であつたのである。

スパルタ教育の全體的特色とその史的意義　これを要するにスパルタの國民生活と國民教育とは、個人を全く國家の一員として奉仕せしめることを根本的特色としてゐた。そこでは人が人として生活し、人としての多方面の教養を積むといふことは考へられず、人は唯國家の成員として、その國家の存續に奉仕する限りに於てのみ、存在の理由を有してゐた。而もその國家は內外の敵に對する防衛を根本使命とする「武人國家」であるが故に、國民生活の樣式と教育とは、すべてそのために統制せられ、一切の價値活動は勇敢なる軍國の戰士の育成といふ最高價値に從屬せしめられて、そこに、建國期の羅馬と共に、武人國家の類型が形成せられた。從つてスパルタに於ては上下長幼の階級と秩序とが嚴重に守られ、私的生活が極度に壓縮されて公共生活が强要せられ、一般に精神的教養よりも體育が、精神的教養の中では知育や美育よりも德育が尊重せられ、かくて强壯・敏活にして熟練せる身體と、服從・忍耐・廉恥・勇氣・犧牲等の德に充たされたる精神とが陶冶せられた。そしてこれ等の陶冶は特定の教育的施設機關を通じてではなく、國民の公的共同生活それ自身の中に行はれ、教育と實生活とは不可分に結合して一個の强靱なる陣營國家がそのままに一大教育場であつた。

かくの如き國民生活と國民教育とを規制するものは、成文の法律や特定の權力者ではなくて、多年の傳統に培はれたる慣習そのものであつた。スパルタ國民は實に慣習への固着、傳統の墨守に於て最も顯著なる特性を示し保守主義は彼等の性格の根本的特質であつた。スパルタ國民の生活と教育とが歷史上に極めて明確なる一典型を遺し、その印象が永く鮮かに人々の腦裡に刻まれたのは、それが單に軍國主義を比類なき程に徹底せしめただけでなく、かかる國家形態を保守的國民性が支持して、他の諸國の目まぐるしき變轉にも拘らず、スパルタのみが

數百年間を通じて殆んど變りなき面目を維持したがためであつた。

而してこの顯著なる國家形態は、次節に述べる所のアテーナイと相對して、個人主義に對する國家主義、文化主義に對する軍國主義・自由主義に對する統制主義の原型として、人間生活の歴史を通じ、永遠に一個の生活類型を代表すると共に、それは既に希臘人自らに於ける一派のイデオロギーとなつてゐた。プルータルコスが指摘してゐる通り、希臘諸國の人々は、「スパルティアタイの都市をば、秩序ある生活と統制ある國家との指導者として教師として、仰ぎ見た」のみならず、後に前四世紀頃の思想家、例へばプラトーン、ディオゲネース、ゾェーノーン等が國家論を誓くに當つては、何れもリュクールゴス的國家形態を範型として念頭に浮べてゐたのである。更に前三世紀に入つてスパルタ王のアギス四世やクレオメネース三世は、リュクールゴス時代への復歸を標榜して國政の改革を企てた。實際運動が傳說を指導精神として動くに至つては、傳說は最早單なる傳說ではなくて生ける力である。假令これ等の運動が、スパルタの頽勢を挽回するに至らず、腐敗せる富者・故老達の反對に遭つて空しく挫折したにもせよ、リュクールゴスの名に結合せる本來のスパルタ的觀念形態が當代の爛熟軟化せる人々に取つて戰慄畏怖に値するものであつたことは容易に想察せられる。かくしてスパルタ的國家そのものが一個の偉大なる教育力を發揮し得ることの外に、所謂スパルタ式教育が、凡そ硬教育の代表として、あらゆる軟弱と放縱と個人的自我への誘惑とを警める力を藏してゐることは世上周知の事實である。

吾々はそれ故に、スパルタ國民がドーリア種族中に於ても特にすぐれたる種族的特性と、その建國の事情・體制よりして樹立し維持した堅固なる軍國主義的國民生活と教育とを、歴史に於ける比類なき個性として認識する

と共に、その原型は、凡そ國民生活と國民教育とを國家の徹底的統制下に置き、國民の心身を不斷に鍛錬し强化せんとする者に取つて、永遠に一個の指導精神であることを認めるのである。而してかかる國家と教育とが人間生活一般の理念に照して如何に批評せらるべきかは、次のアテーナイの叙述と併せて考究せられるであらう。

第二節　アテーナイの教育

アテーナイの國情と教育　希臘本土のアッティカ州には、土着の種族と新來のイオニア族との混血によつて、進步的な、融通自在の、而も調和・均衡ある種族が生じた。彼等は初め多くの小國に分立してゐたが、就中最强のアテーナイ（Ἀθῆναι）が――傳說によれば建國の英雄テーセウス（Θησεύς）王によつて――平和的に他の諸國を併せアッティカ州を統一してアテーナイがその首都となつた。當初の王政は漸次に制限せられ、前六八三年には貴族選出の九人の執政官（ἄρχων）による寡頭政治となり、而も支配階級たるエウパトリダイ（εὐπατρίδαι）即ち貴族と、第二自作農階級たるゲオーモロイ（γεωμόροι）及び第三勞働階級たるデミウールゴイ（δημιουργοί）の庶民との反目抗爭とその緩和策とを通じて、國家形態は次第に民主的傾向に進んで行つた。

前五九四年に詩人・賢者・愛國家たるソローン（Σόλων, 638—558）が衆望を負うて執政官となり、先づ經濟對策を講じて庶民の負債を輕減し、次いで民主政治の基調に立ちながら、財產の多寡によつて權利・義務を分ける金權政治（πλουτοκρατία）と、賢者・經驗者を尊重する精神的貴族主義とを加へて、アテーナイの眞に堅實なる發展を保障すべき法制を布いた。彼の法制は併し教育に關しては殆んど積極的規定を有せず、所謂ソローンの教

育法規も大部分學校風紀の消極的取締であつて、一般には唯子供の教育を忘れる親は子供の扶養を受くる資格なきことを明示したのみである。ソローンの名と共に傳はれるアテナイの教育はそれ故に、アッティカ族の明朗自由なる資性とそれによつて形成せられたる民主的國家生活とを背景として、放任の間におのづから發達せるものであつた。その內容は既に世上周知の所であるが、特にスパルタとの對比に於けるそれの根本的特質を擧げるならば、第一に國家の成員としての人間のみを理想に置かずして人間性の多方面の調和的發展を理想とせる點に於て就中希臘的なる陶冶理想を代表し、第二に併し希臘末期の個人主義的頽廢に陷らずして國家の成員たる顧慮をも十分に具へ、玆に人間的教養と國民的教養とがスパルタのそれよりも高き國家理想に於て綜合せられ、從つて第三にその教科內容は體育・軍事の偏重を避けて讀書・詩歌・音樂等をも尊重し、第四にかかる理想・內容を有する教育は公立の體育場（γυμνάσιον）の外に、私設の教授所（διδασκαλεῖον）や體操練習所（παλαίστρα）に於て、而も强制收容によらざる自由通學によつて行はれた。最後に女子の教育はクセノフォーン（Ξενοφῶν, 431—355）の『家政論』（Οἰκονομικός）に於けるイスコマコス（Ἰσχόμαχος）の妻の教育に現れたる如く、ホメーロス以來の希臘女性本來の理想に從つて、良妻賢母主義を原則とした。

ソローンの教育的法規　ソローン法規中、特に重要なる教育的意義を有するものは、結婚に關するものと、生業に關するものとである。プルータルコスの所傳によれば、ソローンは一般に結婚が精神的には愛によつて、肉體的には良き子供を生み得べき條件に於て、行はれねばならぬことを規定した。從つて年齡の點で不適當の者や、愛なき者の結合は禁止せられ、又財產を目的とする婚姻を防ぐために、花嫁の持參すべき物は衣服三通りと僅少の家具とに制限せられた。夫婦の貞操も嚴重であつて、姦通罪の現行犯を捕へた者には犯人を殺すことを許し、又强姦や合意の姦通はそれぞれ個金に處せられた。正式の妻に

あらざる女—ヘタイラ—から生れた子供は父を扶養する義務なきものとせられた。（何故ならばこの場合の父は、子供のために妻にではなくして享樂のために女と結合したのであるから。）次にソローンは、アテーナイが元來天產に乏しく、人口は益々增加し、而もスパルタのヘイロータイの如き生產階級を地盤に有せざる事情に鑑み、國民のすべてに商工業を奬勵した。この目的のためにソローンは、父から何等かの業務を敎へられざる子供は、父を扶養する義務なきものと規定し、監督機關たるアレオパゴスをして國民各自が必ず何等かの生業に從事する樣に監視せしめ、生業なき者をば處罰せしめた。

右の如き法規はアテーナイ國民の眞摯着實なる生活指針として、教育の健全なる背景となつたものであるが、ソローンは國民教育そのものに就いては何等積極的規定を設けなかつた。アイスキネースのティマルコスに宛てた書翰を通じて傳へられてゐる「ソローンの教育法規」も大部分は學校の風紀取締に關する消極的規定に過ぎない。卽ちその條項は次の如きものである。

（一）すべての市民はその息子に體育と文藝との教養を受けさせる義務を有する。この法規に背ける兩親は非難に値する。その子供に相當の教育を受けさせた兩親のみが成長せる子供によつて扶養せられる資格がある。（二）如何なる學校も日出前に教師によつて開かれてはならず、又日沒後にはすべての學校は閉ぢられねばならぬ。（三）兒童が學校に居る間は大人は何人も學校に入つてはならぬ。但し教師の子や孫や婿はこの限りでない。この規定に抵觸した者は死刑に處せられる。（四）ギュムナシオンの長は、ヘルメース（體育の神）又はムーサ（文藝の神）の祭（その機會に少年達は氣晴しの爲にギュムナシオンの中を自由に逍遙するのであるから）の日に大人を入らしめてはならぬ。これを守らず侵入者を退出せしめない場合には彼は少年凌辱者と同じ法によつて罰せられる。（五）少年の合唱團の世話をする團長は四十歲以上でなければならぬ。（六）奴隸は體操場に於て香油を塗つたり體操を練習したりしてはならぬ。（七）十ドラクメー以上の價のある物を學校から持去つた者は死刑に處せられる。（この法規の趣旨は後述のエロースの風習に於ける弊害の側面と併せて再說せられるであらう。）

かくの如く、アテーナイに於ては、スパルタとは反對に、國家が國民教育に干渉せざることを原則としてゐた。蓋しソローンによつて代表せられたるアテーナイ人一般の見解によれば、人間陶冶は國家の政治的手段に供せられるには餘りに高いものであり、國家も亦その存立のために成員の自由なる人間性を虐げるには餘りに高いものである。換言すれば、人間性の自由なる發展こそ眞の國民を作り眞の國家を存立せしめる所以と考へられてゐたのである。それ故に吾々が以下に叙述するアテーナイの教育は、大體に於てソローン時代よりペロポンネーソス戰爭まで、即ち所謂古典時代前期を通じて、アテーナイの不文律的慣習として行はれた教育事實である。

幼兒の教育　先づ初生兒(プレフオス)はスパルタに於ては禁ぜられてゐた所の襁褓を以て溫かく包まれ、五日目又は七日目に助產婦がその兒を抱いて家の神壇の周りを巡廻して浮めの式を行ふ。故にこの日を「巡廻日」といひ、この式を「巡廻式」と呼んだ。當日は家族が祝宴を開き、家の扉には男兒の場合には橄欖の環が、女兒の場合には羊の毛が飾りつけられた。十日目に命名の式が行はれ、同時に父により「正當の子」として確認せられた。通常長子には祖父の名が與へられ、又は特に或る神若しくは神の性質から名を藉りてその子をその神の特別なる保護の下に置くことが行はれた。この日には出產の神ヘラに供物を捧げ、親戚知人が子供に贈るべき金屬製及び陶器製の玩具を携へて祝宴に招かれ、母は特に描かれた食器類を子供に與へた。

乳呑兒(パイダイオン)の養育に就いては初期のアテーナイに於ては母が親らこれに當つたが、やがて裕福な階級では乳母を（特にスパルタから）雇ふことが行はれ、それがつひにイオニア諸國一般の風習となつた。嬰兒は各種の（紐形や腰掛などの）搖籃に入れて育てられ、子守歌を聞き搖り動かされつつ眠るのが常であつた。離乳期以後の兒童(パイス)に對しては乳母の代りに侍女が雇はれ、弟に類する軟かき食物、特に蜜を以て養育した。但し母と乳母も常にこれに協力して養育に注意した。玩具を以て子供を樂しく遊ばせ人生の黎明に於て喜悅を味はせることがやがて成人後の明朗な性質を養ふ上に必要とせられた。玩具としては女兒には粘土で作られ色彩を施された人形、男兒には鴨・白鳥・雷鳥等が與へられ、遊戯としては王樣ごつこ・目隱し・球投げ・胡桃や缺片を水面に投げること・竹馬・獨樂・ぶらんこ等が行はれた。母親は又子供の道德的調育に重きを置き、早くから

羞恥心・羞恥心を敎へ、優雅な行儀よき子供に躾けた。男兒は特に嚴格な訓練を受け「打たれぬ人間は敎育せられない」とはアテーナイの喜劇詩人メナンドロスの有名な詩句であつた。そして母親は自分の草履を以て子供を打つのが常であつた。

少年の教育　男兒七歲に達すると侍女の手を離れて童僕(パイダゴーゴス)の監督に委ねられ、兒童教育の第二期たる教育(パイデイア)が始まる。童僕には通常聰明端正にして敎養ある奴隷が選ばれたが、往々にして又老朽のため他の用に立たぬ奴隷が選ばれることもあつた。彼等は子供の行く所には何處でも從ひ、特に學校と體操敎習所とに、書籍・學用品・樂器等を携へてついて行つた。そして子供に禮儀・作法・容儀・擧止等の「端正」に就いて躾けをした。

精神的敎養に關しては私立の學校に於て先づ文字・綴り・文章を習つた。初めは蠟板に金屬又は象牙の筆を以て書き、やがて紙（特に反古紙の裏）にインクを以て習つた。「讀み書き」は必須の基礎敎科であり、その上に神話を聽かせて宗敎的憧憬を奬ひ、然る後にキタラ琴又はリュラ琴の彈奏と唱歌とを敎へた。算術も種々の遊戯と結合して面白く敎へられ、又手指や算用石を用ひて敎へることが行はれた。讀み書きの基礎的陶冶を終へた者は詩を敎へられた。詩はそれによつて理解力を練り、心情を優雅醇正ならしめ、偉大高尙なる活動への憧憬を鼓吹するために課せられた。その目的に選ばれた敎材はホメーロスの叙事詩、ヘーシオドスの敎訓詩、シモーニデスの弔歌、テオグニス及びプォーキュリデースの格言詩等であり、何れも倫理的基調を帶びてゐた。是等の朗吟及び暗誦に於ては、第一に發音の正確、次に抑揚强弱・調子律動が修練せられた。

この時期の體育はパライストラ（體操敎習所）に於てパイドトリベース（體操敎師）より學んだ。體操敎習所(パライストラ)は私立で、專ら少年の體育を目的として設けられたものである。所謂五種競技即ち跳躍・競走・圓盤投・槍投・角力が課せられ、體育の守神ヘルメースの祭日には觀衆の前で五種競技を行はせた。これと竝んで早くから水泳も課せられ、「泳ぎも讀み書きも出來ない」とは無學無能を代表する標語であつた。その外なほ合唱舞踏も行はれ、永き練習の後に祝祭日には盛大に實演せられた。

青年の教育　男兒は十六歲に達すれば、メイラキオン（若者）と呼ばれ、通學を止め童僕の監督を離れる。十八歲より二

プエーボス（青年）の仲間に入れられる。同族組合の一員としてその名を登録せられ、劇場の群集の前で槍と楯と黒の外套とを與へられ、武裝してアクロポリスの丘の下なる殉國の女神アグラウロスの神殿に於て新誓を捧げる。（アグラウロスは曾て戰爭の時アテーナイの勝利の新願のために犧牲として身を神前に供したと傳へられる處女であり、それを祀れる神社に青年は殉國の新誓を行ふのである。）その誓詞は「私はこの武器を決して汚さず、戰友を見棄てることもしないであらう。一人でも他の人々と一緒にでも神々のためと祖國の安寧のために戰ふ。私は私の受繼いだ祖國を決して小さくすることなく、海に於ても陸に於ても、より大きくして後に遺すであらう。私は常に決定を行ふべき人々の言を聽き現行の法律を從ひ、國民が心を一にして定める所のすべての事に服し、若し誰かがそれ等を破棄し服從せぬ場合にはその人を容赦することなく、一人でも他の人々と一緒にでもそれ等を擁護する。更に私は祖國の宗教を尊崇する。その誓の保證として、アグラウロス、エニュアリオス（戰の神）・アレース（戰の神）・ゼェウス・タルロ（成長の女神）・アウクソー（成長の女神）・ヘゲモーネ（指揮の女神）の神々を立てる。」といふのであつた。そこには勇武の戰士としての覺悟と善良なる市民としての抱負とが併せ示されてゐるのである。

青年は（既に十六歳以後）ギュムナシオン（體育場）に於てギュムナステース（體育官）の指導の下に體育を修めた。ギュムナシオンは公立の體育場でその經費は半官半私のものであつた。青年と大人とは此處に會して相互に身體の鍛練と精神の修養とに努めたのである。ギュムナシオンの中で特に有名なものはアカデーメイア、リュケイオン、キュノスアルゴス等であつた。ギュムナシオンの體育種目は前記五種競技の外に拳闘と格闘とが加へられた。又特に青年期の軍事練習として重い武器を持つての戰闘演習や馬上射術・石投げ・馬術・競馬・戰車競走等が課せられた。水泳や舟の操縦も教へられたやうである。

かくて修練せられた諸技能は機々の機會に於てこれを演示し又檢閲を受けた。特にペリポロイ―巡察人の意―と稱し國境に天幕生活を行ひ或は國内の聖地を保護する任務を課せられた。この事は祖國守護の軍事的・警察的修練となつたばかりで

なく、鄕土の地勢・風土・人情を知るに役立ち、鄕土科に匹敵する效果を收めた。又記祭に於ては青年は市民の花として顯著なる役割を演じた。農業の神デーメーテールを祀れる古き社のあつたエレウシスはアテーナイより西北數哩にある海港であつたが、その祭には青年等は大なる行列の先頭に立つて「神聖なる街道」を練り行き、且つ祭の重要行事として競技を行つた。又一般の葬祭たるエピタプイオンには青年は松明競走を儀した。アテーナイの守護神としてパルテノーンに祀られてゐたアテナーのために四年毎に催されるパンアテーナイアの大祭には青年男子は騎馬又は戰車に乘つて美しく堂々しく行列を行ひ、又各種の競技に參加した。短距離競漕もサラミスに於けるアイアスの祭やミュニキア（ピレウス半島の小丘）に於けるアルテミスの祭に行はれた。是等諸々の記祭には青年は又舞踏合唱その他音樂上の競技も行つたから音樂の教養も兒童期より更に高められたのである。但し一層高き精神的教養―科學・哲學・文學等―の普及は古典時代後期ソフィステース の出現と共に始まり、前期には未だ特筆すべきものがなかつた。

男子二十歳に達すると市民權を得て政治に參加した。そしてソローン以來の法制の下に或は大官として或は議員として、行政司法・立法に當ることにより、公民としての教養をおのづからに修得した。ソローンは國民をして政治的關心を失はざらしめんがために、必ず何れかの政黨に屬せしめ、然らざる者には市民權を剝奪したと傳へられてゐる。且つ又成人と雖も心身の修養は決して怠るものではなく、ギュムナシオンを訪れて青年と共に體育及び音樂にいそしみ、益々强健高雅なる心身の陶冶に努力したのである。

上述の如き「自由民に適はしき教育」―自由教育の原義は玆にある―は勿論貧民の子弟には得難きものであり、是等貧兒達は早くから生活のために働かされ、極めて低き程度の讀書算術と體育とを修めるに過ぎなかつた。又孤兒に對しては後見人が定められて十八歳迄の扶養と教育とが托せられ、十八歳以後には同年輩の青年團員として取扱はれた。祖國のために戰死せる者の孤兒は特に優遇せられた。

女子の教育　アーテナイに於ける女子は男子に比してその地位遙かに低く、專ら家庭の人として家事・紡績・裁縫・育兒

に勤み、體育や精神的教養に關して何等特別の機關による教育を受けなかつた。男兒が學校や體操教習所に通ふ頃にも女兒は家に留まつてゐなければならなかつた。クセノフォーンの『オイコノミコス』（家政論）といふ書物はその著作年代は古典時代後期に屬するけれども、アテーナイに於ける女子の教育の殆んど前後變りなき趣を傳へてゐる。それに於てイスコマコスがソークラテース に問はれるままに自分の妻の教育に就いて語つてゐる所の要點は、彼が十五歳の妻と結婚したとき、その妻は他の知識見聞に於て極めて素養が少く、唯裁縫や料理に就いてのみよく教育されてゐたこと、それ故に彼は妻に母及び妻としての心得に就いて眞摯に教へ込み、妻はそれを素直に學び習つたこと、卽ち妻は育兒・料理・裁縫を主たる務とし、然も蜜蜂の女王の如く家政を主宰し、下婢等を統督教導し、家財道具の整頓に注意すべきこと、を教へたこと、そして妻が若し是等の事をよく行ふならば彼女は一家中で最も重き地位を占め老年に至るまで尊敬を受け、彼は彼女の召使となるであらうと言ひ聽かせたことを述べてゐる。要するにそれは所謂良妻賢母の典型であり、ホメーロス時代の女子の陶冶理想をそのまま發展せしめたものと見ることが出來るのである。

アテーナイ教育の全體的特色とその史的意義　以上が古典時代前期に於けるアテーナイの教育の大樣である。それがスパルタとの對比によつて示せる著しき特徴は、第一に國家の成員としての人間のみを陶冶理想に置かずして人間そのものの完成を陶冶理想とせることであり、それは教育本來の理念—所謂「人文理念」（Humanitätsidee）—を最も典型的に目ざせるものである。第二に併しそれは古典時代後期に根ざし世界主義時代に頂點に達したる個人主義陶冶理想に未だ至らずして、國家の成員としての顧慮をも十分に具へてゐた。この事はまた反面に於てアテーナイの國家理想がスパルタのそれに比して遙かに高級であつたこと、換言すれば自由人としての教養と矛盾せざる國家、却つて國民各自の人間的教養の高さと豐かさとに於てその光耀を誇るべき國家がアテーナイ人の念頭に思

慕されてゐたことを示すものである。第三にかかる陶冶理想を追求するための陶冶內容がそれ故に、スパルタに比して多方面であり豐富であつた。體育それ自身がスパルタに於ける如く苦難の耐久力と軍事的修練とのためのみ爲されたのではなくて、寧ろ身體各部の調和的發展によつて全身の「よき律動」と「よき暢達」とを齎らすために行はれた。その健全にして美しき肉體的基礎の上に、善良にして聰明なる精神的教養を加へ、玆に所謂「美にして善なる人」（καὶ καὶ ἀγαθός）若しくは一言して「善美」（καλοκἀγαθία）の理想が實現せられたのである。最後にかかる理想と內容とを具へたるアテーナイの教育は公立の教育機關によつてではなく、私立のそれによつて行はれることを原則としてゐた。家庭や私塾風の施設がアテーナイの教育の本來の舞臺であつたのである。

上述の如きアテーナイ教育は、凡そ希臘人的教養の代表となつたのであつて、後世の人々が希臘人を讃美し希臘文化の復興を希望する場合には、常にアテーナイの人と文化とが思慕せられてゐた。わけても文藝復興期の「人文主義」及び最近世の「新人文主義」はアテーナイの自由教育（παιδεία ἐλευθέρα）を範型としてそれの再生を强調した運動である。古典時代前期に於ては併しながら、上述の一般的特徴は未だ完全に實現したのではなく、唯かかる教育への方向が、準備が、基礎工事がなされたといふに過ぎない。アテーナイが眞に全希臘の教育場となり、「アテーナイに學べる者は他の人を教へることが出來、希臘人であるといふことは單に希臘に生れた者の謂ではなくてアテーナイの教育を受けた者の謂である」と言はれるに至つたのは古典時代後期のペリクレース治下のアテーナイである。而もかかる黃金時代の出現がソローン的なるアテーナイに於て用意されてゐた所に、古典時代前期のアテーナイの文化と教育との歷史的意義が存するのである。

第三節　汎希臘的競技とその教育的意義

汎希臘的精神と競技　希臘民族はその種族的特性と地理上の障壁とによつて分離對立せる多くの都市國家を形成しながらも、それ等の分立を超えて汎希臘的精神に結ばれてゐた。それは既に述べた如く、彼等の間に傳承せられた傳說が彼等をば同一の祖先ヘ〝レーンの後裔として血族的意識に結合せしめてゐたためであり、又彼等の愛誦し共鳴したホメーロスの詩篇が、彼等の祖先先輩をしてトロイア遠征のために汎希臘的結成をなさしめてゐたことにも起因したのであるが、他方に於て又既に對立的に發展せる希臘諸國家の間に國際的祝祭が行はれ、そこに各種の體育及び文藝の競技が行はれたことに因るのである。

競技は原初は死者の靈を弔ふために起つたのであるが、やがて神に獻げるために催され、それも地方的小祭より漸次に國際的大祭となり、前六世紀の初頃にはオリュムピア（Ὀλυμπία）、ネメア（Νέμεα）、コリントス（Κόρινθος）、デルプォイ（Δελφοί）の四箇所に國際大競技が行はれるに至つた。就中隆盛且つ重要であつたのはオリュムピア競技である。それはエリス國なるオリュムピア平原に於てゾェウス（Ζεύς）の神の祝祭として行はれた。その起源は遠くドーリア族移住前と推定せられるけれども、エリス市民とピサ市民との間にその管理權の爭奪があつて一時衰へ、前七七六年に兩市の共同管理の下に復活し、これを紀元として爾來はスパルタの後援の下にエリスが管理し、全希臘からの選手を迎へて、四年毎に行はれ、後三九四年東羅馬皇帝テオドシウス（Theodosius, 378—395）によつて廢止せられるまで二九三回を繰返した。

オリュムピア　ペロポンネーソス半島の西海岸アルプェイオス河の河口から十一哩ほど遡つた所にオリュムピアの平原がある。東北遙かに雪を頂いたエリュマントスの嶺を仰ぎ、近くはそれの餘波たるクローノス及びピーサの丘を北から東方へかけて控へ、その緩かな斜面には所謂アルティスの森が茂り、無花果・オレンヂ・楡・葡萄等の樹が美しく丘陵を彩つてゐる。南にはアルプェイオス河、西にはその支流たるクラデオス河が靜かに流れてゐる。この小さな峽谷―クローノスの麓から兩河の合する所まで長さ七五〇呎幅五五〇呎の小丘陵平原―には古くからゾェウスの社殿があり、その神域を「アルティス」と呼んでゐた。蓋し「神聖なる森」の謂である。このゾェウスの神殿を中心として他の多くの神々の祠・彫像・競技場其他の公共施設があり、是等を一括して「オリュムピア」と呼び、ここに所謂オリュムピア競技が行はれたのである。

オリュムピア競技の起源及び復活　オリュムピア競技は希臘の英雄ヘラクレースがペロプスを弔ふために創めたと傳へられてゐるが、ゾェウスの祭として行はれたのも古くからのことである。卽ちアカイア族の半島移住以前からゾェウスの祠はあり、その祭典に競技が行はれるに至つたのはアカイア族の移住後ドーリア族の侵入前であつたと推定せられる。但しこの競技が重要性を得たのはドーリア族侵入の後であり、而も彼等が攻略征戰を終へて平和を迎へ覇權の確保に腐心するに至つた後のことである。この競技は初めはピーサ市が管理してゐた。ピーサはオリュムピアの東方約六スタディア（一一五四米）にあり、オリュムピアの神域はこの都市の領内にあつたので、その競技もこの都市で管理してゐたのである。エリスの市民はこの管理權を奪ひ取らんとしたが、ピーサ市民は神への宗敎的尊崇の故によく抵抗してこれを保持した。この爭亂のために競技は一時衰へてゐたが、やがて兩市の講和が成立し、共同管理の下に競技が復活した。これが卽ち紀元前七七六年であり、所謂オリュムピアード（原名オリュムピアース）の紀元をなしてゐる。その時エリスの王はイピィトス、ピーサの王はクレオステネースであり、この復活第一回の競技に優勝した者はエリスの青年コロイボスで、その種目は二百碼徒步競走であつた。ピーサの市民は併しながら常に從來の獨裁權を回復せんと圖つたのでこの兩市共同管理は不成功に終つた。そしてエリス市民はスパルタの支持を得て次第に優勢となり、波斯戰役後遂にピーサを亡ぼし、又州內南方のトリプュリア地方なる諸市の

反抗を抑壓してオリュムピア競技の興隆を確保した。エリスとスパルタとは後に相爭ひ、エリスはスパルタ選手の競技參加を拒絶したこともあつたが、當初は全くスパルタの援助の下にこの競技を管理し發展せしめたのである。スパルタがかくエリスを助けてオリュムピア競技を盛大ならしめたのは、この競技を汎希臘的ならしめ、而もその擁護者としてのスパルタが全希臘の指導的地位にあることを鳴く認めしめんがためであつた。換言すればオリュムピア競技の發展の背後にはスパルタの政治的功名心が潜いてゐたのである。

オリュムピア競技の經過　さてオリュムピア競技は前七七六年以來毎四年目の夏至の後の滿月の頃を下して行はれた。初めは一日で終つたが全盛時代には五日又は六日續けて行はれ、その期日を中心として前後一箇月間は、參加選手や應援見物者の往復を安全ならしめるため、全希臘に亙つて休戰が布かれた。參加國も初めはエリス一國のみであつたが、やがてペロポンネーソス半島全體に擴がり、第七九回大祭の行はれた前四六四年頃から汎希臘的となり、希臘本土は勿論、エーゲ海の島々・小亞細亞・伊太利・シシリー・埃及、遠くは西班牙までも含んで、凡そ希臘民族の住する所の殆んどすべての國々から代表選手を送るに至つた。競技種目も最初は單に二百碼のトラックを端から端まで走る短距離競走のみであつたが、漸次に一往復・七往復・十二往復・二十四往復が加へられた。又第二〇回頃から角力其他の五種競技も加へられ、第二三回頃から拳闘及び戰車競走が、第六五回頃から武裝競走が加へられた。他方又體育競技の外に詩・演劇・辯論・繪畫・彫刻・陶器術等の競技も加へられて行つた。然しオリュムピア競技の中心はやはり體育競技であつたから以下それに就いて選手の出場から氣旋に至るまでの經過の大體を述べよう。

オリュムピア競技の期日は少くとも十箇月以前に傳令を以て全希臘諸國に通告せられ、各國選手はそれぞれ故郷に於て練習を重ねる。この競技に參加する者は純粋の希臘民族の男子であり、未だ宗教的にも政治的にも刑罰を受けたることなく、十箇月以上ギュムナシオンに於て練習を積める者たることを要件としてゐた。年齢は大體十二歳から二十歳迄と、二十歳以上三十五歳迄との二クラスに分けられ、後には十歳前後の少年の競技も加へられた。

郷國で十箇月の練習を積んだ選手達は大祭の一箇月前に親兄弟を伴つてオリュムピアへ乘込み、ゼウスの神殿に祈りを捧げ、役員の檢閲を受ける。役員は一箇年前にエリスの國民より選出せられた十人の委員であり、それが各選手に就いて前述の資格檢査を行ひ、それを通過した選手は、この役員の監督の下にオリュムピアのギュムナシオンに於て更に一箇月間練習を重ねる。大祭の十一日前に役員は全希臘に令して一箇月間の休戰を通告する。ギュムナシオンに入つた選手達は毎日登頃起きて一日二食で練習を續ける。食物は牛乳のパンと燒豚、酒は飲まぬ代りに可なり大食した。練習と食事との間には入浴しマッサージを行ひ身體に松脂を塗つて疲勞を回復する。かくて一箇月間精進を續けるのである。

さて大祭は前述の如く夏至の後の最初の滿月の頃である。短い夏の夜がアルティスの森のあたりから白みかけて、オリュムピアを包む山々の輪廓が薄かに浮び出る頃、祭典の開始を告げる角笛が朝霧に閉された谷間にこだまして高らかに響き渡る。かかる牧歌的情調の漂ふ中でオリュムピア大祭の幕は開かれるのである。祭典は先づ神前に犧牲を捧げ、參列者一同の禮拜によつて式を終り、續いて競技に移る。選手一同は神前に厳かな宣誓を行ひ、やがて前述の役員（審判官）が一段高い所に立つて出場選手全體の名を厳高らかに紹介する。かくて盛々壯烈な競技は開始され、日の暮れる迄熱戰炒技を競ひ交し、五日も六日もそれが續けられるのである。

一方大祭の一箇月程前から禮拜者や應援團や觀客が全希臘の各地から續々オリュムピアを目ざして集まり、近傍に天幕を張つて露營し、あたり一帯は大きなキャムプ村と化する。商人は露店の軒を並べ一大市場を現出する。更にこの觀客の中にはすぐれた藝術家が數多く交つてゐて、選手の活躍をモデルとした詩や彫刻や繪畫が作り出される。オリュムピア競技はそれ故に宗教・政治・經濟・藝術等希臘文化の殆んどあらゆる領域に關聯して、それ等の凝結ともなり、源泉ともなつたのである。

競技に於ける選手の擧止態度は極めて厳格な規則によつて統制せられ、一旦競技場に入つた者は如何なる理由によるも退出することを大なる恥辱とし、若し退出すれば重い罰金を課せられた。競技が終ると審判官が立上つて優勝者の名とその出

身國名とを高らかに唱へ上げ、その一人々々の頭上にアルティスの森から採つた橄欖の枝を以て作れる冠をかぶせ、その右手には棕櫚の枝を持たせた。滿場は總立ちとなつて拍手を送り、殊にその選手の郷國の人々は狂喜してそれを祝した。

オリュムピア競技優勝者の優待　元來競技の賞品は主催者の物惜みせぬ態度の表現として種々の品物が與へられ、最も多く用ひられた三脚釜を始めとして盃・杯・壺・櫛・銅甲・外套等も與へられた。然し是等は古き時代に於て、又地方的小競技に於ては後世までも、用ひられた賞品であつて、國際的大競技の盛時に於ける賞品には木の枝を以て作れる冠のみが與へられた。卽ちパウサニアスの記錄によれば、オリュムピアに於ては第七オリュムピアース（前七五二年）以來橄欖を、デルプォイに於ては前五八二年以來月桂樹を、コリントスに於ては松を、ネメアに於てはみつばを用ひた。是等の木は何れも神木として尊重せられたものであり、その採伐の場所・方法・採伐者の資格等がそれぞれ定められてあつた。又優勝者の右手に棕櫚の枝を持たせることは各地の競技で一般に行はれた。棕櫚は勝利の象徴として前五世紀の末頃から用ひられたのである。

優勝選手達はその夜盛大な晩餐會に招かれ、それから威儀を整へて故郷に歸る。大抵は白馬四頭立の馬車に乘り、特に設けられた凱旋門を通つて一時には都市の城壁をそのために壞して通路を設け一華々しく凱旋する。マグナグライキア（南伊太利）やシシリー等の西方諸國の都市ではその歓待が殊に大袈裟であつた。シシリーの都市アクラガスのエクサイネートスといふ選手は四頭立の馬車に乘せられて、その市民に曳き迎へられ、三百人の人が各々二頭の白馬に乘つてこれを護衛した。勿論郷國の人々は狂喜し喚聲を擧げてこれを迎へた。優勝者の氏名は柱に揭げられ、詩人がそれを讃へて作つた歌は少年少女によつて合唱せられ、彼等の像は多く彫刻にせられ、出身國の費用を以てオリュムピア若しくは郷國に建てられた。そして郷國は彼等に樣々の褒賞を與へた。アテーナイに於てはソローンの法制によつて、イストミア競技の優勝者には百ドラクメー、オリュムピア競技の優勝者には五百ドラクメーが賞金として與へられ、且つ彼等は國家の元勳や凱旋將軍と同樣に、國立饗宴場たるプリュタネイオンの饗宴に招かれた。スパルタに於てはオリュムピア競技の優勝者は戰場に於て國王の馬前に戰ふといふ無上の光榮を得た。恐らく他の諸國に於ても是等に類する優遇が行はれたであらう。優勝者を神若しくは英雄として

祀ることも西方諸國に起り、やがて希臘本土にも行はれるに至つた。彼等優勝者をば地上の普通の人間の種族と考へずして寧ろ古の神々や英雄達の後裔と信じたのも亦自然の情であつた。そして彼等を尊信する者は强健になり病弱を癒せられるとの信仰も起り、彼等の像が各地に建立せられたのである。而して一方優勝者は宛ら凱旋將士がその戰利品を郷國の神社に奉納する如く、その競技の賞品を神社に獻ずるのが例であつた。ホメーロスの詩にはかかる事實の確證はないけれども、デルプォイの三脚釜がディオメーデースのものとされてゐるのは多分パトロクロスの葬祭競技に於て獲得せる賞品を獻納したのであらう。最も多く獻ぜられたものは最も多く賞品に用ひられた三脚釜であるが、時には賞品の代りにその競技に使用した器具を奉納することも行はれた。例へば俳優はそのマスクを、樂師は樂器を、戰車競走の優勝者はその馬と戰車又はその模型を獻納したのである。

オリュムピア競技の暗黑面　輝かしきオリュムピア競技にも裏面には人間の陷り易き暗黑面が潜んでゐた。吾々はその一つを選手の不正行爲により、他をばこの競技に對する識者の非難によつて察することが出來る。第一に競技優勝者の名譽がかくの如く强大であつただけそれだけ又選手が賄賂によつて他國に買收されることがあり、そのために罰を受けた記錄が傳はつてゐる。例へば南伊太利のクロトーンのアスティロスといふ者は第七三回より第七六回まで（488—476 B.C.）徒步競走で連勝したのであるが、その中最後の二回はシラクサ王に買收されて自らシラクサ人と稱して出場した。彼の郷國クロトーンの人々は怒つて彼の家を燒き彼の像を引倒した。又クレーテーの選手ソタデースは第九九回競技（384 B.C.）の長距離競走に優勝したが、次回にはエプェソスの國に買收されてエプェソス人として出場し、そのために追放の刑に處せられた。この類の事例は他にも可なり多かつた。特に恥づべき行爲は競技者相互の間に行はれた買收的妥協である。テッサリアの拳闘選手エウポロスは第九八回競技（388 B.C.）に三人の敵手に贈賄して自ら優勝した。この四人は何れも罰金を課せられその金でゼェウスの像六個を作り、後の競技者を誉めるための詩句をそれに刻んで競技場の入口に立てた。アテーナイの五種競技選手カルリポスも亦第一一二回競技（332 B.C.）に敵手を買收して露顯し關係者すべてが罰金を課せられ、やはり六個のゼェ

ゥスを作つて警められた。

第二にオリュムピア競技に寄せられた全希臘人の熱狂的關心の反面に識者の憂慮・警告のあつたことをも吾々は見逃すことが出來ない。哲人クセノファネースは競技優勝者に對する民衆の神的崇敬に就いて痛く慨嘆した。詩人エウリーピデースはまた當時漸く現れ初めた競技の職業化を非難した。プラトーンは戰爭に備へるための、又剛健なる品性陶冶のための、身體的訓練を强く賛したにも拘らず、當時の競技が單なる闘爭に墮し、又職業的競技者が榮養にのみ過度の注意を用ひ、その生涯を酔生夢死に終り、品性が惨忍になり易き虞のあることを嘆いてゐる。紀元後第二世紀の醫者ガレーヌスは競技が競技者自身のためにも國家のためにも利益のないことを强調してゐる。

オリュムピア競技の興廢　希臘に於けるオリュムピア競技はかくの如くにして紀元前七七六年以來四年目毎に規則正しく行はれたが、希臘の民族精神が世界主義的・個人主義的精神に崩壞し、希臘よりマケドニアへ、それより更に羅馬へと世界の覇權が移つて行く間に、オリュムピア競技も次第にその祖國愛や民族的團結や特にも宗教的信仰などの內面的支持を離れて、職業化し、興行化し、觀者の尊敬をも大衆の純眞なる關心をも失つて行つた。かくてつひに紀元後三九二年の第二九三回大祭を最後として三九四年に東羅馬皇帝テオドシウスによつて（異教神たるゾェウスの崇拜に對する彈壓として）廢止せられた。四六七年にはゾェウスの神殿もコンスタンチノープルに移されて燒かれてしまひ、オリュピアの遺跡もゴート族のために荒され、加ふるに地震の災厄さへも受けて見る影もなく崩れ埋もれたのである。

近世に於けるオリュムピア競技の復活　オリュムピアの遺跡が地下六メートル餘の底に埋もれて千三百年を經過した時、獨逸伯林の考古學者エルンスト・クルティウス（E. Curtius, 1814—96）がオリュムピア遺跡の發掘を思ひ立ち、獨逸皇帝から財政的援助を受けて六年間日夜作業を續け一八八一年つひにオリュムピア遺跡は地上に現され、古代希臘人の燃ゆる闘志と純眞なる祖國愛と民族精神と神への敬虔なる心情とが彷彿として思ひ偲ばれた。併しながらこの單なる懐古的感激が未來の世界への强き憧れとなり、全世界の青年の更生のためにオリュムピア競技そのものの復活が計畫せられたのは佛蘭西の青

年紳士、男爵ピエール・ドゥ・クーベルタン（Baron Pierre de Coubertin, 1863—）によつてであつた。クーベルタンは一八八三年に巴里の政治學校を卒業した後、二十一歳にして英國に渡り公立學校（パブリックスクール）の教育に就いて研究した。氏はトマス・フースの名著『トム・ブラウンの在學時代』（Thomas Hughs, Tom Browns Schooldays）に現れたる教育理想に深く心酔し、それを實現せる英國公立學校の教育を讃嘆し、「スポーツマンは紳士たり」といふ標語を英國教育の根本方針として深く體認した。又職業的競技の弊害に對するアマチュア競技の純眞さも氏が英國に於て痛感せる一大收獲であつた。かくて氏は佛國に歸り、當時の教養階級青年の餘りに柔弱にして享樂的なる氣風をスポーツによつて根本的に改造せんことを計畫したのである。

クーベルタンの十年に亘る苦心・勸說も中々容易には共鳴者を得なかつた。この間に氏は巴里に於ける若干のリセー及びその他の學校に競技を取入れ、一八八九年巴里博覽會に結合して競技會を催し、又米國諸大學に競技奬勵の行脚を試み、佛國內に「體育競技聯盟」を組織してその機關誌をも刊行した。一八九二年ソルボンヌに開かれた佛國體育聯盟の會合に於て氏は「古代・中世及び近世に於ける體育練習」と題する講演を行ひ、熱舞を振つてオリュムピア競技の復活を力說した。更に當時ブランセトン大學の教授たりしウイリアム・ミリガン・スルーヌ（W. M. Sloone）及び英國のアマチュア體育聯盟の幹事ハーバート（C. Herbert）の兩氏と協力して、アマチュア競技の原則の研究と促進との爲に巴里國際會議の開催を計畫し、一八九四年一月オリュムピア競技復活の必要を說いた書面を英米其他數箇國の體育團體に宛てて發送した。その年の六月巴里に英米以下十二箇國の競技團體を代表する七九名の委員が集つて會議を開いた。この會議は一八九六年を期してアゼンスに復活第一回のオリュムピック競技を開催すること、並びに一九〇〇年に巴里大博覽會と結合して第二回を開くべきことを決議した。この計畫はクーベルタンを會長とする國際オリュムピック競技委員の手によつて實現せられ、各國選手が參加して盛大に行はれ、全世界の體育競技への關心を俄かに高調せしめた。かくて一九〇〇年第二回を巴里に、一九〇四年第三回をセント・ルイスに、一九〇六年第四回を再びアゼンスに、一九〇八年第五回をロンドンに、一九一二年第六回をストックホルムに開いた。一九一六年第七回を伯林に開く豫定の處、世界大戰のために中止せられ、一九二〇年第七回をアントワー

プに、一九二四年第八回を巴里に、一九二八年第九回をアムステルダムに、一九三二年第十回をロサンゼルスに、一九三六年第十一回を伯林に開いた。我が國はストックホルム大會に金栗、三島兩選手を送つて以來、毎回次第に多くの選手を送り特にロヂンゼルス及び伯林の大會には優勝者をも出して世界の信望を博し、つひに一九四〇年の第十二回大會を東京に誘致することに成功したのである。クーベルタン男爵は今は病を得て委員會の第一線を去り、國際オリュムピック委員會は白耳義のラツール（Lallio-Laoer）伯爵によつて指導せられてゐる。

汎希臘的競技の教育的意義　以上に吾々はオリュムピア競技を中心とする汎希臘的競技に就いて述べ、併せて近世に於けるそれの復活を附記した。顧つて想ふにかかる競技が希臘文化史及び教育史に與へた影響は頗る甚大であつたに相違ない。第一にその競技の内容をなせる體育と文藝とは實に希臘教育の二大眼目であり、それの最高標準がこれ等汎希臘的・國際的なる晴の舞臺に於て示され、鄕國の名譽を賭して競はれたといふことは、全希臘の教育に最も輝かしき標的と模範と熱意とを提供したものと解せねばならぬ。オリュムピアを代表とする四大競技に倣つて地方的競技は無數に行はれ、それに殆んどすべての少青年が參加したことを思へば、オリュムピア競技の謂はば中樞的なる活動が全希臘の末の末に至るまで刺戟を傳へて希臘教育の全神經を興奮せしめてゐたと解することが出來る。體育と文藝との何れが何處の競技に於て特に重んぜられたかといふ差異はあつたにしても、競技が單なる體育に止まらずして精神的教養としての文學藝術の發展に貢獻したことは殊に注目に値する。體育競技そのものが詩や繪畫や彫刻の題材となりモデルとなつたことの外に、一般にこれ等の文藝の逸品が大祭の期間中披露せられ競演せられたことが、全希臘の文化を刺戟したことは絶大であつたに相違ないのである。

第二にこれ等の國際的・汎希臘的行事の根本的意義は祖國愛と汎希臘的精神との調和であつた。祖國を代表し

てその名譽の爲に他國の戰手と熱戰苦鬪を交へながら、而もその相手は等しくヘッレーネスの純なる血に結ばれ同じきゾェウス・アポッローン・ポセイドーン等の希臘共通の尊崇の的によつて結ばれてゐたのである。國家の獨自なる發展と國際的協調とは人類の永遠の理想であり、汎希臘的競技はそれの實現であると共に又永遠にそれを培養しつつあつた。そして國民教育と國際教育といふ矛盾し易き要求を止揚するための原型がそこに示されたとすれば、それの教育的意義は測り知られざるものであらう。

第三にこれ等の國際的競技が政治的には平和を、經濟的には商業の隆盛・交通の開拓を齎したことは既に指摘した通りである。この種の貢獻は國際競技そのものの圓滑なる遂行が必然に生み出した副産物であるが、而も希臘文化史上に於けるその意義は決して淺少ではなかつたのである。

近代に復活し現に益々興隆しつつある國際オリュムピック競技が、世界の青年の、更に全世界人の意氣を、如何に發剌明朗たらしめてゐるかに就いては贅言を要せぬであらう。而もこの事實は希臘民族の業績が現代世界の文化と教育とに如何ばかり強く生ける力を揮ひつつあるかといふ點に關する僅か一つの事例に過ぎないのである。

第四節　エロースの風習とその教育的意義

特定の制度や機關による教育ではないが、日常生活の風習そのものが重要なる教育的機能を果し、且つ後のソークラテース・プラトーン・アリストテレース等の教育思想の材料となり、基調となつたものとして、吾々は希臘社會に於ける先輩と後輩との同性愛的結合を看過することが出來ない。元來希臘社會に於ける婦人はその地位が甚

だ低く社交上には殆んど存在を認められてゐなかつた。アテーナイの婦人が專ら家庭の人として終始したことは既述の如くであり、スパルタ婦人が男子と同樣に體育を勵み又國家に對する貢獻を誇つたとしても、それは强健なる子女の生産といふ優生學的見地に基づくのであつて、男女の同樣がそこに行はれてゐたのではない。他方に於て希臘の男子は、スパルタに於てもアテーナイに於ても、軍隊的乃至政治的に共同接觸の機會を有つことが甚だ多かつた。かくの如き情勢に於ける古來の希臘社會は、異性間の愛情以上に男子の同性愛を著しく助長した。この場合に愛する先輩・壯年者を愛者（ἐραστής）、愛せられる後輩・少青年を愛弟子（παιδικά）といひ、その愛情を愛（ἔρως）・友情（φιλία）・子弟愛（παιδεραστία）等と呼んだ。かかる同性愛は道德的精進乃至は自由人としての心身の修養の爲に有力なる機能を發揮し、希臘人に於ては一種の理想と仰がれてゐた。ホメーロスの『イリアス』篇のアキッルレウスが、身に降りかかる死の運命をも厭はずに、親友パトロクロスの復讐の戰陣に起つたのは、同性愛の然らしめた所として讀へられた。スパルタ人やクレーテー人は戰の前にエロースの神を祭り、愛者・愛弟子のためには卑怯に生きんよりは勇敢に死せんことを誓つた。テーバイの勇將エパミノーンダス（Ἐπαμινώνδας, 418—362）はその部下を愛者・愛弟子の關係に組織してスパルタ軍をレウクトラに破り覇業の因をなしたと傳へられてゐる。希臘人の體育競技の發展の裏にも、愛者・愛弟子の前に肉體美と妙技とを示して愛の維持促進を希ふ情が含まれてゐた。故に體育場には體育の守神ヘルメース（Ἑρμῆς）の像と男子の德を象徵するヘーラクレース（Ἡρακλῆς）の像との間に愛の神エロース（Ἔρως）の像が建てられてあつた。其處は實に體育愛（φιλογυμναστία）の道場であると共に知識愛（φιλοσοφία）と子弟愛（παιδεραστία）との壇場と見做され、

愛者・愛弟子が相助け誡めて心身の敎養に努めたのである。

同性愛の風習は反面に於て又肉慾に墮したり、權勢・利益の陰謀に根ざしたりして、醜惡の方面をも暴露した。故にイオニア其他の諸國ではこれを禁止し、アテーナイに於ては一面美しきエロースを賞讃しながら、他面その醜さを警戒して、少年の居る學校に大人の入ること を嚴禁したり、又童僕（παιδαγωγός）に命じて子供をその點に就いて監督させたりした。

それにも拘らずこのエロースの美點を「德のために愛すること」卽ち德を求め與へるために結合するといふ敎育的意義に見出した希臘人は、これを基調として後の敎育活動及び敎育思想を發展せしめた。以下に述べるソフィステース、ソークラテース、プラトーン、アリストテレース等は何れもこのエロースに基づいて生活し思索せる者である。其他如何なる時代に於ても典型的敎育者は悉く愛（エロース）の權化であり、エロースこそはシュプランガーの言へる如く「敎育的根本情熱」（Pädagogisches Grundpathos）である。「かくてエロースの風習は希臘敎育史に獨特の重要性を有すると共に、敎育永遠の基調として超歷史的意義を具へてゐるのである。

第三章　新希臘時代第一期(古典時代後期)の教育

第一節　黄金期のアテーナイ文化と希臘の新教育

ペリクレース時代　ソローンの改革後なほ政治的内訌激しく人心安定を缺けるに乘じ、野心に充てる一貴族ペイシストラトス（Πεισίστρατος, 561—527）の僭主政治が起り、それもやがて沒落して民黨の首領クレイステネース（Κλεισθένης, 510—505）による民主政治が行はれ、かくてアテーナイの政治は益々その本來のコースを辿り進んだ。波斯戰役（前五〇〇年—四七九年）は希臘民族の自覺によれば、專制野蠻の國波斯と自由開明のヘ〝ラスの國々との戰であつた。それに於てヘ〝ラスの中心となり統率者となつたものは就中希臘的なるアテーナイであつた。かくて戰後のアテーナイはスパルタに代つて全希臘の政治的中心となり、而も早くより商業貿易の道にすぐれてゐたその國は經濟的にも當時の世界の中心となり、この權勢と富との基底に支へられて、そこには又全希臘の文化の精髓が集まり榮えるに至つた。而してその黄金期アテーナイの文化を統一し、太陽の如くに光と生命とをそれに與へた者はペリクレースである。

ペリクレース（Περικλῆς, 490—429）はアテーナイの名門に生れ、ダモーン・エレアのゾ〝ーノーン・アナクサゴラス等の學者を師として高き教養を受け、當時益々高まりつつあつた民主政治の潮流に乘じて「大衆の指導者」となり、貴族政黨と抗爭してつひにアテーナイを完全なる民主主義の樂土たらしめ、而もやがて陷り行かんとする大衆の頽廢を彼自らの卓越せる人格によつて繫ぎ止めつつ、玆に彼の名を冠して千古に輝ける「ペリクレース時代」（前

四四五　四三一年）を現出せしめたのである。

ペリクレースは大政治家であると共に大雄辯家であり、又偉大なる將軍でもあつた。而して彼の下にアテーナイの民は自由の民、强き民となつたばかりでなく、その趣味と教養とに於て、恐らく空前絶後の高き水準に達した。アクロポリスのパルテノーンはイクティノス・カリクラテースの二大建築家によつて、ドーリア式を基調としイオニア式を加へて洗錬せられたる獨自のアッティケー式面目に改築せられ、一代の名工プェイディアス（Φειδίας, 490—432）は、それを不朽の彫刻によつて飾り輝かせた。アクロポリスの西南斜面に築かれたディオニュソスの劇場は、神ディオニュソスの祭と結合して、アイスキュロス（Αἰσχύλος, 525—456）ソプ〝クレース（Σοφοκλῆς, 496—406）稍々後れてエウリーピデース（Εὐριπίδης, 480—406）等の悲劇を上演して、幾萬の觀客に、神々への敬虔なる心情と、祖國への感激愛護の至誠と、調和・洗錬・嚴肅を特徴とする人生觀とを與へた。

これ等の悲劇詩人こそは、自ら意識せる抱負に於ても、事實上の效果に於ても、當代アテーナイ人の最大の教育者であつた。彼等は一曾てクセノプ〝ネースが、亡び行く祖國を後にして放浪の旅に上り、傳統的宗教道德の破壞のためにその鋭き諷刺詩を投げかけたのとは異なつて一まさに勃興しつつある祖國アテーナイと共に育ち、傳統的宗教道德の洗錬と深化とのために、その靈筆を振つた。傳ふる所によればアテーナイの歴史に於て最も榮光に輝くサラミス海戰（前四八〇年）の日、三十六歳のアイスキュロスがこの戰に從軍し、（これより先マラトンの陸戰（前四九〇年）にも彼は參加した）十六歳のソプ〝クレースはこの戰勝の祝祭に合唱團の一員として輪舞を指揮し、そしてまたこの日エウリーピデースは島に逃れた兩親の所領に於て孤々の聲を擧げたのである。吾々はここ

に彼等の作品や詩風を假借する餘裕を有たないけれども、要するに、彼等はホメーロス詩篇を始めとして希臘民族の間に傳承され來つた神話傳說乃至はその後のアテーナイ、スパルタ、テーバイ等に於ける歷史的事件を素材とし、それを自らの世界觀と宗敎的信仰と道德の觀念とによつて洗錬し深化し意義づけたのである。

黃金期アテーナイに光を添へたものは悲劇詩人のみではない。所謂「ペリクレース時代」からそれに續く短年月の間に、喜劇詩人アリストファネース（Ἀριστοφάνης, 450—385）三大史家ヘーロドトス（Ἡρόδοτος, 484—425）トゥキュディデース（Θουκυδίδης, 465—395）クセノフォーン、それから又雄辯家デーモステネース（Δημοσθένης, 385—322）等が輩出してゐる。僅々二十七萬位の人口を有するに過ぎなかつた當時のアテーナイが僅か數十年の間にかくも傑出せる人物を多方面に出し、而もそれ等の人々の傑作逸品が殆んど上下老幼の別なく民衆の理解・鑑賞・共鳴を贏ち得たといふことは實に文化史上驚異に値する事態である。歷史は長く、希臘民族の歷史も亦二三千年の長きに亘つてゐるけれども、彼等の生命と名譽とは宛もこの數十年間のアテーナイ文化に結晶し、それに代表せられてゐる觀がある。全希臘の敎育場といふ讃辭も亦この黃金期アテーナイに對してこそ至當の意味を有つことが出來る。まことに當代の全希臘がそれに學び、後世の全世界がそれを仰いでゐるのである。

然しながらこのペリクレース黃金時代はやがてまた次の頹廢時代の素因を自らの中に釀しつつあつた。徹底せる民主政治は一たび卓拔の指導者を失ふとき、放縱無節制なる衆愚政治に墮するの外はなかつた。富に惠まれ優れた藝術に育てられて來た民衆は、やがて享樂の一面のみを追うて嚴肅なる人生と祖國のための犧牲的團結とを失つて行つた。ペリクレースその人さへもヘタイラ（Ἑταίρα）なるアスパシア（Ἀσπασία）の愛に溺れて拭ひ難き

道德的汚點を遺したのであるが、かかる風紀の紊亂はその後益々甚だしくなり、男色の亂倫や家庭生活の腐敗や實會社交に於ける遊女の跋扈等が滔々として勢を加へた。

希臘の敎育　吾々が本章に於て取扱はんとする希臘の敎育は、かくの如きアテーナイ文化の爛熟・頹勢の時期に於ける敎育である。そして玆では特定の法制や施設を通じてではなく、寧ろ史上に顯著なる敎育者及び敎育思想家の名と結合して敎育史が展開せられてゐる。それは所謂ソフィステース等を起點として、ソークラテース、プラトーン、アリストテレースと相續ける名であり、その間にクセノフォーンやイソクラテースの名も介在する。これ等の人々の活動には、一面新しき時代の趨勢に乘じて益々それを助長し時代に敏感なる青年の要求に應じたものもあるけれども（ソフィステースやイソクラテースの如き）併し眞摯なる思想家（ソークラテース、プラトーン、アリステレースの如き）は他面に於て時代の趨勢に反抗し、復古・更生の意義を以て敎育の家踐と思索とに赴いたとも見られる。彼等の警世的思想は當時に於てつひに現實の效果を收め得なかつたけれども、その眞摯なる思索の典型的發展の跡は後世敎育思想の原型として超時代的價値に輝いてゐる。

第二節　ソフィステース

ソフィステースと呼ばれる人々　ソフィステース（σοφιστής）と呼ばれる多くの人々の間には、彼等自らの意識に於ても後世史家の判斷によつても、一定の共通なる主張や學派的なる傳統を認めることは困難であり、彼等は寧ろ個々別々の面目を以て活動してゐたのであるが、それにも拘らず、プラトーンがソークラテースと對峙せる面目に

於て彼等を取扱つて以來、一群の反ソ・クラテース的なるものとしての通念が彼等に關して傳へられるやうになつた。この場合に歴史的事實としては、當時の人々によつてソフィステースと同視せられてゐたソークラテースを、プラトーンが、恩師の辯明のために、ソフィステースとの鋭き對立に持來したものであり、而もそこに對立させられたものは、實はソフィステースの流を汲めるプラトーン時代の論敵とプラトーン自身とであつたのであるが、併しかかる對立によつて、始めて前後多數のソフィステース達の歴史的意義は闡明せられたのである。

今特に有名なソフィステースについて略歴を記せば次の如くである。

プロータゴラスは前四八一年頃トラキアのアブデーラに生れた。デーモクリトスから哲學を學んだと傳へられてゐるが、確かではない。自らソフィステースと名乘つた最初の人、又報酬を取つて教授した最初の人である。四十年の長きに亙つて教授したが、その間の大部分はアテーナイに（前後二回に亙つて）滯在し、ペリクレースやエウリピデースと親交があつた。第一回アテーナイ訪問後ペリクレースの命により、史家ヘーロドトスや建築家ヒポダモスや其他の名士を伴つて南伊太利の希臘植民市トゥリオイに赴き（前四四四年―四四三年）そこの憲法を制定したと傳へられてゐる。それから南伊太利やシケリア島の希臘諸市を遍歴して名聲を博し（その間に有力な門弟ヒピアスを得たものと思はれる）、各地の門弟を率ゐて再びアテーナイに來たのである。前四一一年にその著述『神々に就いて』の卷頭にある文句―「神々に關してはそれが存在するか否か、又どんな姿であるかを自分は知らない。」といふ文句―の故に無神論者として訴へられ、アテーナイを追放せられ、シケリアへの海路で難破して、その年に歿した。

ゴルギアスは前四八〇年頃シケリア島のレオンティーノイ市に生れた。この都市は同じシケリア島内のシュラクーサイとの戰に際し、アテーナイの援助を求めるため、雄辯家ゴルギアスをば使節の首長としてアテーナイに送つた（前四二七年）。爾來主としてアテーナイ及びテッサリアのラリッサに滯在して、辯論術の教師として一代の名聲を博した。トゥキディデースやイソクラテースは彼の影響を受け、アルキビアデースやアルキダマスやアイスキネースやアンティステネース等も彼の門弟乃至模倣者であると言はれてゐる。百餘年の長壽を保つて、前三七五年頃ラリッサのアレワダイ王家の宮廷に歿した。彼は鋭き哲學者ではなくて、卓越せる辯論家であり、自らも「ソフィステース」にあらずして「辯論家（レートール）」であることを公言してゐた。彼の主たる貢獻は、希臘修辭學の發展、希臘散文の美化の上に爲されたのである。

ヒピアスはエリスの生れであり、ソークラテースと同時代の人である。彼は獨創的思想家ではなかつたが、博學多能を以て知られ、ソークラテースの晩年に於てソフィステースとして名聲が高かつた。祖國エリスの外交使節としてスパルタを始め諸外國に使し、その序に大小の諸市を遍歴して教授を行つた。奥祭の式辭演說は最も得意とする所であり、特にオリュムピアの祝祭には熱辯を振つた。希臘修辭學の進歩に貢獻の多かつた人である。その尊大と虚榮とに充てるソフィステース的面目はプラトーンの『大小ヒピアス篇』によく描かれてゐる。

プロディコスはケオス島出身で、やはりヒピアスと同時代の人である。眞摯な有德者であり、プラトーンやクセノフォーンによつて、他のソフィステース達よりも敬意を以て取扱はれてゐる。祖國の政治的用務のため若しくは教授のためにアテーナイに滯在して、大いに名聲を博し、その弟子の中にはイソクラテースの如き名士もあつた。やはり希臘修辭學上に功績のあつた人である。

トラシュマコスはカルケードーンの人であり、事實上はゴルギアスと共に初期のソフィステースに屬し、修辭學の開拓者として有名である。プラトーンは『プァイドロス』篇に於てはトラシュマコスを修辭學の代表者の一人として取扱つてゐるが、『國家』篇に於ては左翼ソフィステースの面目に描いてゐる。カルリクレースに就いてはプラトーン作品中に述べられてゐる以外に何事も知られて居らない。

ソフィステースの業績　前述の事情により、プラトーン的ソフィステースの業績を、後のソークラテースとの對比に於て、概括的に述べるならば、次の諸點が擧げられるであらう。第一にソフィステースはその第一人者ともいふべき

プロータゴラス（Πρωταγόρας, 480—410）が自覚し公言せる如く、その本來の意味たる賢者（σοφός）——何等か一技一能の堪能者——から轉じて、青年を教育する教育者の意味となり、玆に教育が初めて特定の職業として行はれるに至つた。そして彼等は教育者たるの自恃に充ち、諸國を遍歷して青年を愛弟子となし、狂信的尊敬を受け且つ多額の報酬を要求した。併し彼等が内心に於て子弟愛よりも寧ろ名譽心に充たされ、又尊大傲慢にして自己省察を缺如せる點は、教育者的態度に關して先づ反ソークラテース的面目であつた。

第二にソフィステースの中には、例へばヒピアス（Ἱππίας）の如く、諸般の學術・技藝の普及を使命とした者もあつたが、その本來の教科は、プロータゴラスの限定せる如く、齊家治國の市民的才能であり、而も——認識論に於ては所謂人間標準論（Homomensura Satz）が示せる主觀的個人主義に立つたにも拘らず——この實踐の領域に於ては比較的多數の人々の常識・輿論を尊重する便宜主義に立ち、傳統的道德を素直に受容れる健全なる狀態に子弟の魂を轉ずることを以てその使命とした。但し末流ソフィステースの中には、傳統的道德を慣習（νόμος）の上の善として斥け、放縱無節制を自然（φύσις）の上の善として奬めるカリクレース（Kallikles）や、「正義とは强者の利益であり」、「一切の法律は支配者の利益の爲に制定せられる」と說けるトラシュマコス（Θρασύμαχος）等があつて、後世にソフィステースとは傳統破壞の敎說を唱へた者であるとの印象を與へた。而して初期のソフィステースの傳統育從主義と末流ソフィステースの傳統破壞主義とは、共に傳統的道德への眞の批判を缺ける點に於て反ソークラテース的面目であつた。

第三にゴルギアス（Γοργίας, 483—375）によつて代表せられた如く、ソフィステースは辯論術（ῥητορική）を敎

育の手段とし、その敎說をば、認識（ἐπιστήμη）を以て內面的に自得せしめる代りに、唯雄辯に魅惑して信仰（πίστις）として受容されさせるのみであつた。又後期のソフィステース——それは實はソークラテース門下であつたが——は論爭術（ἐριστική）・反駁術（ἀντιλογική）を弄んで相手を言葉の上で說伏することを快とし、所謂詭辯學徒としての汚名を後世に遺した。この辯論術・論爭術・反駁術等はソークラテースの對話法と相反するものであつて、玆にもソフィステースの反ソークラテース的面目が存するのである。

かくてソフィステースの諸相は、堅實なる傳統に生ける古き希臘より、それが崩壞して而も未だ新しき秩序の生れざる新希臘への推移を示すと共に、次のソークラテース、プラトーンの生活及び思想の發展の消極的機緣となつた所に、その歷史的役割を果してゐる。

第三節　ソークラテース

一　ソークラテースの生涯

生年月と家庭　ソークラテースの生れたのは第七七回オリュムピアースの第四年目タルゲーリオーンの月の六日と傳へられてゐる。これは前四六九年に當り、タルゲーリオーンとはアポローンとアルテミスの祭たるタルゲーリアの行はれる月で、アッティケー曆では十一月、現今の五月の半から六月の半に至る月である。彼の生地はアテーナイ市のアンティオキスといふ部族に屬するアローペケーといふ區であつて、これは市の城壁から東北方約半時間行程リュカベートスの丘の南麓にあつた。

父はソープロニスコスといひ、數代前から相續いで彫刻を業としてゐた。ソークラテースも若き頃の若干年は家業を見習つ

たものと思はれる。アクロポリスに彼の作つた彫像があつたといふ傳說は信ぜられないにしても、彼が人間の肉體美に對して一自分の醜い顏の特徴や友人門弟等の讃彼の美醜に就いて一纖細な眼識を具へてゐたことは、彫刻術に於ける素養を暗示するものである。當時アテーナイの彫刻業者は共にダイダロス一アテーナイ人及びクレーテー人によつて彫刻建築の元祖とされてゐた傳說的人物一の子孫を以て任じ、一つの大なる組合をなしてゐた。而して彫刻は當時は收入多き職業であつてソークラテースの父も相當裕福な地位にあり、その死後にアテーナイ市内の一軒の家と若干の財産とを遺した。その價格は、ソークラテースの評價によれば、約五ムナ（二〇〇圓）であつたが、ソークラテースはこの遺産によつて安んじて無報酬の教育活動に身を委ね得たのである。彼の財産等級は第三級即ち年收二〇〇乃至三〇〇ドラクメーに相當するゾェウギータイに屬し戰時には重裝步兵として從軍した。彼はその教育活動への沒頭の故に家事を放擲し極貧の裡に生活してゐると自ら告白したけれども、併しなほ法廷に於て銅金一ムナーならば自ら支拂ひ得ると言つた所を見れば、その晩年と雖も必ずしも極貧といふ程ではなかつたのである。因に彼の母はパイナレテーといひ、「頗る立派なそして嚴格な產婆」であつて、彼は自らの教育方法を母の產婆術に倣つたと言つてゐる。

受けた教養　彼が幼少時代に受けた教育に就いては明瞭な記錄を缺くけれども、『クリトーン』篇のソークラテースが自分に向つて「お前の父に、お前を文藝と體育とに於て教育すやうに命じてゐる國法はよく規定されてゐるのではないか」と自問してゐる所を見れば、彼も當時の一般の慣習に從つて、文藝及び體育に於ける基礎的陶冶を受けたものと思はれる。且つ又彼が成人後に示せる强健なる身體と克己・自制・忍耐の諸德より見れば、家庭及び學校に於て心身兩面のすぐれた教育を受けたであらうことは容易に想像せられる。加ふるに彼の成長時代は波斯戰役の後を承けてアテーナイの文化が大いに勃興しその都市自體が所謂「全希臘の教育場」となつた時であるから、社會一般の雰圍氣から受けた教養も亦大なるものがあつたと考へられる。青年期以後のソークラテースが特定の思想家の敎を受けたか否かに就いても明かには知り得ない。アナクサゴラス・ダモーン等當時有名の學者の名が其處に傳へられてゐるけれども、確かには信じ難く、唯マケドニア國王にて希臘

文化の保護者たりしアルケラオスより自然哲學及び人生哲學に就いて影響を受けたこと並びに悲劇詩人エウリーピデースと交り共鳴する所のあつたことは眞實と思はれる。然し所謂ソフィストス等が與へた影響は、既述の如くその本質に於て消極的なるものであつたが、彼の生活と思想との成熟に關與せる最大の刺戟であつたことは言ふ迄もない。

教育者的使命の自覺　ソークラテースが教育生活に身を委ね初めたのは三十歲前後の頃であらうが、それに深き自覺と固き信念とを得るに至つたのは、デルプォイのアポルローンの神託とその解釋とによつてであつた。彼の竹馬の友であり、民黨の一人であつて、その直情徑行の故に有名なカイレプォーンは、或日遽くデルプォイに赴き、ソークラテースより賢き者ありやとの何を立て、「すべての人々の中にてソークラテースこそ最も賢き者なり」との神託を得た。ソークラテースはこれを聞いて意外とし、それが果して何を意味するかに就いて當惑した。そして自分よりも賢き人々を證據としてこの神託の誤れる所以を實證せんがために、世に賢者と思はれてゐる人々の歷訪を試みた。然るに彼の訪ねた政治家・詩人・手工業者等に於て、彼はそれぞれに幻滅を感じた。蓋し自他共に賢者として許す政治家が實は正義や善に就いて何等確乎たる知見を有せず、又靈感に打だれて詩作する天才的藝術家は、その作品に就いての解說批評はこれを能くせず、更に各々の專門手工業の領域に於ては技術も知見もある手工業者がその領域を超えて政治に關しても智者であるかの如くに高言するからである。かくしてソークラテースは、世には神のみ眞に賢く、人はすべて無智であるのに、それ等の人々が、何か價値あることを知つてゐると思つて居り、それに反してソークラテース自身は何事も知つてゐないと同時に知つてゐると思つてもゐないといふことを發見した。そしてかの神託は「ソークラテースの如く實は智慧に於て何等の價値もないことを知つてゐる人こそ最も賢い」といふ事を意味するとの解釋を得た。彼はこの所謂無智の自覺を貴しとし、皆く人々を吟味してこの自覺に導くことを以て神意の命ずる自己の天職であると確信するに至り、多くの人々の憎惡反感をも厭はず、又他の公事を避け家事をも放擲して專らこの天職に精進した。突出した輝く眼球、そり返つた大きな獅子鼻、厚い唇、無雜作に伸した鬚髯、夏も冬も同じ汚れた上衣を纏ひ、その頑丈な跣足を市場やギュムナシオンに運んで、人なつかしげな、併し他から見れば薄氣味惡い面

持で、老若の別なく特にも美しき青年を探し捉へ、又時には身を清め晴着に更へ靴を穿つて上流知名の人士をも訪れ、何時も詩論と皮肉と含蓄とに充てる談論を以て人々を引付け、鋭き省察に向はしめるのが、彼の日々の生活であつた。

三回の從軍　ソークラテースが教育に從事するに至つてから間もなくペロポンネーソス戰爭が始まり、彼は三たび從軍出征した。そして平素アテーナイを離れたことのなかつた彼が他境へ出かけたのは殆んどこの從軍の機會だけであつた。卽ち先づ四三二年六月には、マケドニアのパルレーネー半島なるコリントス植民地ポテイダイアに於けるアテーナイ軍とコリントス軍との戰に從軍し、彼の所屬部隊は敗戰したが、彼は傷けるアルキビアデースをよく保護して功を立てた。又續いて四三〇年から四二九年に亘るポテイダイア攻圍の陣營に於ける彼の擧止奬度は陣中の衆目を惹いた。冬の酷寒にも平素の衣服を纏ひ跣足で氷の上を平氣で歩き渡つたことや、粗食缺乏に堪へ、時に又美食豪飲して而も何等辭色を示さなかつたことや、夏の滿一晝夜を佇立思索に徹し終つたことなどは、就中有名な挿話である。次に四二四年一一月、ボイオティア州の東北海岸なるデーリオンに於けるアテーナイ對ボイオティアの戰に從軍し、この時味方は大敗したが、ソークラテースはラケースと共によく戰ひ、殊に退却に際して勇敢に敵軍の追擊を支へつつアルキビアデースを始め友軍を掩護して悠々と退却した。更に四二二年マケドニア東海岸なるアテーナイ領アムフィポリスに於けるアテーナイ軍とスパルタ軍との戰に出征し、勇ましくその職責を果した。是等三回の從軍に於てよく生死の危險を冒してその職責を果したことは、ソークラテース自らの誇りに充てる確信であつて、彼は後年その教育的天職の固守を辯明するに當つてその誇りを闡揚し、戰場に於て命ぜられたる地點を死守せる自分が、今神によつて命ぜられたと信ずる戰場を死其他何等かの危險を怖れて放棄するが如きは、愧づべきことであると告白してゐる。

妻と子供　ソークラテースは可なり晩くー恐らくは五十歳に近き頃ークサンティペーと結婚し、三人の男兒を擧げた。クサンティペーに就いては、或は古今無比の口やかましき女であつたとか、或はソークラテースには彼女の外にミュルトーといふ妾があつて、それが妻の度し難き不機嫌の原因であつたとか、種々の噂も傳はつてゐるが、併しプラトーンに於けるクサンティ

ペーは臨終の夫を子供と共に見舞ひ悲しき訣別を惜む溫情の女として描かれてゐる。恐らく彼女は健氣なる心を以て家政・育兒の責を引受けーその責任上自然口やかましくもあつたであらうがーソークラテースをして家庭に懸念なく世人の教育に沒頭することを得しめた功績ある女であつたと思はれる。

公的生活　教育を天職とせるソークラテースは政治に關與することを自ら避けた。この事は政治的義務の回避乃至は民主政治への反感を表示するものとして、彼の反對者達の敵意を助長した一因であるが、併し彼はそれを所謂ダイモニオンの聲の抑止に因るものとし、而もその抑止を至當のことと解してゐた。蓋し當時の墮落せる民主政治に於ては、政界に身を投ずれば正義を守ることが出來ず、强ひて正義を固執すれば身を危くし結局自己をも同胞をも益することが出來なくなるからである。この事情を證明する爲に彼は「五百人會」の一員であつた頃（前四〇六年ー四〇五年）の生涯に於ける僅かなる政治的經驗に就いて二個の實例を語つてゐる。この例は一面に於て政治に參與しながら正義を行ふことの如何に至難であるかを示すと共に、他面に於てソークラテースが如何に頑强に正義を守り法を支持せるかを示してゐる。第一の例は、民主政治の頃四〇六年七月、アルギヌサイの小群島のほとりに於けるスパルタとアテーナイとの海戰に際し、戰勝せるアテーナイ軍が戰後の暴風雨の爲に四千人（中二千人はアテーナイ市民）を海中に失つた。アテーナイの市民はこれを以て八人の司令官の責任とし、憤激の餘り彼等を一括して死刑に處せんとした。ソークラテースは唯一人大衆のこの感情的不法處置を責め、人々の嘲罵脅迫をも怖れずしてそれに反對したが、彼の反對はつひに容れられなかつたのである。第二の例は、ペロポンネーソス戰役後スパルタの勢力下に三十人の寡頭政治がアテーナイを支配した頃、政府はサラミスの財產家レオーンを不法にも逮捕せんとし、而もソークラテースをこの不法行爲の連累者たらしめんがために、彼を四人の使者に加へてレオーン逮捕の任に當はした。ソークラテースは併しそれが正義に反する命令であることの故に、獨り命に背いて家に歸つてしまつたのである。かかる事情の下にあつては、彼の告白した如く、「眞に正義のために奮鬪せんとする者が、若し些かの年月たりとも生き延びようとするならば、公務に與ちずして私的に生活することが必要であつた」。卽ちソークラテースが政治への關與を避けた

のは、反對者達の自解した如く公事を輕んずるためではなくて、自己の眞使命—教育活動—を重んずるためであり、祖國アテーナイに眞實の奉仕を致さんがためであつたのである。

告發とその理由　さて三九九年晩春の頃メレートス・リュコーン・アニュトスの三人は突如としてソークラテースを告訴した。その訴狀の内容は「ソークラテースは國家の認むる神々を認めずして他の新しきダイモニアを引入れ、且つ青年達を墮落させるが故に罪あり」といふのであつた。この告訴者の表面上の代表者メレートスは、多分アリストファネースの『蛙』といふ作品の中に出て來る詩人の息子であらうが、當時は無名の青年であつてソークラテース自らもその人を知らぬ程であつた。リュコーンに關しても彼が職業的辯論家の代表者であつたこと以外には何事も知られてゐない。かくしてこの告訴者中の眞の黒幕はアニュトスである。彼は柔皮手工業を職としてゐたが政界に勢力を有し民主政治の熱心な支持者であつた。彼は自分の息子が父の家—實業家たらしめんとする—に背いてソークラテースの門下に走つたことに就いて甚だしき憤懣を抱いて居り、又自分が日頃親國の恩人として敬慕してゐるテミストクレース・アリステイデース・ペリクレース・トゥキュディデース等をもソークラテースが貶せることに就いて感情を害してゐた。それ故にソークラテースを以て青年の誘惑者とし親國の敵とせる告訴内容は、謂はばアニュトスの私怨に根ざせるものであつた。而もソークラテースによれば、かかる當面の告訴の外に、その背景として、彼に對し久しき年月の間に、誰言ふともなく世上に流布された誹謗があるのであつて、それは「ソークラテースは地下の事並びに天上の事を探求し、劣れる論を優れるものとなし、他の人々にもそれを敎へる」といふことである。これはまさに當時の人々がソフィステースに對して向けてゐた常套の誹謗であるが、蓋しアリストファネースの『雲』といふ作品の中に、ソークラテースといふ名の下に奇怪な（例へば雲を渡る如き）ソフィステース的人物の描かれてゐるのが、民衆の間にソークラテースへの誤解を生ぜしめたものと思はれる。要するにソークラテースの告訴された眞の理由は、彼が一部の人々からはソフィステース—而も奇怪な自然研究や危險な道德論を以て青年を惑はすものと誤解されたるソフィステース—と同一視せられ、又一部の人々からは民主政治に反對するものと見られたからである。そして彼の擧止—比較的富裕の青年が彼

に歸依したことや、一見する所その議論に詭辯的論爭的反面が存したことや、更に彼が政治への關與を避けて私的に青年に呼びかけたこと等—を思へば、かかる誤解・反感を生じ得べき餘地も少くはなかつたのである。

法廷に於ける辯明　法廷に於けるソークラテースはそれ故に、先づ自分が自然研究や職業的敎育には與り知らざることを明言し、進んで自己の無智の自覺より他人の吟味に至りし事情を說いて、世人が自分をソフィステースと同視せる誤解を辯駁し、次に當面の告訴者たるメレートス一派に對し、青年の誘惑及び神への不信に關する告訴が全然無根且つ不合理の虛構たることを論駁し、更に再び自己の日頃の生活態度・信念に言及して、死を怖れずに天職を守ることや、公事に與らずして私的生活を選べる所以や、ソフィステース的職業敎師でないのに青年達の追隨を得るに至つた事情等を解明し、特に法廷に哀願して刑の減免を乞ふが如き態度を極力排斥すべきことを力說した。五百人會の議員を裁判官として文字通り生死の岐路に立つて、而も堂々自己の生活と所信とを闡明せるこの辯明は、實にアダム（J. Adam）の言へる如く、「自らの血を以て自らの聖經に裏書せんとする殉言者の唇から迸る所の氣高き怖れなき說敎」の調子を帶びて居り、或は一層適切にブッセ（A. Busse）の語を藉りて言へば「其處に語つてゐるのは訴へられた人であるよりも寧ろアテーナイの敎育者であつて、彼は同胞の道德的更生に獻げたその生涯の終末に於て、幾百人の聽衆の前に、彼の敎育的經典を開陳するの好機を利用したのである。」

上述の辯明の後に、先づ罪の有無に關する判決投票があり、二八〇票を以て有罪と決した。この僅か六〇票の差で有罪となつたことは當時のアテーナイ市民中ソークラテースを非とする者が必ずしも多くなつたことを示してゐる。而してこの有罪判決の後、刑罰の適用に就いて論議があり、原告の死刑提議に對し、ソークラテースは、何等の不正をも爲さざる自分は死刑にも監禁にも追放にも値せざることを論じ、唯銀一ムナーの罰金ならば自分も支拂ひ得るし、それは又自分を害するものでないからとて、これを提議せんとした。然し其處に居合せた門弟プラトーン・クリトーン・クリトブロス及びアポルロドーロスの保證があつたので三十ムナーの罰金を提議した。この間に於けるソークラテースが毫も卑屈の態度を示さず、否寧ろ自分

は國家が殊勳者に報ゆる方法たるプリュタネイオンの饗宴を以て遇せられるのが至當であるといふが如き主張を敢てせることは、裁判官の感情を害したらしく、今度は前よりも更に八〇票を加へた差を以て死刑が判決せられた。この判決後も尙ソークラテースは―吏員達が何か手續上の事務で暇を取つてゐる間に―發言の機會を捉へ先づ有罪投票をなせる人々に向つて、その判決が如何に不當であり恐るべきものであるかを說き、更に無罪投票をなせる人々に向ひ、親愛の情に溢れたる呼びかけを以て、自分は今の運命を少しも恐れてゐないこと、冥界へ行つた後の豊かな希望、自分の死後遺れる子供等に對する委託等を述べ、つひに究極の幸不幸を神の審判に委ねて、從容として法廷を退いた。以上が實にプラトーンの不朽の力作『ソークラテースの辯明』に於ける裁判の經過の大樣である。

獄中生活及び臨終　かくてソークラテースは死刑の判決を受けたのであるが、偶々その前月よりアテーナイの例年の祭事たるデーロスのアポルローンへの祭使派遣の儀が始まり、その祭使の船の出發より歸還までは都市を淸淨に保つため國法による死刑を行はざる慣例に從つて、ソークラテースは約一箇月間獄中に日を送ることとなつた。この間に門弟達は毎日早朝より獄を訪れ、終日恩師と談論することを常としてゐた。老友クリトーンはソークラテースを救はんとし、獄吏に贈賄すれば脫獄の容易なること、他國へ逃亡すれば餘生は安全なること、若しこの重刑に服すれば、友人たゐ自分が財產を惜んで友の不幸を救はなかつたとの非難を世人から受けること、且つソークラテースの遺兒達は孤兒として逆境に立つべきこと等を說き、情を盡して脫獄を勸奬した。然しソークラテースは毅然としてこれを斥け、國法の遵守が如何に重要なる市民の義務であり、遂法脫獄が自らの日頃の敎說と如何に矛盾するかを考へ、諄々所信を披瀝して敢然として國法に遵つた。愈々臨終の日となるや、悲嘆に暮るる門弟等を說き慰めて、靈魂の不滅に關する談論を交し、妻子にも別れを告げ、獄吏の與へる毒杯を從容として傾け、歸するが如き大悟の裡にプラトーンの所謂「吾々の知れる人々の中、最も善く悉に最も智慧深く最も正しき人」はその七十年の生涯を終つた。時に三九五年初夏の頃である。

死後の反響　衰頹期のアテーナイ市民の覺醒を促すために神が遣はしたと信じて敎育の聖なる一途に精進したソークラテ

スを、不當にもアテーナイの人々は殺したのである。傳ふる所によれば、詩人エウリーピデースは、その悲劇『パラメーデース』の中に、この同胞の過誤を責めて、「諸君は殺した、諸君は殺した、いとも賢き人を、罪なき人を、ムーサの神の營を。」と詠じ、そしてアテーナイ市民は、パライストラとギュムナシオンを閉してソークラテースの死を深く悔い惜み、三人の告訴者に對してはメレートスを死刑に、リュコーンとアニュトスとを追放に處し、ソークラテースのためには銅像を作つて崇拜したとのことである。

二　ソークラテースの敎育思想

ソークラテース（Σωκράτης, 469―399）は周く知られてゐる通り、本來の敎育思想家ではなかつた。卽ち敎育に關する理論的反省それ自體を職分とする敎育學者では決してなかつた。彼に於ては敎育は實踐であり、生活そのものであつたのである。それにも拘らずソークラテースの著しき特徵は實踐的生活に對する不斷の吟味省察、卽ち理論的反省に存したことは吾々の既に指摘した所である。彼に於ては、實踐を離れての理論はなかつたけれども、同時に理論なき實踐も亦あり得なかつたのである。吾々はそれ故に彼が自らの生活に加へた省察の跡を探求し整理することによつて、彼に於ける理論を捉へることが出來る。この場合に吾々がソークラテースの思想として指摘せんとする諸契機は何れもプラトーンの記し傳へたものであり、而もそれは既述の如く、ソフィステースとの對立に於て特色づけられてゐる。

この點に於て先づ强調せらるべきソークラテースの面目は、自ら敎師（διδάσκαλος）たることを否認しながら、而も「愛の事」（τὰ ἐρωτικά）に何よりもよく通じ、「人間愛（φιλανθρωπία）の故に自己の持說所信を――啻に

報酬を受けぬだけでなく自費を辨じても――總ての人に惜みなく語る」點に於て眞の教育者的性格を具へてゐたことである。而も彼の人間愛とそれに基ける子弟愛とは、肉慾や權勢・利益を離れてひたすらに德への精進を目ざし教育の基調たる愛を最も純粹に體現せるものであつた。

第二にソフィステースの自恃尊大に對立してソークラテースは自らの無智を自覺してゐた。彼はデルフォイのアポローン（Ἀπόλλων）の神託に世の最賢者と宣せられたるを意外とし、賢者と思はれる人々を吟味せる結果、自らの賢なる所以は無智の自覺にあることを確かめ、この自覺を普く人々に促すことをば神意による自己の天職と信じ、自他の省察吟味といふ彼の教育道に精進したのである。而して彼の所謂無智とはその智が事態の本質（οἰκεῖος）を捉へず究極の法則（κύριος）に徹せずして矛盾撞着を含める俗見（δόξα）であることを意味し、而もこの場合の智とは實踐智であるが故に、俗見を吟味して眞智（ἐπιστήμη）に達することは直ちに實踐上の矛盾を統一して行爲への力を得ることであり、知行合一はその必然の歸結であつた。更に眞摯なる思索による實踐智の探求はその究極する所、胸奥に響くダイモニオン（δαιμόνιον）の聲に接し無限の力を得た。そしてこの信仰と眞智と力とを具へたるソークラテースには又おのづから諧謔皮肉の餘裕も生じた。かくて常に眞智を求め法則に支へられて行動せる思索の人、その思索の奥に深き信仰を抱ける人、三たび戰陣に立ち又不斷に不正と戰ひつつあつた勇氣の人、更に鋭き諧謔皮肉に相手への魅力を揮つた人、是が凡そソークラテースの面目である。

第三にソークラテースは大衆（οἱ πολλοί）の輿論に盲從せずして「眞理そのもの」（αὐτῆ τῆ ἀληθείᾳ）に從はんとし、他方また國家の宗教的慣習や法律を遵奉した。これは要するに傳統的文化への眞摯なる批判を向け、根柢ある智に支へられてよき傳統を自覺的に擁護せんとの努力であつて、自他の吟味を本領とせる彼として當然の態度であると共に、動搖崩壞の途を辿りつつあつた世相に對する彼の史的地位を示せるものである。

第四にソークラテースは對話法（διαλεκτική）を教育の方法とせる點に於てソフィステースと對立した。それが辯論術・論爭術・反駁術に對して有する特色は、相手を敵と考へる代りに味方と考へ、彼我の對立檢討の根柢に愛による結合を置き、單なる言葉（ὄνομα）の美しさや論理の代りに事柄自體（αὐτὰ τὰ πράγματα）を追求し、相手を外から魅惑し說伏する代りに自らの內より眞智を生み出させること――所謂產婆術（μαιευτική）――に存する。而してこの方法が相手の抱ける俗見の矛盾を自覺せしめて行詰（ἀπορία）に陷れる消極的段階と、眞智への到達を指導する積極的段階とより成れることは世上周知の如くである。

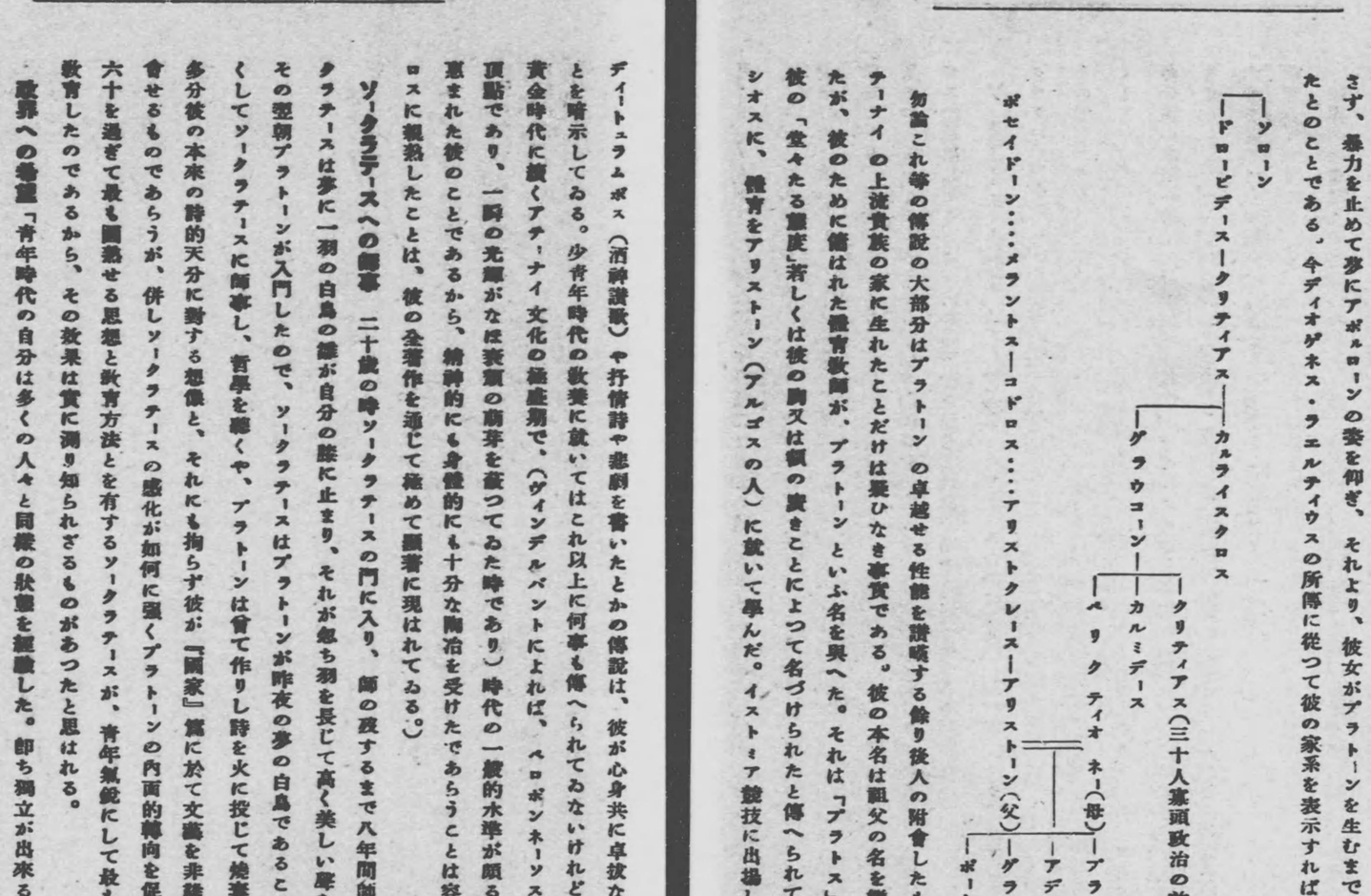
かくてソークラテースは、教育者としての態度に於ても、教育の方法に於ても、ソフィステースと對蹠的地位に立てるものであつて、これがプラトーンによつて捉へられたる彼の史的役割であると共に、やがてプラトーンによつて理論的深化を受け教育の永遠の契機となれるものである。

第四節　プラトーン

一　プラトーンの生涯

家系及び幼少時代　プラトーンは第八八オリュムピアースのタルゲリオーンの月の七日に生れた。それは前四二七年の晩春

初夏の候であり、恰もデーロス人達の傳說によるアポルローンの誕生日に相當する。（故にこの日附はプラトーンがアポルローンの申し子であるとの傳說と結合して、後人によつて想定せられ、アカデーメイアに於てプラトーン誕生日として祝はれた日である。）父アリストーンはアテーナイの世襲王政の最後の國王たるコドロスの直系であり、母ペリクティオネーはソローンの後裔であると傳へられてゐる。傳說によれば、ペリクティオネーの若盛りの頃、アリストーンは彼女に暴力的接觸を試みて果さず、暴力を止めて夢にアポルローンの委を仰ぎ、それより、彼女がプラトーンを生むまでアリストーンは彼女に接しなかつたとのことである。今ディオゲネス・ラエルティウスの所傳に從つて彼の家系を表示すれば次の如くである。



勿論これ等の傳說の大部分はプラトーンの卓越せる性能を讃嘆する餘り後人の附會したものであらうが、ともかく彼がアテーナイの上流貴族の家に生れたことだけは疑ひなき事實である。彼の本名は祖父の名を繼いでアリストクレースと呼ばれたが、彼のために借はれた體育教師が、プラトーンといふ名を與へた。それは「プラトス」卽ち「廣きもの」の謂であり、彼の「堂々たる體度」若しくは彼の肩又は額の廣きことによつて名づけられたと傳へられてゐる。少年時代に讀書をディオニシオスに、體育をアリストーン（アルゴスの人）に就いて學んだ。イストミア競技に出場したとか、繪畫を能くしたとか、

ディーテュラムボス（酒神讃歌）や抒情詩や悲劇を書いたとかの傳說は、彼が心身共に卓拔なる素質と教養とを有してゐたことを暗示してゐる。少青年時代の教養に就いてはこれ以上に何事も傳へられてゐないけれども、彼の生れた年はペリクレース黃金時代に續くアテーナイ文化の極盛期で、（ヴィンデルバントによれば、ペロポンネーソス戰爭の第一年目で、希臘歷史の頂點であり、一群の光輝がなほ衰頽の萌芽を蔵つてゐた時であり）時代の一般的水準が頗る高かつた上に、名門と英資とに惠まれた彼のことであるから、精神的にも身體的にも十分な陶冶を受けたであらうことは容易に推察せられる。（特にホメーロスに親熟したことは、彼の全著作を通じて極めて顯著に現はれてゐる。）

ソークラテースへの師事　二十歲の時ソークラテースの門に入り、師の歿するまで八年間師事した。傳說によれば或夜ソークラテースは夢に一羽の白鳥の雛が自分の膝に止まり、それが忽ち羽を長じて高く美しい聲を發しつつ飛び去つたのを見た。その翌朝プラトーンが入門したので、ソークラテースはプラトーンが昨夜の夢の白鳥であることを認めたとのことである。かくしてソークラテースに師事し、哲學を聽くや、プラトーンは曾て作りし詩を火に投じて焼棄てたと傳へられてゐる。これは多分彼の本來の詩的天分に對する想像と、それにも拘らず彼が『國家』篇に於て文藝を非難せる事實とよりして、後人の附會せるものであらうが、併しソークラテースの感化が如何に强くプラトーンの內面的轉向を促せるかを暗示してゐる。年既に六十を過ぎて最も圓熟せる思想と教育方法とを有するソークラテースが、青年氣銳にして最も感受性の强き英才プラトーンを教育したのであるから、その效果は實に測り知られざるものがあつたと思はれる。

政界への希望　「青年時代の自分は多くの人々と同樣の狀態を經驗した。卽ち獨立が出來る樣になるや否や直ちに國家の政治に向ひたいと考へてゐた。」若齡のプラトーンがシケリアのディオーンの親近者に宛てて、シケリア行の顚末を記した『第七書簡』には、自らの政治的關心が既に早く少青年時代に萌してゐたことを述べてゐる。そして又彼が政界に進出し得べき機會も決して少くはなかつた。彼自らも回想してゐる通り、當時は國政に對する民衆の不滿が甚だしく、そのために政界の波瀾が頻發した。三十人寡頭政府が成立した時、その中には首領たるクリティアスがプラトーンの母方の伯父であることを初めと

して、「親戚や知人がゐて彼を然るべき地位に招いた。」彼自らもこの政府に期待する所が多くその施政振りに注目してゐた。然るにこの政府は當初の間は善政を行つたけれども、間もなく墮落して プラトーンの期待を裏切つた。わけても「自分に親しい老ソークラテースを、自分が當時の人々の中で最も正しき人と信じてゐたその人を、死を以て脅迫しつつ或國人の逮捕の使者に加はらせて、彼等政府の仕事に參加せしめた」といふ事實、卽ちさきに述べた通り、サラミスの財産家レオーンの財産を不法に沒收するために、ソークラテースを他の四人の使者と共に遣はしたといふ事件は、プラトーンを痛く憤激せしめた。やがてこの三十人寡頭政府が顚落して民主政治が回復せられるや、プラトーンの胸には「以前より幾分は弱かつたけれども、併しなほ再び私事を放棄して政治に參與すべき希望が起つた。」然しながらこの民主政治も亦彼を滿足せしめず殊に、ソークラテースをば「就中ソークラテースに過はしからぬ不敬虔の廉を以て」、民主政治の領袖たる二三の人々が法廷に訴へ、民衆がこれに死刑を與へたといふ事實は、プラトーンをして益々嫌惡と反感とを抱かしめる至つた。かくの如くにして、彼は當代の政界にも國法にも國民の風習にも悉く失望し、而もこれ等を改革するために必要なる同志も容易に得難きことを知つて、「假令政治の改革の理論的考察は止めないとしても、その實踐をば、時期の至るまで待つ」ことに決心した。そしてつひに「自分は眞の哲學を讃美して、それ（哲學）からのみ正しき政治並びに個人に於ける一切の正しき事を看取し得るといふことを言はねばならなかつた。かくて正しく且つ眞に哲學する人々の種族が國家の支配に立つか、或は國家に於ける權力ある種族が何等かの神的寡與によつて本當に哲學する以前には人類種族は諸々の惡から解放されないであらう」と考へる至つたのである。

海外旅行―第一回シケリア行　思師を喪ひ祖國の政界に失望したプラトーンは右の如き見解を抱いて伊太利とシケリアとに赴いた。尤も傳說によればソークラテースの死後プラトーンは先づヘーラクレイトス學徒なるクラテュロスとパルメニデース學徒なるヘルモゲネースに就き、それより他のソークラテース門下と共にメガラのエウクレイデース（同じくソークラテースの弟子にしてメガラ學派の祖となれる人）の許に身を寄せ（ヴィンデルバントによればそれは前三九九年）やがて單身キュレーネー

を訪うて數學者テオドーロスと交り、次に伊太利に渡つて、ピュタゴラス學徒なるプィロラオス及び（その弟子）エウリュトスに接し、更に埃及に赴いて聾言者達と交つた。これ等の旅程は果して信ぜらるべき否か不明であるが、ともかくプラトーンの思想にはヘーラクレイトス及びパルメニデースの哲學、ピュタゴラス學派の數學的並びに宗教的要素等が多分に取容れられてゐることは事實であつて、上の傳說もこの事實から翻つて想定せられたものであらうと思はれる。

十年に餘る旅行の間に、（若しくは一旦アテーナイに歸つてから更めて）―自らの回想によれば四十歲の時であるが、多分前三九〇年頃―プラトーンはシケリアを訪れて、そこの新興都市國家シュラクーサイの國王ディオニュシオスと相識つた。その經路は先づ若きディオーンをば哲學と實踐とに於て敎化し、當代シケリア人達の逸遊享樂の弊風に對立して大いに有德となれるディオーンが、その義兄に當れる國王ディオニュシオスをも同じ敎化によつて有德ならしめんとし、プラトーンを國王の師傅に推擧したものと思はれる。然るに國王はプラトーンの敎說を容れるだけの寬容を缺き却つて彼を嫌惡したらしく、この計畫はつひに失敗した。傳說によればディオニュシオス王はプラトーンと口論して激怒し、彼を殺さんとしたが、ディオーンとアリストメネースとに止められ、偶々シュラクーサイに使者として來たラケダイモーン人なるポルリスに渡して奴隷に賣らしめることとした。ポルリスは彼をアイギーナに連れて行つて市場に出した。（アイギーナは當時アテーナイと交戰中であつた）アイギーナの國法―最初にアイギーナ島に來るアテーナイ人は死刑に處せられるといふ國法―によつて殺されんとしたが、プラトーンが哲學者なるの故を以て幾かに赦され、宛も戰爭の捕虜と同樣の取扱によつて奴隷に賣られた。偶々キュレーネー人なるアンニケリスが二十ムナー（若しくは三十ムナー）を以て彼を買取り、アテーナイなるプラトーンの友人に渡して呉れた。友人はその代價を支拂はんとしたがアンニケリスは、「プラトーンのために盡すことはアテーナイ人だけの特權ではない」とて代金を受取らなかつた。又一說によれば、ディオーンがその代價を送つたがアンニケリスはそれを受けず、その金を以てアカデーモスの神域を買つてプラトーンに與へたとの事である。（アカデーメイア創立の費用がかかる事情によつて出來たといふのは恐らく附會的傳說であらう。ヴィンデルバントが言つてゐる樣に、プラトーン自身の財産と友人達の補助とによつて、そ

の費用が辨ぜられたといふのが眞實と思はれる。)

アカデーメイアの教育事業　プラトーンが長途の旅行から歸つたのは前三八八年頃であらうと思はれる。それから間もなくアテーナイの西北郊外約二粁の地、ケーフィーソス河のほとりなるアカーデモス（アテーナイの英雄神）の神域にあつたギュムナシオンを手に入れて、そこに學塾を開いた。それが卽ちアカデーメイア（若しくはアカデーミア）である。（一說によればその英雄の名はヘカデーモスと呼ばれ、隨つて學塾の名も、もとはヘカデーメイアであつたとのことである。）幾十人の學徒が學園内に寄寓し、プラトーンはソークラテースの例に倣ひ無報酬で敎育を行つたのである。アカデーメイアは恐らくピュタゴラス敎團に倣つて建てられたものであり、心身の修養によつて國政に貢獻すべき有爲の人士を送り出すことがその趣旨であつたと思はれる。故に上流後秀の士にして政治的抱負を有する者がそこに入門し、それは宛も貴族主義政治思想の培養所となつたのである。但しそれはピュタゴラス敎團に於けるが如き嚴格なる禁欲的假錬的修業によらず、自由なる討論研究によつて研學することを特色とし、且つ同じく政治的關心を有しながら後進のイソクラテースの學校が雄辯術を敎へて直接に政治活動の準備を與へたのに對して、アカデーメイアは哲學によつて眞に根柢の深き政治的見識を與へることを任務としてゐた。それ故にプラトーンは政治的關心を棄てて哲學的敎育に轉向したのではなく、寧ろ政治的關心を一層深遠なる基礎の上に實現せんがために哲學―そして同時に敎育―に身を委ねたと解せねばならない。アカデーメイアに於ける彼の敎說がこの方面の關心を離れなかつたであらうことは、彼のすべての著作に共通する經世的抱負―特に彼の主著『國家』篇と最後の未完成の大著『法律』篇とが共にこの關心を主題としてゐることー―によつて十分に推察することが出來る。ともかく、アカデーメイアは一生を獨身で通せるプラトーンに取つては愛弟子を子の如くに考へた大家庭であり、又アテーナイの現實の政界に失望せる彼に取つては未來に生くべき青年達に政治的理想を高く深く培つた所の土壤であつたのである。

再三のシケリア旅行　プラトーンの政治的關心は、靜かなるアカデーメイアの敎育生活に二度の中斷を惹起した。卽ちアカデーメイアの開設後、二十年を經て彼が凡そ六十歳に達した頃（多分前三六八年）さきに失敗したシケリアのシュラクーサイヨ

朝に再び出かけることとなつた。それはディオニュシオス一世が歿してその子ディオニュシオス二世が卽位し、この幼帝が理論的にも實踐的にもプラトーン流の敎養を熱望して居り、且つその可能性が十分にあるから、今を措いてはプラトーンの哲人政治實現の好機はないであらうといふディオーンからの強要に動かされたからである。然るにシュラクーサイに行つて見ると、そこには內訌が激しく、ディオーンが王位を覗ひつつあるとの中傷が行はれてゐた。プラトーンはディオーンのために極力辯明の勞を取つたが及ばず、四年目に幼帝はディオーンを船に乘せて追放した。プラトーンは身の危險にも拘らず、なほ留まつて幼帝の敎化に盡さんとしたが、幼帝はこれを從順に受けるだけの性能がなく却つて憎惡し反抗したので、プラトーンもつひに空しく歸國した。（ディオーンも亦アテーナイに流れて來てプラトーンとの親交を續けてゐた。）

その後數年にして（多分三六一年）シケリアに於けるピュタゴラス派に屬する友人達の希望により、且つディオニュシオス二世の招きにより、王がディオーンと和し共に政治改革に努めるとの約を以て、プラトーンは第三回のシュラクーサイ行を決行した。然しこれも政爭に誘されて又失敗に歸し、プラトーン自らの身も危險も顧したが、ピュタゴラス派の首領アルキュタスの配下にあるタレンツム政府の干渉的仲裁により辛うじて難を免れ歸國した。その後ディオーンは政爭の犧牲となつて前三五三年に殺され、プラトーンのシュラクーサイに寄せた希望は全く絕えた。彼の『第七書簡』はこの時に書かれたものであり、ディオーンの親戚知人に宛てて在來の經緯と自らの心情を打明けたものである。

晩年と最期　アテーナイに歸つたプラトーンはその後全くアカデーメイアの生活に專念し、衰へざる活動力を以て八十歳の高齡まで研究と敎育とを續け、前三四七年に病歿した。その臨終は或人の結婚の祝宴に列した際と言はれ、或は著作執筆中とも傳へられてゐる。

二　プラトーンの敎育思想

プラトーン敎育思想の全體的特質　プラトーンの敎育思想を論述するに當つて、彼に固有なる思想を如何にして限

定し特質づけるかが第一の難點である。既にソークラテースの教育者的面目と教育思想とを專らプラトーン作品の資料によつて叙述して來た吾々は、その中にプラトーンに屬する要素を少からず混入してゐたかも知れず、又これからプラトーン教育思想として論述するに所にもソークラテース的契機が含まれてゐないとは言ひ難いであらう。かかる事態に面して吾々は、世上の通說がプラトーン的特質として認める所を前提とし、彼の教育思想をば次の三點に於て限界づけようと思ふ。

第一はプラトーン教育思想が哲學的基礎づけを以て說かれてゐることである。ソークラテースが倫理學の父と言はれ得るならば、プラトーンこそは哲學の父と呼ばれ得るであらう。ソークラテースによつて人生の目的・自己の使命・市民の義務等の問題として考察せられた倫理的卽教育的理論は、プラトーンによつて形而上學若しくは認識論より背景乃至根據を與へられた。故に飜つてかかる哲學的根據と共に教育思想が主張せられてゐる場合に吾々はそれをプラトーン固有のものと見做し得るのである。そしてかくの如き特色は主としてプラトーンの中期以後の作品に現はれてゐる。

第二の特質は藝術家としてのプラトーンが豐かにも美しきミートス（μῦθος）（神話又は詩話）を、その教育思想の背後に導入した點に存する。元來プラトーン作品の全體が、初期の所謂ソークラテース的對話篇をも含めて、ヴィンデルバントの言へる如く、「詩的幻想の所產であり、それに於て政治的宗教的理想と學的思想とが生動的形態にまで形成せられてゐる」のであつて、「彼の本質の實踐的方面と理論的方面とは美的完成に於て合一し、改革者（的面目）と思索家（的面目）とは藝術家（的面目）に於て融合してゐる。」然しながらこの藝術的天才が前

世や來世や神々や世界に關する假托物語としてのミートスを作り出し、それを現實の事態に關する論述としてのロゴス（實話又は理論）の背後に導入し、それによつて理論の究極する限界を補充し、理論を支持、理論以上の確信を表明するに至つたのは、ラェデル（H. Raeder）の指摘せる如く、プラトーン中期以後の作品の注目すべき特徵である。故に吾々はかかるミートスの裏書を以て語られる限りの教育思想をばプラトーンに獨特なるものと見て、これを歷史的ソークラテースの思想から區別したいと思ふ。因に第一の哲學的特質と第二の神話への傾向とは相合してプラトーン思想に宗教的色彩を帶ばしめてゐる。來世や前世や永遠の問題がプラトーンの世界觀・人生觀の主要契機となり、それが教育思想にも結合してゐることは、ソークラテースに殆んど見出し得ざるプラトーン的特徵である。

第三にプラトーンの教育思想は國家論との不離の結合に於て取扱はれてゐることを特色とする。ソークラテースの考へ實行した教育思想には勿論子弟を國家の有爲なる一員として陶冶することを含んでゐたのであるが、これを國家組織の見地より系統的に把握し論述したのは、本來政治的關心に終始せるプラトーンの輝ける功績である。彼の教育思想の大部分が『國家』篇及び『法律』篇の中に見出されるのはこの事情に由るのである。

以上の三點はプラトーンの特に著しき面目―哲人プラトーン、藝術家プラトーン、並びに政治的關心に貫かれたるプラトーンの面目―に關聯せる教育思想の特質であるが故に、吾々はこの三標準に該當せる領域を以て特にプラトーン的なるものとして力說したいと思ふ。其他の點に關しては、前節にソークラテース的なる面目及び思想として取扱へる諸相がそのままプラトーンにも繼承せられてゐたと解して差支ないであらう。否、單にソークラテース

のみならず、ソフィステース達の活動と思想、一般的風習としてのエロース、スパルタ及びアテーナイの教育事實等希臘古來の教育的傳統は、何れも何等かの形態と意義とに於てプラトーン教育思想の中に集成せられ、更に植民地諸學派の哲學並びにホメーロス以來の文學の諸要素も、プラトーンの思想中に有力なる契機として綜合せられてゐる。實にシュテンツェル(J. Stenzel)の言へる如く「プラトーンの思想は單に事實上それに先立てる全希臘思想の成果であるばかりでなく、彼が意識的にそれを先人の業績に立脚せしめ、その業績の生ける核心を保存し意義づけた所に彼の教說の本質的特徵が存する。」

教育の本質論　以上の全體的特質を念頭に置いてプラトーン教育思想の主要契機を論述しよう。先づ彼が教育の本質を如何に考へ、それに關聯して師弟の關係を如何に規定したかが究明せられねばならぬ。彼によれば第一にエロースは對人的結合の情である前に自己內面に於ける醜・惡・無智より美・善・智への——現實より理念への——思慕であり、人的・可滅的なるものと神的・不滅的なるものとの對話(διαλεκτος)である。詩人プラトーンはこの哲學的說明を更に神話によつて基礎づけ、エロースは富裕の神ポロス(πόρος)と貧窮の女神ペニア(πενία)との子であり、父母の性を共に稟けて現實の貧窮(ペニア)より理念たる富裕(ポロス)への不斷の焦慮・憧憬に生きるとし、智に關しては無智より智への生涯の愛智(φιλοσοφία)であるとした。玆にエロースは價値希求・文化的思慕として人生觀の原理に確立せられたのである。第二にかかるエロースはその究極目的たる不滅永生を得るために可滅者をして不斷の生產(γέννησις)をなさしめ、就中精神的生產によつて諸德を後輩に傳達せしめ、後輩と共にこれを育成せしめる、玆に文化的思慕としてのエロースは教育的思慕としての子弟愛となる。更にこの精神的生產による

可滅者の不滅は、一切萬有が不斷の生成(γένεσις)によつて永生を得るといふ世界觀を背景とし、プラトーンの教育觀は形而上學的根柢に支へられてゐる。而も玆に精神的生產とは既成文化の單なる傳達注入ではなくて、プラトーン的に言へば、魂に內在せる觀力を現象より理念へ轉向せしめることであり、換言すれば教師の刺戟により子弟に內在せる價値可能性を實現せしめ、文化の傳達を介して文化の創造へと向はしめることである。玆に後世の文化的教育學(Kulturpädagogik)の原型が見出される。この場合第三に、教師も子弟も共に文化的思慕を抱き、現實より理念への旅の同行者として友情(φιλία)に結ばれ、教師は唯比較的先進者として指導的地位に立つ。これがプラトーンの友情論に於て述べられたる師弟關係であり、玆に希臘社會の風習たりしエロース並びにソークラテースの師弟關係が基礎づけられたのである。

教育の目的論　プラトーンは個人の教育を國家の組織と不離の關係に結合しその觀點から教育の目的即ち陶冶理想を考へた。彼に於ては支配者と軍人と生產者とが各々その本分を盡して調和する所に國家の正義(δικαιοσύνη)は成立するのであるが、この國家組織は個人の精神構造に對應する。即ち各人は欲望(ἐπιθυμητικόν)と氣概(θυμοειδες)と理性(λογιστικόν)との三機能を具へてゐながら、天性その何れかが特に優れるに從つて生產・國防・政治の何れかを職分とするのである。而して欲望が理性の命に從ひ氣概の統制に服する所に節制(σωφροσύνη)の德が存し、氣概が理性の命によつて欲望を制する所に勇氣(ἀνδρεία)の德が存し、理性が氣概を指揮して欲望を統ぶる所に智慧(σοφία)の德が存する。この三德の調和が即ち個人に於ける正義である。かく國家と個人とを大小二つの秩序(κόσμος)の——後世思想家に於ける大宇宙(マクロコスモス)と小宇宙(ミクロコスモス)とに比すべき——關係に對

應せしめたのは、個性と國家との兩立調和を目させるアテーナイ陶冶理想の基礎づけと解せられると共に、後世の社會的教育學（Sozialpädagogik）及び現代の政治的教育學（Politische Pädagogik）の主題を示せるものである。

教育を國家と不離の關係に結合し、國民生活を國家によつて統制することは、スパルタを代表とする希臘諸國の傳統であり、又個人の性能の自由なる發展を國家の興隆と調和せしめることはアテーナイに於て特に典型的に追求されたる理想であつて、プラトーンの教育思想はかかる典型的希臘教育思想を繼承し、それを彼に獨自なる理論的基礎と體系とに於て把握し整序せるものである。

さてプラトーンに於ける國家組織の原則とも言ふべきものは、各人がその素質に適應せる個性を發揮して公の事の一領域を擔當することである。「素質に應じて一人が一事を」爲す、といふのが彼の標語である。各人は「彼自身の事を爲す」べきであつて、一人が多くの事を爲し得るものでもなく、又爲すべきでもない。而もかくの如き素質の尊重、個性の發揮は、單なる個人主義のためではなくて全く「國家の事」を益するためである。自己の素質・個性による定職を果し得ざる者は「自己をも國家をも益することなきが故に」生存の甲斐なしとプラトーンは言ひ、そして定職ある者が病めるときこれを醫するは「國家に損害を與へざらんがためである」と說いてゐる。要するに彼ほど個性の發揮と國家の存立とを密接に結合して考へた者はない。個性と國家とは併しながら決して安易に調和するものではない。國家の統制に急であつたスパルタは國民の個性を不當に壓迫した。プラトーンの『法律』篇に指摘した所によれば、それは勇氣といふ一つの德のみに偏して他を犧牲にしたのである。黃金期のアテーナイは各自の個性の自由な發揮によつて高貴豐饒なる文化國家となつたけれども、統制の弛緩、個人主義の擡頭はやがて、（後述の如く）國家自體の存立を危殆に陷れた。これも亦既にプラトーンが『法律』篇に於てアテーナイ民主政治を過度の自由主義として攻擊した所である。アテーナイの如くに個性を尊重して而もスパルタの如くに統制ある國家を形成するためには、個人と國家とを如何なる關係にあらしむべきか。換言すれば正しき個人と正しき國家とは如何なる方式に於て求めらるべきか。これがプラトーンの前に投ぜられた問題である。

プラトーンの『國家』篇の中心課題は上の問題に答へて正義を探究することに存する。「正義自體とは何であるか。而して完全に正しき人があるか否か。若しあるとすればそれは如何なるものであるか。」といふことを範型として求め、同樣に又「不正及び最も不正なる人」を求めて「その幸・不幸に就て檢討し、而して吾々の中「彼等に最も似たる者」が「彼等の運命に最も似たる運命」を有つであらうことを證明するのが全篇の主題である。これによつて明かなる如く、『國家』篇は吾々の現實生活の正・不正、從つて幸・不幸をそれに照して判斷するための理想的人間生活―正しき幸福なる人の範型―を求めるのがその主題でつて、卽ちそれを教育思想として見れば陶冶理想の論に當るのである。

然るにかくの如き主題を以てせるこの著作を『國家』と名づけたのは何故であるか。ネットルシップ（R. L. Nettleship）はこれを解して「プラトーンに取つては、人間生活が何等かの組織されたる社會形態に於てのみよく生活され得るといふことが人間性の一重要事實であり、而も希臘人は國家を以て社會中の最善の形態と考へたが故である」と述べてゐるけれども併し吾々はこれを寧ろ、第一にプラトーンが個人と國家との關係を如何に考へたか、第二に彼はそれを取扱ふ方法上の順序を如何に工夫したか、といふ二つの根據から解釋する。卽ち第一にプラトーンによれば、諸々の國家の特質は「樹の木や岩石から」成立つのではなくて、「その國々の中に於ける人々の性格から」成立つ。故に個人の精神はそれと「同じきもの」をより大なる姿に於て國家に現すものである。例へば、理性の支配を重んずる所の「貴族主義的」なる人々によつて形成される國家は哲人支配の「貴族政治」の形態を現はし、欲望の支配に身を委ねる「民主的」なる人々は、やはり欲望に驅られる大衆が政治を掌る所の「民主政治」の國家を現出せしめる。かかる思想は個人精神と國家形態とを謂はば小宇宙と大宇宙との關係に考へ、國家の成員たる個人の精神構造が國家の組織形態に照應するものと見る見地である。事實上『ポリティア』といふ標題は、シュテンツェルの言へる如く、國家と狀態若しくは組織との兩義に譯せられる。卽ち國家としてはその成員が如何なる狀態・組織の下に生活してゐるか、個人としてはその精神の諸機能が如何なる構造に作用してゐるか、これが互に離すべからざる大小の「ポリティア」であつて本篇の主題たる正義と不正も亦實にこの組織・構造の如何に存する。プラトー

ンが個人の精神構造をば「彼自らの中なる國家」と呼び、又「正義には個人のものと全國家のものとがある」と說いてゐるのもこの故である。第二に併しながらプラトーンによれば、對象を直ちに小なる形に於て見るよりも、先づ大なる形に於て見、次にそれと同じき姿を小なる形に於て見る方が、一層容易に考察し得る。故に正義も先づ大なる國家組織に於て、次に小なる個人精神に於て探究せんとするのである。かくてプラトーンは正しき國家組織として貴族政體又は君主政體を論じ、不正の國家組織として金權政體・寡頭政體・民主政體・僭主政體を論じ、是等にそれぞれ對應する國民各自の精神構造を述べてゐる。要するプラトーンにあつてはその理想的國家組織は理想的個人精神と結合し對應してゐるのであつて、玆に陶冶理想が國家的見地と個人的見地との不離の關係に於て取扱はれてゐるのである。

さて周く知られてゐる通り、プラトーンの理想國家觀によれば、支配階級と軍人階級と生產階級とが各々その本分を盡して調和する所に國家の正義は成立すると共に、その國家組織は個人の精神構造にも反映する。卽ち各人は欲望と氣概と理性との三機能を具へてゐながら、天性その何れかが特に優れるに從つて生產・國防・政治の何れかを職分とするのである。而して欲望が理性の命に從ひ氣概の統制に服する所に生產階級の德目たる節制が存し、氣概が理性の命によつて欲望を制する所に國防階級の德目たる勇氣が存し、理性が氣概を指揮して欲望を統ぶる所に支配階級の德目たる智慧が存する。この三德の調和が卽ち個人に於ける正義であり、同時に國家組織に於ける正義であつて、陶冶理想もこれに外ならぬのである。

國民各自が上述の如く素質に應じて各階級に分屬することが國家成立の必須條件であるが、然らばかかる區別は何處に由來するのであるか。人は何故にそれぞれ異なる素質を以て生れ、異なる階級に屬する樣に運命づけられてゐるのであるか。この根本的設問に對してプラトーンはまた神話を語つてゐる。それによれば人々は地下にありし時、彼等の本性と彼等が有する武器其他の器物とは、神によつてそれぞれに異なる物質を入れて創り出された。卽ち支配者たるべきものは金を、軍人たるべきものは銀を、生產者たるべきものは鐵及び銅を入れて造られた。彼等の素質の優劣と階級の上下とは是等の金屬の夢級に因るものである。かく同じ大地から創り出されたことの故を以て、各階級は同じき母より生れたる同胞として相和し

組國を愛すべきであると共に、各々の本性に應じてその分を守るべきである。而してその初めに於て造られし本性に從つて子孫も大體は祖先と同じき素質を以て生れるのであるが、時には金族より銀族が生れたり、銀族より鐵銅族が生れたり、鐵銅族より金族や銀族が生れたりすることもあるから、神は支配者に命じてよく國民の素質を識別して至當の階級に編入すべきことにしてゐる。

この神話はヘーシオドスの人類五代の思想を受けて、それを國家組織の基礎たる素質論に改造せるものであり、又プラトーン自身に於ては輪廻說及び想起說に關係して、現世の一層詳細なる階級別を前世の靈魂の生活狀態より解明せんとする企てが存するのであるが、ともかく上述の神話は國民の各階級間に愛國心と團結・調和の心情とを抱かせるために作り出されたものであると共に、人間の素質といふ宿命的事實を理論（ロゴス）によつてではなく神話（ミュトス）によつて解明し、而も階級別を素質の優劣差等によつて定めんとする合理性をも含んでゐる。玆に吾々は哲人としての、詩人としての、並びに愛國者としてのプラトーンの面目がよく結合して發揮せられてゐると思ふのである。

教育の發端論　上述の如き陶冶理想に到達せしめたるためには、國民を如何なる教材に於て、如何なる段階を逐うて、教育すべきであるか。プラトーンは國家の正・不正の發生を觀るにはその國家の支配者が如何にして養育せられ教育せられるかを觀ることが必要であるとの見地から、『國家』篇に教育論を導入し、そこでは支配階級たるべき者の教育過程を論じてゐるのであるが、その過程に於て偶々國防階級や生產階級の受くべき教育の內容・限度も屢ね示されてゐるが故に、結局國民教育の全般的考察が行はれてゐるわけである。（『法律』篇の教育論は『國家』篇のそれに比べて更に詳細に亘り、且つ幾分妥協的・折衷的色彩に富んでゐるが、併し普通には『國家』篇の所說がプラトーン本來の面目を代表するものとして採用せられるので、玆にもそれを主脈として叙述することと

した。）

さて教育の問題は既に人の誕生前より始まる。即ち「優良なる種族を生ましめる爲の工夫」が考察せられる。プラトーンはこの工夫を以て爲政者の任務とし、古典期のスパルタをモデルとして彼の提案を示してゐる。それによれば結婚年齢を男子は三十歳より五十五歳まで、女子は二十歳より四十歳までの間に限定し、戰爭其他の場合に卓越せる力を發揮せる優良なる男子には婦人に接する機會を多からしめ、又一般に優良なる男女の結合數を多くし、劣等なる男女の結合數を少くする樣に、或る策略を加味せる抽籤によつて男女の結合を管理し、不良なる生兒は棄て、優良なる者のみを育て、實母を子供に知らしめぬ樣に乳母が授乳し教育すべきこと等が說かれてゐる。要するにプラトーンは國家のために男女並びにその生兒を國家の共有たらしめんことを意圖してゐたのである。因に國家の平和秩序、國民の團結はプラトーンの最も强く希念した所であつて、そのために國民をして宛も一つの身體に於ける手足の如く、その快苦を共にせしめることを理想とした。婦人と子供の共有も財產の共有と共に、かかる要求から主張せられたのである。但しこの主張は『法律』篇に於ては緩和せられ、國法の强き權威にも拘らずそこでは家族の形成と若干の私有財產とが認められてゐる。

誕生後十七歳頃までの教科は學藝（ムシケー）と體育（ゲムナスチケー）とを主とする。これはプラトーンが「長き年月を經て見出されたものよりも更によきものを見出すことは困難である」とて、希臘殊にアテナーイの傳統的教育事實を尊重せるものである。學藝としてプラトーンの取扱へる教科は文藝と音樂と造形美術とであつて、想像の如き低次の知的陶冶及び一般に情意的方面の陶冶に資すべき教科內容である。而して體育も亦單なる肉體の鍛錬を超えて精神陶冶をも

意圖するものであるから、結局學藝と體育とは共に、後の高次の知的陶冶に對立して、情意的陶冶及び低次の知的陶冶を含み、ナトルプの所謂「科學以前の教育」としての性格陶冶を使命とするものである。故にこの時期に於ては、諸科學の初步も授けられるが、それは「非體系的教科」としてであり、且つすべての教科は「强制的でなく遊戲的なるものとして」課せられ、その自由なる學習の中に各兒の個性の發見が意圖せられる。尙この時期には軍事の見學も課せられる。要するにこの第一期の教育は基礎的陶冶の段階であつて、この陶冶に關するプラトーンの所說中には一例へば神話の教育的考察・音樂及び詩歌の諸調子・諸形態の心情に及ぼす影響、體育の精神陶冶的意義並びにそれ等の教育方法等一永く普通教育上の卓見として價値を有するものがある。

第二期たる十七歳より二十歳までは體育（及び軍事）を專修せしめる。元來體育は生涯を通じて繼續するのであるが、特にこの期間には他の教科を排してこれを專修せしめ、後年の困難なる教科に堪へ得べき頑强なる心身を養ふのである。而してこの時期の教育に於て成績のすぐれざる者は生產階級に屬すべきものとして殘される。

第三期たる二十歳より三十歳までは後の哲學の豫備教科としての諸科學即ち算術・平面及び立體幾何・天文・音樂理論を系統的に學ばしめる。玆では各教科の本質及び相互關係を一目の中に綜合せしめねばならぬ。この「綜合觀的」なるか否かが「辨證的」即ち哲學的なるか否かの最大の試練である。事實上希臘に於ては數學と天文學と音樂理論とは共に世界の調和特に數的秩序を把握するものであり、これ等の教科を修めながら個々の對象の背後に存する統一一ヘーラクレイトスの所謂「隱れたる調和」一を洞察し得ざる者は哲學的教養への可陶性を缺く者と言はねばならぬ。プラトーンはかかる見地を恐らくはピュタゴラス學派より學んで、自らの教科課程論中に編入

し、意義づけたのであらう。而してこの時期の教育に成績のすぐれざる者は軍人階級に屬すべきものとして殘される。

第四期たる三十歳より三十五歳までは專ら狹義の哲學たる辨證法を修めしめる。それは感覺的なるものを離れて純概念的に事物の本質を取扱ふ學である。『國家』篇の教科課程中にプラトーンは「辨證的進行」なる語を用ひ、それは「人がディアレゲスタイ（對話思索）することにより、一切の感覺なしに推理を以て、各々の其自體（本質・イデア）を觀ることを企て、そして善自體を彼の理性を以て把捉するまで退かぬ所の進行を呼ぶのであると言ひ、又「辨證的研究」なる名稱を用ひて「それは假定（ヒポテーシス）を除き太初（アルケー）自體に向ふ」ものであると說き、かかる領域を一學科として「辨證法」と名づけ、それを全課程の頂點に位せしめてゐる。それは諸科學殊に數學が「假定より末に」向ひ、「感覺の妾」（例へば圖形の如きもの）を用ひるに對して、純概念的・無假定的に、善竝びに諸々のイデア（事物の本質）を探究する領域であつて、狹義の哲學と解すべきである。

尙三十五歳より五十歳までは、プラトーンの譬喩によれば再び洞窟に入る時期である。換言すれば俗世間に出て軍事及び政治を掌り豐富なる經驗を獲得する。而して五十歳以後の餘生は「辨證法」の最高對象たる「善のイデア」を研究し、傍ら交替に政治を掌り後進の教育に當る。かくして「淨福者の島」に退ける者（歿せる者）は國家によつて記念碑を建てられ、供物を獻ぜられる。神託が許すならば「神として」然らずんば「幸福にして且つ神的なる人」として崇敬せられるのである。

上述の如き教育段階即ち教科課程は、プラトーンに於ては同時にエロースの發展段階であると共に又認識の深化

の段階である。即ち先づ『饗宴』篇に於ては「エロースの仕事に向つて正しく進まんとする者」の辿るべき順序として、先づ肉體美より精神美へ、而して終に最高の學の對象たる美自體へと進むべきことを說いてゐる。又『國家』篇に於ては認識の深化の過程をば、第一に想像力を以て事物の映像を認識する段階、第二に知覺を以て現實の事物を認識する段階、第三に悟性を以て諸科學の理論を認識する段階、第四に理性を以て諸々のイデア竝びに善のイデアを認識する段階に分けてゐる。前述の教科課程に於ける學藝・體育の基礎的陶冶及び軍事其他の實踐見學の段階は、エロースに於ける肉體美乃至實踐美への思慕段階であり、認識に於ては想像的及び知覺的認識の段階である。次に教科課程に於ける諸科學の學修段階は、エロースに於ける認識美への思慕と、認識發達に於ける悟性的認識の段階とに相當する。而して最後に教科課程に於ける狹義の哲學の段階は、エロースに於ては美自體への思慕に、認識に於ては理性が諸々のイデア竝びに善のイデアを認識する段階に相當する。

教育の方法論　プラトーンが主張した教育方法―そして又恐らくアカデーメイアに於て實行せる教育の方法―はソークラテース的對話法であつた。吾々は既に對話法がソフィステース達によつて論爭術として惡用せられたことを述べ、そしてソークラテースはまさにかかる論爭術に反對して獨自の方法を案出し實施したことを說いた。相手を敵とする代りに愛する味方と考へ、事實に立脚し、體驗に結合し、謙虛なる自己省察と旺盛なる眞理探求熱とを以て方法的に進行することを特色とするソークラテース的對話法の精神は、プラトーンによつて最もよく繼承せられ（否寧ろプラトーンの作品を通してのみソークラテースのかかる精神は宣揚せられ）たのであるが、プラトーンは更にこれをば最善の著作樣式として自覺し、而もそこに明瞭なる教育的意義を併せ考へてゐた。彼は『ファイドロ

ス』篇に於て、先づ書かれた文字よりも語られる言葉の方が眞理を敎へる方法として、すぐれてゐることを力說してゐる。

彼によれば書かれた文字は「映像」であるが、言葉は「生けるもの、魂を有するもの」である。文字に向つてその意味を問うても「それは常に同一の事しか示さない。」文字は相手の區別なく人から人へ渡され、そして誤解されたり、不當に攻擊されたりする場合にも、自ら自己を辯護し主張することが出來ずして、常にその書き主を助けに呼ばねばならぬ。然るに言葉は相手の如何に應じて語るべく語り默すべく默し、自己を辯護することも出來るのである。

勿論ここに賞揚されてゐる「言葉」はソフィステース的なる空虛の言葉ではなくて「智者の言葉」である。プラトーンは智者をば種子を有てる農夫に譬へ、それを最も好適なる地盤即ち可陶性ある子弟の魂に繁殖せしめることに敎育を譬へてゐるのであるが、そこでも繁殖の方法として、生ける言葉による對話法を特に强調してゐる。「若し人が對話術を用ひて、適はしき魂を捉へ、智を伴へる言葉を、植ゑ播くならば、それは（文字に書遺すよりも）遙かに結構である。その言葉は自ら竝びにそれを植ゑる者を支持し、而も決して實らぬものではなくして種子を有ち、それから更にそれぞれの言葉がそれぞれの心に榮え、かくてそれを永久に不滅ならしめることが出來、而してそれを有する者をして人間に能ふ限り幸福ならしめることが出來るのである。」

かくして對話法は子弟自らの中に智を榮えしめる方法であり、而も子弟の個性・境遇に應じて融通自在に智を榮えしめ得るのであつて、それぞれの言葉が「それぞれの心に榮える」とは、トムソン（W. H. Thompson）の

註せる如く、對話法の「生動性」を强調せるものである。對話が擊なき思索であり、結局は當事者の自己省察であるといふ重要契機も亦「それぞれの心に於ける言葉の榮え」に外ならないであらう。「哲學」を敎へずして「哲學すること」を敎へるといふ敎育的常套語もかかる方法によつてのみ保證せられる。

「生ける言葉」をかくも尊重せるプラトーンは、それにも拘らず、著作家として、死せる文字—生ける魂の「映像」—を用ひなければならなかつた。この矛盾を止揚するために必然的に要求されたものが即ち對話篇といふ著作樣式である。死せる文字に生ける言葉の生動性を賦與するものはこの對話樣式の外にあり得ない。まことにフリードレンデル（P. Friedländer.）の言へる如く對話を書籍に書くことは、書籍そのものを止揚する唯一の形式である。元來思想の表現形式としての對話體は極めて廣く行はれた藝術樣式であつて、その起源も舊く、ホメーロス詩篇の如きも神々や英雄達を對質的關係に於て語らせてゐる。プラトーンと同時代の文筆家にも例へばクセノフォーンの『ソークラテースの追憶』の如く、對話體の表現形式を用ひた人は少くない。而もプラトーン對話篇が斷然頭角を表し、藝術的價値に於てのみならず、實に哲學的訓練といふ敎育的價値に於て千古に輝いてゐるのはプラトーンの自覺せる努力の結果であらう。ディオゲネス・ラエルティウスが辨證法の創始と洗煉と完成とをプラトーンの功に歸したのは、全くかかる對話法としての辨證法のプラトーン的自覺を指してゐるのである。

ソークラテース的對話法は子弟の自發性を前提とし、それの發現を刺戟し助成する方法であるが、この場合に、子弟が他より注入せられることなく、單に刺戟せられるのみにて、自らの中に認識を取出すことは何故に可能であるか。この問題へ答へるために提唱せられたのがプラトーンの想起說である。即ち吾々の魂は前世に於て完全

なるイデアの世界に住み、あらゆる事物の本質を認識してゐたのであるが、此の世に生れると共に忘れてゐるのであるから、イデアの映像たる感覺的事物を刺戟として、イデアを想起するといふのが、想起說であつて、問答の眞義も實はイデア想起の刺戟を與へることに存するのである。彼の哲學方法として—先驗的なるイデアの認識方法として—哲學史上の重要問題を成せるこの「想起」(ἀνάμνησις) はかくしてプラトーンに於ては何よりも先づ教育方法との結合に於て唱へられたのである。

プラトーンの史的地位　西洋の一般思想史及び教育史に於けるプラトーンの地位は玆で附說的に叙述するには餘りに偉大であり、それは畢竟今後の本書の全體を通じて追究せらるべき問題であるが、今は唯極めて概觀的なる一瞥を投じて置きたいと思ふ。プラトーンが彼に先立つ全希臘思想を如何に包容し集成したかに就いては既に指摘した。吾々の關心は玆では專ら彼が後世に與へた影響に限定せられる。アカデーメイアが、後述の如く、古今無比の長き學統を傳へて羅馬時代の末期まで及んだことは、プラトーンの教育活動そのものの繼續として彼の功績中の最も現實的なるものであらう。次に彼の思想は先づアリストテレースによつて繼承せられ、批判せられ、擴充せられて、學の最も廣汎なる範圍と、曾てなかりし體系とに發展した。羅馬に入つては共和時代のキケロを代表として羅馬の思想家にしてプラトーンの影響を受けざる者なく、帝政時代の希臘思想家プルータルコスは特に熱心なるプラトーン祖述者として羅馬人にも至大の感化を與へた。やがてプローティーノスを中心とする新プラトーン學派によつてプラトーン哲學は神秘的に深化せられ、更に基督教の世となるや教父哲學の頂點に立てるアウグスチーヌス及びスコラ哲學の開拓者たるアンセルムスによつてプラトーン哲學は基督教義と深く結合させられた。かく

中世期を通じて神學に奉仕させられて來たプラトーン哲學は文藝復興期の人文主義運動に至つて更に廣き相貌に於て復活し、例へばダンテ、ペトラルカ、ボッカチョ等の如き開拓者によつて人間性の自由なる伸長—就中愛の發露の如き問題—に對してプラトーンは有力に呼出された。十八世紀後半の新人文主義運動—その特に有名なる代表者ヴィンケルマン、ゲーテ、フムボルト等—がさきの人文主義運動に比べて一層直接的に希臘精神の發揚に努力したことを思へば、その中にプラトーン思想が强く働いてゐることは容易に推察せられる。カントはプラトーンを直接に祖述することはしなかつたが、その批判哲學の基調がプラトーン的なるものと軌を一にせることは周知の如くであり、それ故にカント以後ヘーゲルに至るまでの獨逸理想主義哲學に於ては明かにプラトーンの祖述發展が行はれたのである。更に最近の新カント派—コヘン、ナトルプ、ヴィンデルバント等—はプラトーン思想のカント的新解釋によつて自家の立場の基底を築いたものであり、教育思想に關しても—特にナトルプの如きは—プラトーンを有力なる契機として採用した。シュプランガーの如き別派の思想家すら、教育の本質の究明に當つてはプラトーン思想—殊にそのエロース論—から意識的に傳承する所が多いのである。

第五節　クセノプォーンとイソクラテース

一　クセノプォーン

略歷及び著書　プラトーンとアリストテレースとの間に介在して希臘教育史上看過し難きものにクセノプォーンとイソクラ

テースとがある。クセノプォーン（Xenophon, 430?-354）は前四三〇年頃アテーナイの上流家庭に生れた。ディオゲネス・ラエルティウスの所傳は彼をば「頗る謙虛で美しい人であつた」と記してゐるが併し實は野心に充ちてゐた。若くしてソークラテースの門に入つた。その次第は或日狹い道でソークラテースに遭ふと、ソークラテースは彼を遮つて「食料品を賣る所は何處か」と問ねた。それに答へるとソークラテースは更に「人々が立派な人となる所は何處か」と迫及した。彼が當惑してゐると「では附いて來い、そして學べ」とソークラテースは言つた。かくの如くにして彼はソークラテースの門に入つたと傳へられてゐるのである。一說にはデーリオンの戰で退却の途上落馬し、ソークラテースに助け遲ばれて、それより師弟の關係を結んだとの事であるがこれは疑はしい。前四〇一年に波斯王子キューロスが兄アルタクセルクセースに叛いて內亂を起すや、クセノプォーンはキューロスを援けたスパルタ軍に從つて遠征した。彼がキューロスに近づいたのは親友プロクセノスがサルディスなるキューロスの宮廷にあつて、彼を招いたからである。彼はプロクセノスの招待狀をソークラテースに示して去就の指圖を求めた所、ソークラテースはこれをデルプォイの神託に尋ねよと命じた。クセノプォーンはデルプォイに赴いたが（心中既にサルディス行を決意してゐたので）、「キューロスの許に行くべきか否か」を尋ねずして、唯「如何にキューロスに仕ふべきか」を尋ねた。ソークラテースはこれを咎めたが、ともかくキューロスの許に行く樣に命じた。かくして彼はソークラテースを離れ小亞細亞に渡つたのである。キューロスの遠征が失敗するや、敗走の希臘軍一萬人を率ゐて無事に退却せしめた。（所謂「一萬人の退却」がそれである。）アテーナイに歸つて見るとソークラテースは既に殺され、一般の風潮は爛熟頽廢の途を辿りつつあつた。彼はその率ゐて歸れる軍隊を以てスパルタ王アゲーシラオスに屬し、王と共に出征して、祖國アテーナイを敵としてコローネイアに戰つた。（前三九四年）これより彼はアテーナイから追放せられ、スパルタの祿を受けてエリス州のスキルルースに住し、そこで後述の如き著作の大部分を執筆した。晩年追放を許されてコリントスに移つたが、前三五年頃その地に歿した。

クセノプォーンの著書の主なるものは、次の如くである。（一）『アナバシス』は上述のキューロスの遠征及び希臘軍の退却を

記し、（二）『ヘルレーニカ』はトゥキュディデースの繼續として前四一一年より前三六二年（マンティネイアの戰）までの歷史を載せ、（三）『キュロパイディア』は上述のキューロスをモデルとして政治理想を描き、（四）『アゲーシラオス』は彼の仕へたるスパルタ王アゲーシラオス二世の讃頌演說であり、（五）『ソークラテースの辯明』と『ソークラテースの追憶』とは『ソークラテースの人格及び敎說を主として記したものである。これ等の中で歷史に關するものはイコノミコス』（家政）とはソークラテースの人格及び敎說を主として記したものである。これ等の中で歷史に關するものは嚴密な史實ではなくて、史實を素材とする彼自身の創作物語であり、又ソークラテースに關するものも彼の經歷と淺薄なる思想とより推して史料的價値に乏しい。

敎育思想　右の著作の中『キュロパイディア』はその標題の意味する所は「キューロスの敎育」であるが、その內容はキューロスの全生涯をモデルとして、支配する王と支配せられる國民とが如何にあるべきかといふ政治理想を述べたものである。然しその全八卷の中第一卷第二章には特にキューロスの敎育の背景として、波斯の敎育制度一般（實は自らの敎育意見）を述べてゐる。それによれば先づ首都の中に「自由集會場」と呼ばれる場所がありそこに市井の雜踏を避けて王宮と諸官廳とが建てられてゐる。この場所が四つの區域に分れて、それぞれ兒童・青年・成人及び兵役を果せる老人の四組に宛てられて居り、彼等は毎日所定の場所に出て來る。兒童と成人とは黎明時に、老人は特定の日を除く外は任意の時刻に出頭し、青年だけは（結婚せる者を除いては）夜も輕い武裝をしてここに過す。波斯國民が十二の部族に分れてゐるのに應じてこの各區域に十二人宛の官吏が配屬せられ、それが兒童に對しては青年の組から、青年に對しては成人の組から、成人及び老人に對してはそれぞれ自らの組から選出せられる。

兒童は學校に通ひ、讀み書きの代りに正義を學ぶ。兒童のための官吏は一日の大部分を彼等の間の爭訟の裁判

に費す。又兒童は相互に窃盗・詐欺・誹謗・忘恩・毆打等を戒め、これ等の非行を爲せる者を罰する。兒童は正義の外に克己・服從・節制等の諸德を養はれ、又射術及び槍投を習ふ。

十六七歳にして青年組に編入せられ、それより十年間は、國家守護と克己の修養とを目的として、既述の如く毎夜を政廳に宿泊する。晝間でも彼等は政府の命令を何時でも果し得べき用意をしてゐる。國王が狩獵に出る時は彼等の半數は弓矢と刀と楯と二本の槍とを以てこれに從ふ。この狩獵は往々にして一箇月間も續くことがある。狩獵は戰爭の訓練を目的とするが故にその費用は國庫より支辨せられる。狩獵に於ては困苦缺乏に堪へ、心身を强化し、各種の武技を修練するのである。狩獵に出でざる時は射術・槍投等を練習しその競技を行ふ。

かくして青年期十年の修養を經たる後の二十五年間は成人期である。この間には青年期と同樣に國家の仕事に奉仕する外、必要あらば何處へでも遠征に從軍する。今度は弓矢や槍ではなくて刀と楯とを持つて行く。この成人の中からすべての官吏が選出せられる。(但し兒童の教師だけは青年から選出せられる。)

成人期二十五年間を經たる者は「長老」の仲間に入り、最早國外の遠征には從軍せず、內に留まつて公私の訴訟を裁き、又官吏を選擧する。青年や成人の中にて義務に違犯する者があればその所屬の組の官吏はこれを長老に訴へ、長老はその違犯者を追放する。追放刑に處せられた者は餘生を失格者として過すのである。上述の人生の四期に於て、下級の期間にその義務を果さざる者は上級に編入せられざるが故に、長老はすべての義務を果せる者であり、一切の名譽と誇とを有する者である。

以上の如くクセノフォーンが波斯の一般教育制度として述べてゐる所は、歷史的事實ではなくて、彼が理想とせ

るスパルタ式教育である。彼はこの背景の下に作中の主人公キュロスの生立ちを詳述してゐるが、それも擧竟軍國の支配者たる者の理想的教育を意圖せるものであつて、スパルタ的面目を基調とせるものである。祖國アテーナイの頽廢を眺めつつ生涯の大部分を征戰に送つたクセノフォーンが、かかる教育思想を抱くに至つたのは故あることと言はねばならない。而してこの『キュロパイディアイア』は羅馬人の間に大いに愛讀せられ、カトーやキケロはその中に大帝國建設の基礎たるべき法の尊嚴や正義に關する教示を見出し、小スキピオは常に座右の友としてそれを携へてゐたとの事である。

二　イソクラテース

時歷及び著書　イソクラテース (Ἰσοκράτης, 436—338) は前四三六年頃アテーナイの富豪テオドーロスの子として生れた。教育に熱心な父に育てられて、修辭學者リュシアスや所謂ソフィステースたるゴルギアス、プロディコス等に學び、又ソークラテースにも就いた。ペロポンネーソス戰爭に於てその全財產を失ふや、彼は生計を立てるためにソフィステースの傳統を繼いで先づキオスに於て修辭學を敎授し、やがて前三九〇年頃アテーナイのリュケイオンに近き所に修辭學校を開いて一代の名聲を博した。但し彼は責任觀病にして身體も弱く音聲も低かつたので、自らは公衆の前で演說することなく、他人のために雄辯術を敎へ、又演說の草稿を書いた。傳ふる所によれば彼は百人の門弟を集め、一人から千ドラクメー(約四千圓)の報酬を取り、その上右の如く筆述の演說をも賣つて其大の富を得たとの事である。彼は又熱烈なる愛國者で、希臘諸國がアテーナイを中心とする同盟を以て獨立を擁護すべきことを熱望してゐたのであるが、カイローネイアの敗戰(前三三八年)によつてその望の空しくなるや、同年絕食自殺して憂憤の最期を遂げた。

彼の遺著の中特に有名なるは、公の祝祭に於て祖國や偉人を讃讃する演說たる『パネーギュリコス』であつて、そこでは祖國アテーナイの全希臘に對する優越と貢獻とを讃美し、スパルタよりもアテーナイこそ希臘の覇者たるべき資格のあることを力說してゐる。又『アレイオパギティコス』に於ては舊きアレオパゴス法廷の勢力の復活を慫慂し、更に『ピィリポス王への勸告』に於てはマケドニアのピィリポス王が希臘の完全なる融合の首長となつて波斯の勢力から希臘を解放すべきことを勸告してゐる。

教育事業　イソクラテースの修辭學校は一面に於ては從來のソピィステース等に對抗して、謙遜なる態度と眞面目なる國家的關心とを以て青年に公的生活への準備を與へ、他面にはプラトーンのアカデーメイアに對立して、世俗に緣遠き哲學的教養よりも世俗的有能者の養成を任とすることに誇りを抱いてゐた。この修辭學校は彼の歿後も長く勢力を保ち、單に希臘のみならず、東方諸國から、又後には羅馬から多くの門弟を吸收してゐた。そしてこの學校に倣へる修辭學校が希臘各地に設けられるに及んで、希臘が世界の師たる實は益々顯揚せられるに至つたのである。

第六節　アリストテレース

一　アリストテレースの生涯

家系及び幼時　アリストテレース（'Αριστοτέλης, 384—322）は第九九オリュムピアスの第一年目卽ち前三八四年に、マケドニアの希臘植民地なるカルキディケー半島の都市スタゲイロスに生れた。父ニコマコスは醫術の神アスクレーピオスの後

裔と傳へられ、マケドニア王アミュンタス二世の侍醫且つ親友で自然科學に關する數種の著述をなしたと傳へられてゐる。アリストテレースの心が早くより自然科學に傾き生涯その關心を棄てなかつたのは、この父からの感化によるものと思はれる。母ファイスティスに就いては殆んど何事も知られてゐないが、アリストテレースが遺言狀に母の像を作つて神に獻ずべきことを記してゐる所を見れば、母に對しても溫かな思慕を寄せてゐたことが推察せられる。然しながら彼は生後十餘年にして兩親に死別し親戚（又は友人）に當るプロクセノスに引取られて教育せられた。彼が「教育者は單なる生みの親よりも尊いものである。生みの親は生きることを與へるのであるが、教育者は立派に生きることを與へるのであるから」と言つてゐるのは（兩親の恩を輕んじたのではないが）プロクセノスへの厚き感謝を表せるものと解せられる。後に彼がプロクセノスの一子ニカノールを娶ひ實て娶子としたのも、この恩義に報ゆるためであつた。少年時代の彼は、その生地スタゲイロスが當時多分に保有してゐた希臘的傳統に從つて、文藝と體育との教養を受け、殊にホメーロスには深く親んだ樣である。『イリアス』篇に就いては後年彼自らも研究し、又アレクサンドロス大王の教育の教材にも使用したのであつた。

アカデーメイアに於ける修學　前三六七年にアテーナイに來てプラトーンのアカデーメイアに入り（時にプラトーンはシケリアから歸つたばかりであつた）二十年間をそこに過した。但しこの中最初の數年間はプラトーンが再度シケリアに赴いた留守であつたので、直接に師の敎に接したのは十數年間である。プラトーンは彼の卓越せる才能を推賞し、魯鈍なクセノクラテースと後敏な彼とを比較して、「前者は拍車を要し後者は手綱を要する」と言つた。又彼を呼んで「研究の精神」と言ひ彼の家をば「讀書人の家」と名づけた。そしてプラトーンはアリストテレースが出席する迄は「精神が缺けてゐる、聽衆は寥である」とて講義を始めなかつたとのことである。かくてプラトーンとアリストテレースとの關係は頗る溫かな曩りなきものであつた。兩者の不和軋轢―例へばアリストテレースがプラトーンへの尊敬感謝を缺いてゐたことなど―が傳へられてゐるのは、アリストテレースの反對者が爲にする中傷に過ぎない。やがてその學說上の相違對立が內に漸く明かになつてもアリストテレースはプラトーンの生前に於ては公然と師に背くことは敢てしなかつた。プラトーンのイデア論を棄てるに當つてアリ

ストテレースの宣言した次の壮な言葉も師の歿後に書された『ニコマケイア倫理學』からの引用である。曰く「エイドスを導入した人々（アカデーメイア學徒）が友達であるといふことの故にこの研究（アリストテレースの倫理學研究）は困難を生ずる。併し特にも吾々が哲學者である限りは、眞理を支持するために私事を放棄することが、より善き事であり又義務であると思はれる。といふのは兩者とも（友達も眞理も）大切なものであるが、眞理をより高く尊敬することが神聖なことであるから」と。アカデーメイアに於けるアリストテレースと學友との關係も亦顧る親密なものであつて、後年彼は一身上に就いても書學友の厚誼を受けて居り、又彼の倫理說中に於ける友情論は自らの體驗によつて裏書されてゐるものと思はれる。

小亞細亞遊歷　アテーナイ在留二十年間の後半期に於てアリストテレースは修辭學の教授をも行ひその方面の著作も物して公にし、その點に於てイソクラテースと對峙の地位を占めてゐたが、プラトーンの歿した年（前三四七年）に彼はアテナーイを去つた。蓋しプラトーンが自己の後繼者としてスペウシポス（プラトーンの妹の子）をアカデーメイアの學頭に任じたのを彼は不平に思つたからである。その後暫時（前三四七年—三四四年）の間小亞細亞のアタルネウス市に留まつた。そこには曾ての學友であり親友たるヘルミアスが領主として居り彼を招いたからである。然しヘルミアスが波斯人の奸計に陥れるやアリストテレースはその美女プティアスを引取り世話をして友人の恩義に報い、後にこれと結婚した。アタルネウスを去れる彼はレスボス島のミュティレーネ市に赴いた。これ等の小亞細亞遊歷時代に彼はかねてより研究しつつあつた生物學に就いて益々造詣を深めたものと思はれる。

アレクサンドロス大王の教育　ミュティレーネーに滯在中のアリストテレースは前三四二年頃、そこから、マケドニア王プリポス二世—アミュンタス二世の子—に招かれて、當時十三歲であつた王子アレクサンドロスの教育を托せられた。プィリポス王はアリストテレースにこの大任を托する報酬として彼を鄕里スタゲイロス市をば—貧て王が戰によつて破壞したのを—復興し、逃れたり賣られたりしてゐたその市民を召還した。又彼とアレクサンドロスとの爲に勉學消閑の場所としてニュムプアイオンといふギュムナシオンを設け與へた。アレクサンドロスは若干のマケドニア貴族の子弟と共

に教授を受けたのであるが、その教科内容は自然科學・言學・倫理學・政治學・形而上學等であつたと想はれる。アレクサンドロスは又多くの詩に就いても教へられ、特にアリストテレースの手寫（又は校訂）せる『イリアス』篇は常に愛誦し後年戰陣の間にもこれを携へ、眠る時は匕首と共にこれを枕の下に置いたと傳へられてゐる。哲人政治を說いたプラトーンはシラクサイ王ディオニュシオスをばつひに哲人たらしめ得なかつたが、アリストテレースは—假令政治家卽哲人の主要を說かず、唯政治家は哲人の言に聽くべきことを說いたに止まるとはいへ—事實上はアレクサンドロスを殆んど哲人政治家の理想に近き者にまで教育し得た。後年の大王が單なる武將・征服者としてでなく文化の保護傳播の功勞者として輝かしき足跡を遺したのは實にアリストテレースの薰陶の賜物と言はねばならない。

リュケイオンに於ける教育　アリストテレースがマケドニアに滯在したのは七年間であり、その間アレクサンドロスの教育に秩つたのは四年間であつたが、前三三五年大王卽位と共に彼はアテーナイに歸つた。時にアカデーメイアは彼の友人クセノクラテースが學頭となつてゐたので、彼は自らリュケイオンに學塾を開いた。それは市の東北郊外にあり、アポルローン・リュケイオスに獻げられたギュムナシオンであるが、それを彼がアテーナイ市から讓受けたのである。そこには周圍に綠樹の蔭深き「通路」があり、彼はそれを「逍遙しつつ」弟子に教授したとの傳說に結合してアリストテレ！ス學派を「逍遙學派」と稱するに至つた。（尤もこれは一種の綽名であつて、アリストテレースは必ずしも綠蔭を逍遙して教授したのではあるまいと推測せられてゐる。）

アリストテレースの講義は「午前の部」と「午後の部」とに分れてゐた。午前の部は所謂內弟子卽ち少數の選ばれた弟子のために行はれたもので「エソーテリコス」—內輪の講義の意—又は「アクロアテーリコス」—聽講者に對する講義の意—と呼ばれ、その內容は論理學・物理學・辯證法等であつた。午後の部は外弟子、卽ち雜多の弟子達のために行はれたもので「エクソーテリコス」—外部の者に對する講義の意—と呼ばれ、その內容は修辭學・詭辯術・政治學等であつた。彼はこの學塾に於て無報酬で數百人の學生を教へたのであるが、その教授法はソークラテ！スやプラトーンの對話法に對して「講述法」を主とし

たらしく思はれる。彼の著作の大部分はこの間の講義の草案であつたと推察せられる。

晩年の不遇　アリストテレースがリュケイオンを主宰したのは前三三五年より三二三年に至る十三年間であるが、この間アレクサンドロス大王は金錢及び標本を送るなどして舊師の研究を助けた。然しながら晩年に於てアリストテレースの身邊には不幸な運命が重なり生じた。第一に彼は妻を喪つて悲嘆に沈み、彼女の友人にして侍女たりしヘルピュリスと同棲し、ニコマコスといふ息子を擧げた。第二には彼の親戚にして弟子たるカルリステネースがアレクサンドロス大王に從つて遠征し、大王と不和になつたことから、延いてアリストテレースと大王との間にも親交が絶たれた。(但し彼が大王毒殺の陰謀に加擔したとの傳說は後世の附會に過ぎない。)前三二三年大王が歿してよりアテーナイにはマケドニアの拘束を脫せんとする運動が起り、マケドニアに好意を有する者はその身が危くなつた。三二二年アリストテレースもこの雰圍氣の犠牲となり、無神論者として告發せられたので、裁判に先立つて自らエウボイアのカルキスに遁れ、そこに心ならざる閑日月を送る間に、同年の夏かねてからの胃病が惡化して遂に歿した。時に六十二歳である。遺骸は故郷のスタゲイロス市に運ばれ、そこで英雄の如くに尊崇せられ、年々の祭事が行はれた。

二　アリストテレースの教育思想

アリストテレース教育思想の取扱方　アリストテレースの教育思想は主として彼の『政治學』第八卷に述べられてゐるが、その內容はプラトーンの教育思想を出づること少く、否寧ろ更に貧弱であり、且つそれはプラトーンに於けるが如く哲學的基礎づけや神話的解明と直接に結合して居らない。蓋しプラトーンに取つて教育思想と相卽不離であつた形而上學的思想はアリストテレースにあつては獨立せる學としての形而上學に整頓せられ、又ソークラテース・プラトーン的教育方法はアリストテレースによつて論理學の體系に組織せられた如く、各々の思想領域がそ

れぞれ獨立して學的部門に分れ去つたために、教育論として殘された固有の部分が比較的貧弱となり且つ無味乾燥に陷つたのである。從つて又後世の教育思想に及ぼしたアリストテレースの影響も、彼の教育思想そのものから來てゐるものは少くて、寧ろ彼の形而上學や論理學や心理學や倫理學等から來てゐるものが多い。かかる事態を考へるとき、吾々は翻つてアリストテレースの廣汎な學的業績の各部門を檢討し、そこに教育的に重要な契機を取出してこれを彼の教育論固有の叙述に結合しなければならない。

アリストテレース形而上學の教育的意義　周く知られてゐる通り、アリストテレース形而上學の根本的特質は、普遍的本質をば個別的現象の中に顯現せるものとなし、而もこの事は「形相」と「質料」との結合によつて成ると考へる點に存する。質料は事物の本質を「可能態に於て」具へ、それに形相が作用することによつて事物の本質は「現實態に」現はれる。あらゆる生成現象は質料が形相を得て事物の本性を實現しつゝある過程である。かくして各々の事物に內具する本性—各々の事物が實現すべき究極目的—の實現された狀態が、「圓極」又は「圓現」と呼ばれる。アリストテレースはこの事を有機體の發展及び藝術家の造形美術活動を以て例證してゐる。この例證が、屢々教育作用の本質を說明する際の類推に用ひられる程それ程アリストテレースの上述の思想は教育的解釋への暗示を含んでゐる。卽ち質料はやがて教育の可能性として人間自然の素質であり、形相はかかる素質が志向すべき人間生活の理念である。各人の素質をば理念によつて形成し、その本性を發揮せしめて圓現卽ち各人の完全なる個性にまで到らしめる所に陶冶の本質は存すると解せられる。而もこの場合に形相はそれに向つて質料が形成せらるべき目的因でありながら質料の側にも亦必ずしも形相のままに形成せられざる偶然的反形相的なる機械因があつて、この兩者の對立緊張の關係に事物の現實が把握せられてゐるアリストテレースの見解は、そのまま教育に於て、自然的素質と價値的理念との緊張關係に陶冶の本質を求める立場に適用せられる。かくの如く素質を所謂質料因とし理念を所謂形相因として、この兩契機の辨證的關係に陶冶の本質を求めることによつて、アリストテレースの形而上學

は永遠の教育的意義を得るであらう。

アリストテレース心理學の教育的意義　上述の如き形而上學的見地は心理學的展開をなすことによつて益々具體的なる教育的意義を現はして來る。アリストテレースによれば、先づ人間の心身關係に於て身體は精神によつて形成せられ統制せられ運動させられる所の質料であり、精神は身體がそれに向つて動き、それを實現すべき形相であり圓極である。

更に精神の中では、同化作用や繁殖作用を司る所の植物的精神と、自己運動及び感覺を表徴とする動物的精神とは人間に特有の理性に對して質料であり、理性はそれ等に對して形相である。吾々はここにアリストテレースの『心理學』の內容の詳細な論究に立入る迄も必要もないのであるが、唯希臘的心理觀一般の特質を背景として、而もアリストテレースの獨自の見解を示せるものとして、次の諸點を注意しなければならぬ。第一は知情意の三機能の關係であり、第二は知覺に於ける意識の統一性であり、第三は理性の理論的・實踐的並びに創作的三樣相である。第一にアリストテレースによれば動物の身體の合目的活動は「欲望」より起るのであるが、この欲望は快・不快の感情より、快なるものを追求し不快なるものを忌避せんとする形に於て發生する。更にこの快・不快の感情はその對象の表象並びにその對象が或は追求すべきものであり或は忌避すべきものであるといふ事の表象を前提とする。かく表象が感情の前提となり、感情が意欲の生源となると考へる點に於て希臘心理學一般の主知主義的特色を現はしてゐるのであるが、アリストテレースはこの關係を特に强く把持し、それを判斷や推論の論理的機能に富狀めて表現してゐる。卽ち彼によれば、意欲の領域—實踐の領域—に於て、追求し忌避することは、それの前提たる表象の領域—思惟の領域—に於て肯定し否定することと推理することとは同一である。」「思惟に於ける肯定と否定とが、意欲に於ける追求と忌避とである。」第二に動物的表象生活の中心は感覺的知覺であるが、併しアリストテレースはこの場合に個々の感官に與へられる知覺を全體的知覺にまで結合し同時に數や位置や運動等を把握する作用として意識の統一性を重視し、これを司る器官として「共通感官」を想定した。知覺が表象として保持されたり、それが「無意的想起」又は「有意的想起」として再現せられることも、又自己の狀態を知る所の內部知覺も、彼に

よればこの共通感官の司る所である。この場合に吾々の解釋上注目すべきことは、彼が意識のかかる統一作用を呼ぶのに「中庸」といふ名を以てせることである。この意味に於ける「中庸」は實踐の領域に於て欲望を理性が統一する作用に解釋せらるべきであると吾々は信ずる。これを明かにするためには併し理性の作用に關するアリストテレースの所說を聽かねばならぬ。卽ち第三に理性はアリストテレースによれば、人間に特有の能力であり、それは、上述の如き知覺表象や欲望・衝動を質料としてそれ等に働きかける形相である。まさしくそれ故に形相としての理性は質料としての表象や衝動の外にあるのではなく、それ等に於てのみ現實に存在する。アリストテレースはこの關係を明かにするために、理性をば「能動的理性」と呼び、感覺や欲望をば「受動的理性」と名づけてゐる。「受動的理性」とは卽ち個々の人間の身體の狀態に制約せられて生ずるものであつて所謂パトスであり、それは能動的理性に發動の機緣を供する。能動的理性はパトスに對するロゴスであつて、受動的理性としての感覺や欲望に働きかけ、それ等を統一し加工し形成する。かくの如き統一形成の作用としての理性は、更にアリストテレースによれば、「理論的理性」と「實踐的理性」とに分れ、なほ第三に「創作」の作用ともなる。この理性の三樣相はやがてアリストテレースに於ける學の三部門—理論哲學・實踐哲學・藝術哲學—の分類原理であるが、それはまた生活の三形式をも生ずるわけである。理論的理性は端的に眞理のために眞理を觀る作用であつて、アリストテレースはこの作用を「觀照」と名づけ、それによつて最高の眞理に與り永遠の淨福を得る所の「觀照的生活」をば人生の最高の生活形式であるとした。次に實踐的理性は後述の如く欲望を支配して道德生活を實現せしめるものであるが、アリストテレースはかくして生ずべき廣義の道德生活—實踐生活—を更に名譽・權勢を目ざして政治上に活躍する所の「政治的生活」と、物質的財貨の獲得享樂に向ふ所の「享樂的生活」とに分けてゐる樣である。かくしてプラトーンが哲人階級と國防階級と生產階級とに分類した生活形式は、アリストテレースに於ては觀照的・政治的・享樂的の三形式として繼承せられた。但しプラトーンに於ける哲人の生活はイデアの觀照と同時に國家の支配を使命としたのであるが、アリストテレースにあつては觀照生活がそれ自體獨立して最高位を與へられたのである。但し既に述べた如く意欲に於ける追求・忌避が認識に於ける肯

定・否定を瞑想するといふ主知主義的見解によれば、實踐的生活は觀照的生活を前提としてゐる。唯觀照が實踐から獨立して自己目的となつた場合をアリストテレースは最高生活としたのである。觀照的生活と實踐的生活とに對立して第三の創作的生活は自然や人生の事實を種々の表現手段を通して模倣する所の藝術生活であつて、その模倣の對象と手段とに應じて種々に小分せられるのであるが、併しそれ等は何れも倫理的目的を有する點に於て實踐的生活に關係し、また一種の眞理認識である點に於て觀照的生活に關係する。卽ち藝術が刺戟し喚起する情緒特にも悲劇に於ける恐怖や同情は、それによつて精神の「浮化」を行はんがためであり、また藝術はそれが描寫する個別的事象に於て一般的本質を明かにするもの、卽ち個別的事象に實現せる一般的本質をその對象とするものであつて、そこに學問と同樣の使命を有し、且つ認識に伴ふ快樂がそこにも生ずるのである。創作的活動はかくの如く實踐的並びに理論的活動と特殊の關係を有しながら、而もそれ等の何れにも從屬せざる第三の領域を占めてゐるといふのがアリストテレースの見解である。何れにせよ、統制原理としての能動的理性は、人間の自然的機構に制約されたる受動的理性に働きかけるのであつて、それによつて、感覺より來れる表象は認識となり、動物的なる衝動は人間的なる意志となる。かくして要するにアリストテレースの心理說によれば人間が質料を形相によつて統制することは畢竟人間に於ける動植物的なる感覺や欲望を人間特有の理性によつて統制することであり、ここに形而上學的原理は心理學的內容を與へられ、その敎育的意義は一層具體的に啻示せられるのである。この事は併し直ちにアリストテレース倫理學の基礎であり、それを介して敎育固有の論究は始まる。

アリストテレースの倫理說と敎育　アリストテレースに於ても亦希臘人一般の見解と同じく、人生の究極目的は善に存し、善とは卽ち幸福に外ならず、そして「幸福であること」はやがて「善く生き善く爲すこと」である。然しあらゆる生物はそれに固有なる本性・活動の發展によつて幸福になるものであり、人間に固有なるものは前述の如く理性であるが故に、人間の善は結局「理性に從へる魂の活動」に存する。換言すれば理性が行動の正しき原理を洞察し、それによつて欲望を統制するのが人間の善である。然しこの場合にアリストテレースは理性的知見に基ける意志をば、ソクラテースに於けるが如く直

ちに行動化する程に强きものと考へず、却て欲望の强さがこれを妨げ易き事實に着眼して、理性的活動は反復修練して習慣化する必要があると考へた。德とは實にこの理性的活動の「習慣」に外ならぬが故に、人間の善はまた「德に從へる魂の活動」である。而もかかる德は本來人間の自然的素質に可能態として存し、理性の働きによつて實現するものであり、その結果として快樂を將來するものである。かくの如く理性が欲望を統制することによつて成立する德をばアリストテレースはまた中庸の語を以て指示し、「あらゆるものに於て中庸が賞讃せらるべきである」としてゐる。「中庸」はさきに知覺を統一する原理として指摘せられたのであるが、ここでは欲望を統一する原理となつてゐる。アリストテレースはこの實踐的原理としての中庸をば兩極端に對して特色づけ、例へば勇氣の德は暴勇と臆怯との中間に成立すると說いてゐるが、併し吾々はこれを勉強も本來の統一原理として解釋し、德をば欲望の矛盾を辨證的に止揚統一する所に成立するものと見る。暴勇も臆怯も何等かの欲望の發動が何れかの方向に偏することによつて他の欲望と矛盾衝突する場合に生ずるものであり、この一方的偏局を是正して對立的欲望をば、人の本性の發揮のために止揚統一することこそ勇氣に外ならぬであらう。かく解釋するときは、さきに質料と形相との—自然的素質と價値的理念との—辨證的關係として把握された陶冶の本質は、ここでは矛盾する質料の辨證的統一として理解せられる。何れにせよ、實踐的理性が自然的素質・動物的意欲としての衝動を統制する所に善が存し、この統一を習慣化する所に德は成立するのであるが、かかる倫理說はそのまま敎育論に結合し、ここでは上述の趣旨が形を變へて次の如くに述べられてゐる。卽ちアリストテレースによれば人をして有德ならしめる要件が三つある。第一は「自然」であつてそれは心身兩面に人間的天性（素質）を與へ、第二は「習慣」であつて、それは天性を修練して「習性」（品性）たらしめ、第三は「理性」であつて、それは善を認識し至當の指導原理を得しめる。生物の大部分は天性のままに生活し、若干は習性をも有するが、理性は人間特有の能力であるが故に、人間としての善卽ち幸福は、前述の如く理性が天性を指導して習性を形成するにある。而して敎育の關する所は習性と理性とであつて、示敎によつて理性に正しき識見を得しめ、練習によつて善き習性を養ふのがその主眼である。ソークラテースの助產術に於ては、素質と敎導と長期間の切

種塚説とが要件とせられてゐるのであるが、アリストテレースに於ては上來の叙述が示す如く、形而上學的・心理學的所説を背景とし、倫理學的見解に即して、これ等教育の主要契機が整頓されてゐるのを見るのである。因にアリストテレースはこの場合習性の陶冶に善への共通の追求者としての交友の重要性を認め、友情は人生の要求であるのみならず、望ましき理想であり、善き人々の交際は一切の善の源泉であることを力説してゐる。これは古來の希臘社會の風習やソークラテース・プラトーン教育思想の基調たりしエロースの價値を認めてそれを繼承せるものであるのみならず、既述の如く、アリストテレース自らがアカデーメイアの學友との間に體驗せる温かき友情を反映せるものと思はれる。但し彼が先輩と後輩との同性愛の識き方面を警戒して、これを不自然な病的な狀態であると非難したのを見れば、當時愈々世上一般の風紀が紊亂して純精神的なるエロースの行はれざるに至つた世相を想察することが出來る。

アリストテレースの國家論と教育　アリストテレースによれば人は「本性上國家的生物」であり、翻つて國家の幸福はその成員の幸福によつてのみ得られるが故に、國民の教育は國家の學たる「政治學」の規定すべき所であり「少青年の教育が立法家の最大の關心事であるべきことは何人と雖も異議はない筈である。」玆でもプラトーンに於けると同様に、國家の任務をば國民の教育に置き國家と教育とを不離の關係に考へる古典的希臘思想が現れてゐる。但しアリストテレースによれば、各人の德が各々の自然的素質の上に形成せらるべきである様に、國家も亦各々の歴史的事情に即して國家の使命を果さねばならぬ。從つて政體もプラトーンに於ける如く端的に理想的政體と反理想的政體とに區別せらるべきではなく、支配者の數から見て同一の外形を具へてゐても、それが公共の幸福を目ざすか否かによつて善き政體とも惡き政體ともなる。例へば一人の支配は善き王制とも惡き暴君制ともなり、少數者の支配は善き貴族政體とも惡き寡頭政體ともなり、全國民の支配は善く秩序づけられたる共和政

治ともなり、惡き愚民政體ともなる。而してアリストレースは國民の特性がそれぞれ獨自の國家形態を維持し、それに適應せる教育を國民に課することを述べてゐるが、併し同一の國家にあつてはその全國民が同一の目標に向つてゐるが故に、全國民が「同一の教育」を受くべきことを說き、統一的國民教育の原則を明示してゐる。そしてこの原則の根柢には、國民各自が「自己を自己のものと考へずに全く國家のものと考へねばならぬ」といふ國家主義が高調されてゐる。この點に關する限り、彼はスパルタ教育を讃美する人を至當と認めてゐる。但しその教育の內容に就いては次の如き所說を加へてゐるのである。

一般陶冶と職業陶冶　アリストテレースによれば生活には「多忙（ἀσχολία）のためのものと「閑暇」（σχολή）のためのものとがある。前者はまた戰のため後者は平和のためであり、更に前者は「必須有用のもの」をも目ざし後者は「美しきもの」を目ざす。換言すれば前者は自己一身の生計や國家の存立を保つための經濟的並びに軍事的生活であり、後者は平和と閑暇とを學問や藝術に送る生活である。前者は謂はば奴隷的生活であつて、後者は自由人の生活である。而してアリストテレースによれば戰は平和のためであり、多忙は閑暇のためである。故に彼は自由人としての教養をより高く評價し經濟や軍事はそのための地盤手段と考へたのである。スパルタの教育はこの點に於ては彼によつて非難せられてゐる。所謂自由教育の本來の意義は生活の多忙を離れて閑暇を美しく過すための教育に存する。而して後世に所謂職業陶冶と一般陶冶とに關する思想は實にアリストテレースのこの思想に淵源するのである。

アリストテレースは上述の生活の二方面をば德目や教科目を論ずる際にもその背景たらしめてゐる。卽ち彼に

よれば勇氣と忍耐は多忙・戰のために、學問は閑暇・平和のために、節制と正義とは兩方のためにではあるが、特に閑暇・平和のために必要である。教科目に就いても、例へば讀書は生活の必要を充すと共に他の教養を得る基礎となり、圖畫は實用の外に美感を養ふものであり、體育は勇氣の涵養を目ざし、音樂は「單に多忙を正しく過すのみならず、閑暇を美しく送るため」に課せられるものとした。

教育の段階　アリストテレースも亦プラトーン思想の基調に立つて、隨年教法的教育段階論を企てた。そして先づ出生前の優生學的考察から出發し、結婚の統制に就いて論じてゐる。それによれば夫妻の年齢はその生殖力の齟齬のない樣に又親子の年齢が餘りに隔たり過ぎたり接近し過ぎたりせぬ樣に注意せねばならぬ。そのためには男子は三十七歳より女子は十八歳より結婚を許し、男子五十歳位を生殖に最もよき時期とし、而して男子七十歳女子四十歳を生殖能力の限度としてゐる。兩親の身體は競技者の如く不自然に强きこと及び餘りに弱きことを共に非とし、中庸を可としてゐる。次に姙娠中の母親は身體に榮養と適度の運動を、精神に休息安靜を必要とする。不具の子供はこれを棄て、又法定數―國家の人口の制限より來る出產の限度―を超えたる產兒は成育せぬ中に處分せねばならぬ。初生兒は乳を以て育てるのが最もよく、酒類は禁すべきである。五歳までは格式ばつた學習や過激な作業を課することなく、但し運動は自由に行はせ、遊戲は下品なもの、骨の折れるもの、放縱のものを避けさせねばならぬ。物語に就いては兒童監督官の選定によるのがよい。七歳までは奴隷に交ることを禁じ親の許で教育すべく、凡て醜惡なる話や繪畫や演劇等に接せしめてはならぬ。七歳から十歳までは音樂や學問のみを教授し、十歳以後二十一歳至るまではその外に嚴重な體育と一定の食事とによつて教育して、性的惑亂を防ぎ又戰

爭その他の身體的勞苦に慣れしめる。この間の教育が國家的見地から統一的に行はるべきこと、又その各德目・各教科が生活必須の見地と自由教育の見地とより教へらるべきこと等に就いては既述の如くである。

アリストテレースの史的地位　プラトーンに結合しながら而もプラトーンとの對比に於て希臘思想史上に立場を占めたるアリストテレースは、後世に於て呼出される場合にも亦プラトーンとの關聯に於て、而も多くはプラトーンと異なる特色の故に呼出された。彼の創始せる逍遙學派の傳統は後に述べるけれども、アカデーメイアに次いで長き勢力を保ちながら、師祖の餘りに廣汎偉大なる業績の故に後繼者は概してそれを整理し校訂し保存することを主たる任務とせざるを得なかつた。中世期に於てはプラトーン哲學を採用せるアンセルムスがスコラ哲學の發生を促せるに對して、アリストテレース哲學はトーマス・アクイナスに採用せられてスコラ哲學の最盛期を將來した。これより先アリストテレースの著作はアラビアの學者―特に東方に於けるアヴィツェンナと西方に於けるアヴェロエス―によつて研究せられ、それが猶太人の手を經て西歐に傳へられた。而も當初は異端として斥けられ、『物理學』は一二一〇年に、『形而上學』は一二一五年に教會によつて禁書とせられた。然しやがて自然的眞理と宗教的眞理との分離を防止して兩者を結合することがスコラ哲學に取つて必要とせられるや、アリストテレースはまさにその用に立つものとして歡迎せられるに至つた。その新動向を導いてアリストテレースを基督教神學の基礎づけに採用したのが前述のトーマス・アクイナスである。スコラ哲學はやがて間もなく衰微したが中世の大學がまたアリストテレースの論理學及び其他の諸部門の研究を次第に重視するに至つた。文藝復興運動及び宗教改革運動は、その初期に於てはスコラ哲學と共にアリストテレース哲學をも排斥したが、やがて希臘の諸學藝が基礎的

教養として要求せられるに及んで、アリストテレースも復活させられ、特にメランヒトンはアリストテレースの學の偉大なる包括力を讃歎し、その研究を力説した。最近の哲學―殊に所謂獨墺學派―がマールブルヒ學派や西南學派のプラトーン主義に對立してアリストテレースに、より多く依據することにより新生面を開拓しつつあるのは周知の事實である。教育界に於ても亦ナトルプのプラトーン主義に對して例へばヴィルマンの如き有爲の教育學者がアリストテレース教育思想の意義の闡明に努力し、自らの學說上にも少からざる影響を受けてゐる。

第四章　新希臘時代第二期（世界主義時代）の教育

第一節　希臘文化の世界化

世界主義時代　上の二章に述べた前後二期は舊希臘より新希臘への推移を含むとはいへ、何れも希臘文化が未だ世界的傳播と混化とに於てではなく、それ自らの地盤―希臘本土と希臘植民地―に於て、典型的に榮えた時期である。吾々がこの二期を併せて廣く古典時代と名づけたのはこの故である。然るにペロポンネーソス戰爭（前四三一年―四〇四年）はアテーナイの覇權を失はしめ、コリントス戰爭（前三九五年―三八七年）はコリントスを衰微せしめ、テーバイ戰爭（前三七九年―三六二年）はスパルタを敗退せしめ、つひにマケドニアの英主ピリポス二世がアテーナイとテーバイの聯合軍をカイロ―ネイアの一戰（前三三八年）に破つて以來希臘民族の政治的獨立は失はれ、次いでアレクサンドロス大王の偉業を通じて彼等とその全文化とは本來の鄕土を離れて、地中海を中心とする當時の主要世界に限なく傳播した。今や希臘民族は特定の都市國家の市民（πολίτης）たることを失つて世界市民（κοσμοπολίτης）となり、而も世界を希臘化（ἑλλενίσειν）することによつて世界の師となつた。吾々はそれ故にさきにも解明した如く、この希臘教育史最後の一期間をば、世界市民時代の意味に於て世界主義時代（Cosmopolitan Period）と名づけ、又史家ドロイゼンに從ひ、世界の希臘化時代の意味に於て希臘主義時代（Der Hellenistische Zeitalter）とも呼ぶ。

希臘文化の世界的傳播　ホメロース詩篇への親熱によつて高貴豊饒な想念を養はれ、アリストテレースの直接指導によつて包括的な學的研究への興味と理解とを與へられたアレクサンドロス大王は、名實共に拔群の英主であつた。故に大王の遠征（前三三四年―三二三年）は單に軍隊の遠征、政治的勢力の勝利ではなくて、學藝の遠征であり、希臘文化の世界征服であつた。すぐれた歴史家や地理學者や天文學者や藝術家や哲學者達が大王に伴はれて行つた。かくして力と感激と知性とに充てる王師の進む所、波斯・埃及等の老大國は破壞せられて新文化建設の地盤となり、狹き鄕土に盛りを過ぎたる希臘文化は新鮮なる廣野に移植せられた。「希臘民族（ヘルレーネス）」と「異民族（バルバロス）」との舊き障壁は撤去せられて「共通の言葉」（κοινή）を語る「世界市民（コスモポリテース）」が萬里の山河を越えて握手した。吾々はこの大規模なる文化運動をば先づその主要なる中心地によつて把握し、同時にそれ等の教育的意義を考察しようと思ふ。

第二節　文化の中心地とその教育的職能

アテーナイの諸學派　世界主義時代文化の中心地として先づ顧みらるべきは、舊き傳統を誇るアテーナイである。そこにはイソクラテースの傳統を承けたる修辭學校と、プラトーンを祖述せるアカデーメイア學派とアリストテレースを襲承せる逍遙學派とが共に世界の學府たる權威を有し、各地から優秀の徒を集めて講筵を賑はせてゐた。そこに又新しくストア及びエピクーロスの兩學派が起り、舊學派に對抗して新說を唱道し、つひに世界主義時代の思想界を代表するに至つた。これ等の中イソクラテースの修辭學校に就いては既に述べたから玆には他の諸學派に就

いて略述しよう。

アカデーメイア學派　アカデーメイアは、その神域とギュムナシオンとを繼續的不動產とし、曾ては反對せる報酬受領制度の採用によつて動產を獲得し、學頭を中心に研究結社を成せる學徒を生ける力として、數百年間の命脈を保つた。（學頭の傳統は、勿論その間に斷續はあるが、他の如何なる學派よりも明確に傳へられ、紀元後五二九年ユスティニアーヌス皇帝の命によるアカデーメイア解散の時まで續いてゐる。）但しその間にも學的傾向に變遷があり、通常三期に小分せられる。第一期は所謂「古アカデミー」であつて、プラトーンの甥スペウシポス、弟子クセノクラテース、それからポレモーン、クラントール（前二世紀）の時代である。第二期は所謂「中期アカデミー」であつて、その中が更に初期のアルケシラオス派と後期のカルネアデース（前一五五年羅馬に在り）の派とに分れ、大體に於て懷疑主義の思想が支配した。第三期は所謂「新アカデミー」であつて、ラリサのフィローン（前八七年羅馬に在り）やアスカロンのアンティオコス（前七八年キケロがアテーナイでこの人に師事した）がこれを代表し、主として折衷主義の傾向を取つた。この新アカデミー派の末なるトラシュロス（羅馬ティベリウス帝治下の人）はプラトーンの著作を整理し、三十六篇を四篇づつ九卷に分けたが、この分類は今日に至るまで襲用せられてゐる。

逍遙學派　リュケイオンの所謂逍遙學派もアカデーメイアと同樣の物質的保證と人事的制度とによつて長き學統を保つてゐたが、中でも主なる代表者は次の諸學者である。チオプラストスはレスボス島のエレボス出身で動植物學の造詣深く、又その著『性格論』は性格學的研究の古典として注目すべき名著である。彼が學頭たりし時リュケイオンは二千人の學生を有してゐたと傳へられてゐる。エウデーモスはロドス島出身でアリストテレースの弟子中最も傑出し、數學・星學の研究に功あり、又アリストテレースの倫理學講義を出版したものとして有名な『エウデミア倫理學』がある。アリストクセノスはタレンツム出身で音樂に關する歴史的並びに理論的研究に名高い。ディカイアルコスはシケリア島のメッサナ出身で有名な博學者であり、その著『希臘の生活』は希臘の地理・歴史・道德・宗敎等を內容とする文化史的述作である。ストラトーンは小亞

綱亞のラムプサコス出身で自然研究の該博さに於て逍遙學派中第一であり、「自然研究者」の異名を以て呼ばれた。尙この派の末なるアンドロニコスはロドス島出身で羅馬に住み、アリストテレースの著作を整理し出版したことで有名である。これより以後逍遙學派は註釋の著作の校訂・註釋・拔萃・解釋等を主なる任務として保守的機能を守るに至つた。

ストア學派　ストア學派の開祖はキティオン（キュプロス島に在り）のゼェーノーンである。彼は前三三六年頃に、富める商人の子として生れたが、難船して財を失ひ、前三一四年頃アテーナイに來て哲學を諸學者（キュニク派のクラテース、メガラ派のスティルポーン、アカデーメイア派のポレモーン等）に學び、前三〇八年にアテーナイ市内の或る「彩色せられた柱廊」に於て講筵を開き、所謂「ストア學派」の祖となつた。彼の眞摯嚴肅なる性格、簡素なる生活、寡欲親切なる行狀は一代の尊敬を博し、多數の門下を集めた。彼は前二六四年に自殺したが、學統は弟子クレアンテース（トロアスのアッス出身）に傳へられ、更にその弟子クリュシポス（キリキアのソロイ出身）に傳へられ、この人によつてストア學派の思想は整備せられて永く傳へられた。これ等にキオス出身のアリストーン、バビロニアのディオゲネース等が加はつて「古ストア」を形成し主として後述の如き倫理問題に研究を集中した。第二期は所謂「混合思想」の特色を現はし、その代表者パナイティオスはロドス出身で、初めペルガモンに於てクラテースの敎を受け、次でアテーナイに出て上記バビロニアのディオゲネースの門弟となり、又アカデーメイア中期の懷疑思想にも強く影響せられた。後に羅馬に行つて知名の政治家と交り、それによつてストア學說は羅馬に移入せられた。同じく第二期ストア學派の代表者ポセイドーニオスはシリアのアパメア出身でアテーナイに學んだ後諸地方を遍歷し、ロドス島に居を構へてそこにストア學派を榮えしめた。古代第一の博學者で特に地理・歷史の研究に偉績を遺げた人である。キケロもロドスに旅行せる時彼に敎を受けた。第三期ストア學派は宗敎的傾向を帶びて行つた。

エピクーロス學派　エピクーロス學派の開祖エピクーロスは、前三四一年頃アッティケー州に生れたが幼にしてサモス島に伴はれ、ために通常サモス出身者とせられてゐる。十八歳の頃アテーナイに出てアカデーメイアにクセノクラテースの敎を受け、

又デーモクリトスやピュルローンの學說をも學んだ樣である。後ミュティレーネー及びラムプサコスで哲學の講筵を開いたが、前三〇六年に再びアテーナイに來て、有名な庭園―所謂「エピクーロスの庭」―を買受け、そこに學園を開いて死（前二七〇年）に至るまで靜かな研究敎授生活を送つた。彼は洗練された趣味と明朗な社交性とを有する典型的都人士であり、後述の如き上品な快樂主義思想を體現した人である。エピクーロス學派の代表者中主なる者は、ラムプサコス出身のメートロドロス、シドン出身のゼェーノーン、ガダラ（パレスティナに在り）出身のディロディモス等である、

アテーナイの大學　アテーナイには上述の如き諸學派が或は傳統に據り或は新興の意氣を以て、競ひ榮えたのであるが、これ等（特に哲學の四學派）を併せてアテーナイの大學と呼ばれる。これ等の學校に於ては、學頭は初め先任者の指名によつて定められたが、やがて學生又は敎職員（中の評議員ともいふべきもの）によつて選擧せられることとなり、更に羅馬時代に入つては、地方官若しくは皇帝が任命することとなつた。學頭の外に下級の敎師や助手があつて、正科を敎授したり、或は豫備的課程を擔任したりした。學生は「エプェーボス」といふ組合を作つて寄宿舍に住み、そこから學校に通ふのを常としてゐた。前二〇〇年頃戰亂によつて學園が破壞せられてから、學徒は市内のギュムナシオンや劇場に集まつて研學を續けた。

羅馬皇帝ウェスパシアヌス以來アテーナイの大學も國庫の支出を受けることとなり、ハドリアヌス帝やアントニウス帝も熱心にこれを支持したため、學運大いに榮え當時の羅馬人士の敎養の中心地となつた。敎授の方法や學生の生活等に於て中世の大學のそれと（事實上の連續はなかつたけれども）軌を一にするものが多かつた。然し東羅馬帝國のユスティニアヌス皇帝が、アテーナイの大學をば基督敎に反對することの故に閉鎖を命じた（五二九年）時を以て、この長き學的傳統は中絕したのである。（近世に於けるアカデーメイアの再興に就いては後に述べるで

あらう?)

アレクサンドレイアの學府　世界主義時代文化の中心地として、アテーナイにも優つて著名なるはアレクサンドレイアである。そこではプトレマイオス王家が前三三二年より前三〇年に至るまで支配し、アレクサンドロス大王の遺志を繼いで、この首都を世界文化の中心たらしめるために盡瘁した。第一代プトレマイオス・ソーテールは大王に從つて遠征し又大王歿後の紛亂を鎭めて、埃及に君臨したのであるが、その晩年は內治に專心し文敎の興隆に盡力した。第二代プトレマイオス・ピィラデルプォスはその長き平和の治政に於て文化の保護勸奬に主力を盡し、有名な研究施設を創建した。それは古くより存した埃及の施設に倣つたもので、一個の學園（μουσεῖον）と二個の圖書館（βιβλιοθήκαι）とから成る。學園は學藝の神ムーサの社殿の周圍に建てた研究室の一群で、そこに各方面の學者が公の給費を受けて研究に從事し、相互の切磋に資したのである。この學園に直接附屬してプリュケイオン圖書館があり、更に都市の一隅にセラペイオン圖書館があつて、この內外兩圖書館に希臘を始め埃及・猶太等の諸文獻が蒐集せられた。第三代プトレマイオス・エウエルゲテースはアリストテレース著作の寫本及び猶太・埃及その他東方諸國の文獻の蒐集に功があり、第四代プトレマイオス・ピィロパトールは希臘の遍歷學者をしてアレクサンドレイアを訪れたる場合には必ずその所藏文獻の寫本をそこの圖書館に遺さしめた。かくして紀元後三世紀頃に於ける藏書數は兩圖書館を合して約五十三萬二千八百卷に達したとのことである。

アレクサンドレイア學府に於て發展し若しくは新興した學術の主なるものは、第一に所謂プトレマイオス天文學であり、それによつて地球の周圍及び直徑、太陽及び月の距離、春分秋分等が知られ、近世コペルニクスの出現ま

で長く天文學上の通說を成して來た。この學說の唱道建設に最も功績のあつたのはニカイア出身のヒパルコスである。第二に文法・文獻學の發展も注目すべく、原典批判や註解が大いに行はれ、この方面の代表者として、エラトステネース（キュレネー出身）、アリストファネース（ビザンティオン出身）、アリスタルコス（サモトラキア出身）等の名が目立つてゐる。第三に數學及び自然科學の發達が顯著であつて、幾何學のエウクレイデース（出身地不明）、物理學のアルキメーデース（シュラクーサイ出身）、醫學のヘロピィロス（カルケドーン出身）、エラシストラトス（ケオス島出身）、ガレーノス（ペルガモン出身）等の名がこれを物語つてゐる。

アレクサンドレイアはかくの如く殷盛なる文運を以て當代に輝き、つひに文化史上の所謂「アレクサンドリア時代」の名は、他の諸中心地をも含めて廣く世界主義時代一般を指すに至つた。而もこの學都は基督敎興起後には希臘思想と猶太敎及び基督敎との結合の場所となり、紀元後六四〇年に回敎徒の侵入によつて壞滅するまで約千年の長きに亙つて世界文化の一大中心地となつてゐたのである。

ペルガモン其他の中心地　アレクサンドレイアに對して小亞細亞のペルガモンも亦學藝の中心地であつた。ここでも國王アタロス一世及びエウメネース二世が、プトレマイオス王家との競爭意識から國都ペルガモンに圖書館を設け、二十萬卷の文獻を藏して學藝を奬勵した。ここではアテーナイに比較的近接してゐることから、修辭學及び美術批評が發達した。右の外更にシリアのアンティオケイア、キキリアのタルソス、エーゲ海中のロドス、マケドニアのペ°ラ等もそれぞれ國王の保護によつて文化の淵叢となつたのである。

第三節　思想界の大勢とその教育的意義

世界主義時代の思想界　周く知られてゐる通りこの時代の思想界を代表するものは、既述のストア學派及びエピクーロス學派に懐疑派を加へた三學派である。これ等は希臘哲學史上に所謂「倫理時代」を形成し、その共通の目標は、國家の興亡・民族の變轉の渦中に不安と焦燥とを抱ける彼等が人生の幸福を探求し安立の境地に住することに存した。而もその到達し得た歸結が夫に述べる如く、亡び行く希臘の運命をよく反映せる所に時代の共通特色を示してゐる。吾々はこの特色に注意しながら彼等の思想中特に教育的見地より重要と思はれる契機のみを略述したいと思ふ。

ストア學派の思想　ストア學派は當初の間はキュニク學派の立場に結合して、專ら外面的幸福に對する無關心、有德なる賢者の「自己滿足」を道德原理としたけれども、やがてアリストテレースの心理說に依據して、而もより强く個人精神に於ける理性の統一性と獨立性とを主張し、ここに理性による情欲の否定卽ち「無情欲」の倫理を樹立するに至つた。ストア學派に取つては精神の「指導力」は理性であつて、それは單に個々の感覺刺戟を知覺に統一する機能だけでなく、感情の興奮に「同意」を與へてこれを意志活動に變化せしめる機能をも有する。この場合に感情の興奮が餘りに强くて理性の同意を强制した狀態、換言すれば精神が外界刺戟に動かされ受動的地位に立つて生じた所の狀態が「情欲」であつて、それは病的な反自然的、反理性的な「心のみだれ」である。故に賢者は、假令外的世界の經緯をば如何とも爲し難いとしても、それによつて起されだ情欲に身を委せずに居ることは出來るのであつて、この「無情欲」が卽ち賢者の德である。かくして賢者は自己の情欲の克服により、翻つて外界を克服することが出來る。卽ち外的運命の惹起する快苦は賢者もこれを感受せざるを得ないのであるが唯快を善とたさず、不快を惡となさず、要するに感情に同意を與へざることによつて、自己滿足の誇りを保つことが出來るのである。

初期のストア學派はかくの如く情欲への屈服を唯一の惡とし、情欲の克服を唯一の善としたのであるが、後期のストア學派はかかる絕對的善惡の中間に相對的善惡を立てて嚴肅主義を緩和した。卽ち「望ましきもの」は善を促進する性質の故に第二次的善であり、「嫌ふべきもの」は善を妨害する性質の故に第二次的惡であるとし、唯「望ましきもの」と「嫌ふべきもの」との中間に位するもののみが善惡に對して絕對的に「無關心なるもの」であるとしたのである。この緩和は教育上に重要なる意義を有する。何故ならば初期の嚴肅なストア思想によれば、人間は情欲を支配する賢者か情欲に屈服する愚者かの何れかであつて、その兩極の中間者は存在し得ないのであるが、緩和されたるストア思想に於ては、賢者から愚者への移り行きは漸進的であつて、兩極の中間に「改善の餘地あるもの」卽ち「進みつつある者」が存在し得るからである。尤もこの場合にストア學派はかかる中間者が完全なる善に達するのは突然の轉向によると說明した所に、教育による漸進的向上を否定したのであるが、ともかく道德的狀態の「進歩」を承認したことによつて、教育論にまで是正展開せらるべき餘地を生じたのである。

上述の如きストア學派の倫理說は世界に關する形而上學的・神學的思想に支へられてゐる。彼等によれば情欲は「反自然的なるもの」であり、理性は世界竝びに人間の「自然」である。卽ち「自然」は第一に創造的世界力、合目的の世界心としての「理性」であり、而もそれは彼等に取つては同時に神であり、世界の一切を生產し形成する所の「生成的理性」である。そしてこの理性こそやがて世界を合理的に秩序づける所の「法則」である。かくて古來相對立する原理とせられて來た所の「自然」（プヌシス）と「法則」（ノモス）とはストア學派に於ては、それ等が共に「理性」であることによつて一に歸する。故に「自然に合致して生活する」といふ彼等の原理は同時に「理性に從つて生活する」ことである。情欲からの解放たる「無情欲」の原理も、情欲が理性を惑亂し世界の自然法則に背反するが故である。

かくの如き世界觀と倫理說とが國家論に結合することによつてストア學派の時代的特色は益々明かになつて來る。彼等によれば個々の人間の精神はその理性に於て世界の本性と本質的に同一であるが故に、各個人は本性上共同生活をなすべきものである。この共同生活は併し彼等に於ては神をも全人類をも一つに結合する「全體的共同社會」としての世界國家である。それは專ら同一の世界理性の分有の故にのみ生ずる結合であつて、それ以外の結合原理を含まざるが故に、歷史的制約や國民的・階級的差別を超えた全人類の理性的國家である。アレクサンドロス大王の偉業を通じて惹起された全世界の水平運動—希臘民族と異民族との久しき障壁を撤去し、自由民と奴隸との對立をも消去し、東西の諸國を一つに融合する世界國家運動—といふ文化史的動向は個々ストア學派の國家思想に反映し、又彼等の形而上學によつて基礎づけられたのである。而もかかる世界國家の思想は、若し現實に世界を支配しつつある大國民によつて受取られるならば、自らの使命の誇りある自覺となるのであるが、現實の政治的勢力を失つて亡國の途上にある國民に受取られるならば、それは如何なる特定の國家形態にも政治的職責にも積極的關心を有せざる冷淡無關心の態度として現はれるであらう。後者の場合には世界主義はそのまま個人主義である。ストア學派の國家思想が羅馬盛時の思想家—例へばキケローに於ては羅馬國法の積極的基礎となつたのに對して希臘末期の思想家に於ては消極的なる個人主義となつたのはそのためである。

エピクーロス學派の思想　エピクーロスはキュレネー派の思想を承けて「快樂」を最高善としたのであるが、併し瞬間的快樂よりも永續的快樂を優れるものとし、そして永續的快樂をば精神の「平安」即ち「安靜なる快樂」に求めた。更にエピクーロスは快樂を最大ならしめるためには、自己の欲望とそれの遂行によつて生ずべき結果とを比較考量する所の「知見」を必要とした。この見地より彼は人間の要求を三種類に分けた。第一種は「自然に」生ずる要求即ち生存のために絶對必要であつて賢者と雖も避け得ざる要求であり、第二種は「人定的に」作り出されたもの（世俗的名譽の如き）であつて、賢者はそれの無價値を洞察し、それから脱却せねばならぬ。第三に上の二種の中間に、自然的ではあるが併し生存に必須ではない所の要求が存する。賢者は已むを得ない場合にはこれをも斷念せねばならぬが併し成る可くはこれを享樂すべきである。

エピクーロスの奬める快樂はかくして結局人間の本性に根ざしながら衣食住の如き生存必需のものにあらざる快樂である。彼はこれをば洗練されたる美的生活と、親切高雅なる交友とに求めた。要するにそれは外界の運命に煩はされず、調和平衡の取れた衣食住と心情とによつて靜かに世界と人生とを觀照し享樂する生活であり、彼の言葉に從へば「肉體的に苦痛なく精神的に煩累なきこと」—一言にして所謂「みだされざる狀態」—である。

エピクーロス學派はかかる立場より宗教を排斥し、迷信からの妄想をば學問によつて征服すべきことを勸めた。神が人間生活や事物の運行に干渉するかの如く信ずるのは彼等によれば嗤ふべき蒙昧である。但し彼等はその標榜せる美的生活の理想を神話化するために、神々をば人間に類する巨大なもので、地上の萬象に煩はされずに世界の中間（中空）に精神的共同結社を成し觀照といふ浮靡な生活を送つてゐる樣に想ひ描いた。

浮靡な精神的共同結社も本來自己滿足を求める個人的要求から生れたものであるが、この思想はエピクーロス學派の國家觀に於て更に明かに現はれた。彼等に從へば國家とは個人が各自の利益を考量して「契約」を結ぶことにより成立したものである。從つて國法も「共同の利益に關する合意」から生れ、而もこの場合に、より優れた智力を有する者は勢ひ自己の利益になる樣に合意を導くが故に、結局國法は優者の利益のために制定せられるものである。行爲はそれ自體に於て正・不正があるのではなく、唯各人の利益となることが正であり、不利になることが不正である。國法に違背して罰を受けるのは不利であるが故に不正である。而して國政に缺る者はかかる不正に陷り易く不斷にかかる罰を恐れて暮す。それ故に人は出來るだけ政治への關與を避くべきである。

エピクーロス學派は人間の教養に關しても亦上述の如き生活理想に資するもののみを認めて他を排斥した。彼等に取つて必要なる教養は、眞理の根源規準を知るべき論理學（認識論）と宇宙の理法を知つて神々や自然現象や死に對する迷信的恐怖を除くための自然哲學と、人生の使命を知るための倫理學とであつて、其他の諸教養は無用であり、古來希臘教育が尊重して來た音樂・數學・天文學等もこの見地から廢棄せられたのである。

懷疑派の思想　ストア學派の思想がキニク派より發展し、エピクーロス學派の思想がキュレーネー派に結合せる如く、懷疑派の思想はソフィステースの傳統を受けたものである。懷疑派はその思想の性質上特定の學派を形成することは出來なかつたけれども、通常「初期懷疑派」の代表としてエリスの人ピュルローンとその弟子ティモーン（プリオスの人、後アーテナイに住む）とが擧げられ、「中期懷疑派」としては既述の「中期アカデミー」に屬するアルケシラオスとカルネアデースとが擧げられ、「後期懷疑派」としてはアイネーシデーモス（クノーソス出身にしてアレクサンドレイアにて教授せる人）及びセクストゥス・エムピリクス（希臘の哲學者・醫學者にしてアレクサンドレイア及びアテーナイに住む）が擧げられる。吾々はこれ等の人々の所說を個別的に叙述する餘裕を有たないが、要するに彼等はあらゆる方面より認識上の眞僞及び實踐上の善惡に關する絕對的標準を否定して、唯それ等の「蓋然性」のみを許し、それ故に「判斷中止」によつて一切の積極的斷定や去就を避け、唯便宜上慣習・法律に從ひ、かくして「無欲求」・「平靜」の狀態にあるべきことを說き、つひに一切の敎育の可能性をすら否定したのである。

當時三學派の全體的特色　以上三學派は各々その標榜する根本原理―（理性と快樂と懷疑）―を異にしながら、なほ共通の特色を具へてゐる。それは卽ち個人主義と消極的なる禁欲主義である。アレクサンドロス大王によつて世界國家の建設が試みられたけれども、大王歿後の世界には誰一人この大抱負を繼承し實現するだけの實力を有せず、大王の部下の諸將に分割された世界の何れの國家も國家としての隆盛を示すに至らなかつた。かかる世相を背景として人々は最早祖國への關心を失ひ、ひたすらに自己一身の安慰のみを念願した。ストア學派が世界觀の根柢に立つて世界國家を主張してもその本質は個人主義に外ならず、エピクーロス學派が唱へた國家契約說も固より個人主義から考へ出されたものであり、懷疑派に至つてはその思想の本質上國家への積極的貢獻

の如きは思ひも及ばぬものであつた。かくして共通に立脚せる個人主義の地盤は同時に禁欲主義の成果を齎らした。ストア學派は理性によつて情欲を克服し、エピクーロス學派は快樂の考量によつて情欲に「みだされざる狀態」に逃避し、懷疑派は善の絕對的標準を否定することによつて便宜的なる「平靜」に安住した。すべての歸する所は進んで求めず、敢て爲さざる消極的・退嬰的態度である。建國創業期より古典時代にかけての希臘民族が祖國と同胞とに强き關心を寄せ、團結と犧牲とを高き德と仰ぎ、體育・音樂の基礎的陶冶、軍事の修練、科學的研究、哲學的敎養のすべてをば、單に個人としてのみならず國家の一員として强く美はしく賢く善き人たらんがために修養せることに比較して、今や實に希臘民族は救ふべからざる老衰期に入つたのである。この憂ふべき事態は既にその傾向の萌し初めたる古典時代後期に於て、ソークラテース・プラトーン等の經世的思想家が身命を堵し、生涯を貫いて警醒の敎說を高唱したにも拘らず、つひに挽回の效はなかつたのであるが、今や末期的病根の深刻さは、かくの如き警醒の叫びをすら爲し得ざるに至り、人々は唯衰亡の身を自ら慰めることのみに沒頭することとなつたのである。

希臘より羅馬へ　衰へ行く民族をば强き思想もこれを支へることは出來ない。況んや個人主義と禁欲主義とに逃避して一身の安慰を求める弱き思想は希臘民族をひたすら滅亡の一路に誘つた。カイローネイアの戰以來マケドニアの配下に屬し、アレクサンドロス大王の歿後、希臘本土の諸國はマケドニアの覇絆を脫せんとして、アカイア同盟やエトルリア同盟の名の下に團結抗爭を試みたけれども、久しく慣らされたる小都市國家の對立的傳統と、民族の一般的老衰とは、つひにその效を空しくし、前一四六年羅馬の將軍ムムニウスが、コリントスを攻略して

アカイア同盟を粉碎するに及び希臘本土は大羅馬の一屬領となつて、玆に全く希臘民族の政治的生命は絶たれた。

然しながら彼等の文化的生命は永遠である。羅馬國家の希臘征服は希臘文化の羅馬征服を容易ならしめ、「捕へられたる希臘は猛き勝利者を捕へて學藝を荒れたるラティウムに持込んだ。」吾々は今や視點を西方に移して、世界史上無比の大國家羅馬の興亡を辿り、希臘文化の運命をもそれに併せて見守らねばならない。

結語　希臘教育の全體的特質

希臘教育史を論述し終るに際し、吾々はこの間に於ける時代の小區分と種族的・國民的特性とによる推移變遷にも拘らず、なほ全體として若干の共通なる特質を捉へることが出來る。そしてそれ等諸點は通常基督教文化に對立する異教文化として特色づけられるものに照應するが故に、吾々も亦この見地から、やがて來るべき基督教教育を豫想し、それとの對照によつて、希臘教育の全體的特色を概觀したいと思ふ。（羅馬教育もこの點に關する限り異教文化の基調に立ち、唯この共通の基調の上にありながら羅馬固有の面目により希臘教育から小分せられるのであつて、この見地からまた希臘教育の叙述に於て顧慮せられる。）

第一に吾々は希臘教育の陶冶理想として、世人が自然主義・現世主義・人文主義等の名を冠する所の特色を承認しなければならぬ。人間天賦の性能を禁斷抑壓することなく、寧ろそれを肯定し、積極的に、但し調和的に發展せしめて（自然主義）健康や富や名譽などの地上的財寶を獲得し、更に善美眞正なる價値をその知情意の上に

體現して、此の世ながらの幸福を齎らさんとすること（現世主義）は、―スパルタの如き例外はあるにしても―希臘的なる生活理想の一般的徴表であり、從つて希臘教育に於ける陶冶理想であつた。この事はやがて幸福の原因を人間に求め、人間自身の力によつてその理想に達することが出來ると考へる點に於て人間本位である。人の力により人の本性を發展せしめて人の世に人らしき理想を實現し人としての最高の幸福に與らんとする思念を廣く人文主義と解し得るならば、希臘的陶冶理想はまさに人文主義であると言はねばならぬ。若し又かくの如きは「理想」といふよりも寧ろその一般妥當性・究極の課題性に於て「理念」と呼ばるべきであるとすれば、所謂「人文理念」こそ希臘教育の共通目標であつたのである。かかる人文主義陶冶理念は、前史時代より古典時代前期にかけては無意識的に―（特にイオニア種族を代表とする）希臘民族の資性と傳統のままに―追求せられ、古典時代後期に於ては―特に全盛期のアテーナイを中心として―意識的に高揚せられ、政治も藝術も哲學もこの理念の下に榮えた。世界主義時代には文化の爛熟と民族の老衰とにより、反動的に消極主義・禁欲主義となり、人文理念は凋落したのであるが、それはやがて希臘民族そのものの現世的生命の衰亡に外ならなかつたが故に、翻つて希臘民族の繁榮は同時に人文主義の顯揚を以て特色づけられるのである。勿論希臘民族と雖も人間の外に神々を尊信し、現世を超えて前世を、來世を、永遠を考へないではなかつた。然しその場合の神々は、初期の素朴なる信仰に於ては頗る人間的に理解せられて善惡喜憂ともに人間に伍し、やがて洗錬深化されたる信仰に於て超人間的優越性が歸せられても、それが人間の理性乃至精靈（ダイモニオン）に顯現するものとして、內在的に把握せられ、その限りに於て、やはり人間本位たることを失はなかつた。自然の性情を罪惡とし、人の力を無力とし、現世をそれ自體では無價

値のものとして、それ等を超克し、ひたすらに超自然的・超人間的・超現世的なるものに憧憬歸依せしめんとする基督教的陶冶理想は未だ希臘教育の與り知らなかつた所である。

第二に希臘教育の人文主義はその根柢に於て主知主義に支へられてゐた。勿論希臘民族と雖も、建國創業時代は固より古典期・衰頽期をも貫いて實踐的意志は旺盛であり、又特に審美的情操・藝術的能力に於て彼等の面目は讃美せられるのであるが、それにも拘らず、彼等の意志と感情とを根柢に於て支配し指導してゐたものは理論であり、知的觀照力である。彼等が「美にして善なるもの」といひ、「調和」といひ「節度」といひ「中庸」といひ、又「永遠」・「常住」・「絶對」をいふ場合に、當面の徴表は藝術的・道德的乃至宗教的なる印象を與へるものでありながら、それ等の希求を成立實現せしめる所以の原理は畢竟「理性」であり、「識見」であり、「智慧」であり、「眞智」である。世界を支配する理性的原理—整然たる天體の運行や宇宙現象や數理體系や音樂の調律等—を成立せしめるロゴスが人生をも支配するとき、換言すれば人間の理性がかかるロゴスを把握して情意的なる感性(パトス)を支配するとき、そこに初めて望ましき人生が得られるのである。希臘精神を、(例へばオデュセウスの聰明を代表として)その原始的初發狀態より特色づけ、就中古典時代の藝術や哲學によつて最高度に顯揚せられたものは、實に透徹し洗錬された理性であり知性であつた。末期的症狀の希臘に於てすら、この知性は懐疑と逃避とに彼等を誘ふ主動力であつたのである。尤もそれ等諸相を通じて理性といひ知といふのは、必ずしも狹隘なる理論的認識のみではなく、實踐的理性をも含み、若しくは主としてこれのみを指すことすらあつたのであるが、それにも拘らず、實踐智は自然・宇宙・數理等に對する理論的認識を背景として人間生活の原理を求めるものである

から、結局は理論知に支へられてゐたのである。かくしてプラトーンやアリストテレースに於けるが如く教科課程の最高位に理性的探求—廣義の哲學—を置く事は整頓せる古代教育思想に共通なる特色であつた。後に述べるであらう所の、羅馬精神の特徴たる實踐的意志力と基督教精神の中核たる宗教的純情とに對立して、希臘精神を貫くものは實に聰明なる知力であつて、さればこそやがて羅馬精神も基督教精神もそれが希臘化せられることは、同時に知性化せられ學問化せられることに外ならなかつたのである。

希臘教育の第三の特質はその不平等性に見出される。そしてその一つは階級的差別である。これはスパルタの如く峻嚴なるものもあり、アテーナイの如く内政の發展によつて(特に自由民相互の間に於ては)次第に緩和されたものもあつたけれども、一般に自由民と奴隷との區別は希臘人に取つては自明の前提であつて、政治も經濟も道德もこれに基づき、教育及び教育思想が問題となる限り、それは常に自由民の教養に關してであつた。尤も希臘の奴隷は必ずしも種族的に劣等なる素質を有するものではなく唯戰爭や經濟關係の經緯によつて捕はれ若しくは買はれたに過ぎなかつたが故に、例へば童僕中の或る者の如く、すぐれた人格と高度の教養とを以て自由民の子弟を教導したものもあつたけれども、ともかくそこでは教育の理想・内容・方法が—例へばアリストテレースに於て最も露骨に表明せられた如く—自由民に適はしきものとして、奴隷らしきものとは意識的に區別せられたのである。

階級別に次いで希臘教育の不平等性は男女の性別に現れた。スパルタの女子に對する國家的尊敬、アテーナイの女子に對する家庭的尊重、プラトーンの理想國家論に於ける男女平等論などは、男女の地位の輕卒なる評價を

石山脩平著

西洋教育史

〈羅馬教育史〉

東京寶文館藏版

警めるに足る材料ではあるが、それにも拘らず、女子はすぐれた男子を生み育てるための方便として敬重せられたのであつて、一般的には男子の從屬的地位に置かれ、教育の制度及び理論も當面の主要對象としては專ら男子を考へてゐたのである。

更に種族的乃至國民的區別も希臘教育の不平等性の中に數へ得るであらう。希臘民族(ヘルレーナス)が異民族(バルバロス)に對する自恃と偏見、同じき希臘民族内に於けるスパルタ・アテーナイ・コリントス・テーバイ等々の對立抗爭を考へるとき、吾々は希臘民族が到底世界の大國民となり得ざる素質と傳統とに拘束されてゐたことを想はねばならない。外敵と内訌とを警戒しつつ建國創業の企圖を遂行して來た諸國民がその國家の維持發展のために國家的關心を主とせる教育を必要としたことは當然首肯せられ、この意味に於て希臘民族は教育の國家的制約といふ自然の事態を最も素朴に負うてゐたものである。それ故にまたやがて文化の爛熟、自由主義の餘弊が現はれて個人主義が擡頭して來たとき、プラトーン、アリストテレース等の大思想家は國家論と密接に結合して國民教育を力說せねばならなかつた。希臘末期の思想家は國家を超えて世界主義的卽個人主義的教說を唱へたけれども、それは同時に亡び行く希臘民族の挽歌に過ぎなかつたのである。かくして希臘教育本來の面目は階級的・性的・種族的・國民的不平等性に立脚してゐた。これ等の不平等性が超克せられるためには、群小都市國家の傳統に禍されずして世界的大國家たるべき素質と實力とを有する羅馬國民が必要であり、更に進んでは全人類を同じ神の子なる同胞と考へる基督教義が必要であつて、そこに羅馬教育史及び基督教的中世教育史への要望が存するのである。

第二篇　羅馬教育史

〈目次〉

序說　羅馬教育史の地位とその時代區分……一

一　羅馬の文化史的地位……一

二　羅馬教育史の時代區分と主要問題……三

第一章　共和時代の教育……五

第一節　共和時代の國風と教育事實……五

共和時代の國風と教育の理想及び內容……家庭教育……學校教育……社會教育

第二節　共和時代末期の教育思想……一七

一　教育思想の發生とその全體的特色……一七

教育思想の發生……教育思想の代表者とその全體的特色

二　カトー……一八

その生涯……羅馬の國粹保存と希臘的國風の排斥……教育の實踐及び思想

三　キケロ……二六

その生涯……思想の全體的特色……一般教育思想……雄辯家教育論

四　ワルロ……二七

その生涯……教育思想

第二章　帝政時代の教育　……二九

第一節　帝政時代の國風と教育事實　……二九

アウグスツスの治世と羅馬黃金時代……國風の頽廢と教育の大勢……家庭教育の頽廢……社會風教の頽廢……圖書館の發達……教育制度の發達……初等教育及び中等教育……高等教育　……二九

第二節　帝政時代の教育思想　……三一

一　セネカ　……三一

その生涯……教育思想　……三一

二　クインチリアーヌス　……三四

その生涯……辯論教授論の價値とその構成……家庭教育……學校教育の長所……兒童の個性とその取扱方……文法教師の資格と辯論術の基礎教科……多くの教科の學習可能性……その史的地位　……三四

三　プルータルコス　……六四

その生涯……根本思想……身體の訓練……性情の訓練……實踐理情の訓練……實踐理性より理論理性への轉移……理論理性の訓練……その史的地位　……六四

結　語……羅馬教育の全體的特質　……七五

第二篇　羅馬教育史

序說　羅馬教育史の地位とその時代區分

一　羅馬の文化史的地位

吾々は希臘教育史の始に於て、希臘文化がその後のあらゆる文化の源流であり且つ原型であること、並びに希臘教育史が凡そ教育の事實及び理論に對する典型的始源を提供してゐることを述べた。そして希臘教育史の終に於ては、希臘が羅馬によつて亡ぼされ、それにも拘らず「捕へられたる希臘が猛き勝利者を捕へ、學藝を荒れたるラチウムに持込んだ」ことを指摘した。羅馬の文化史的功績の最大なるものは實に希臘文化の繼承とその傳播とにあつたのである。

羅馬はその建國の創業の進展と共に、北はエトルーリア(Etruria)を介して、南は所謂大希臘(マグナグライキア)(Magna Graecia)より、希臘文化を吸收しつゝ成長した。勿論これは原始的希臘文化の吸收であつて、そこには羅馬自らの發展がより前景に立つてゐたけれども、後年希臘を自國の屬領とするに及んで、黃金期並びに爛熟期の希臘文化は滔々と羅馬に移入せられ、こゝでは寧ろ羅馬の希臘化が時代を特色づけるに至つた。かくして羅馬人は文化的には創造者であるよりも普及家であり、發案者であるよりも實踐家であつた。彼等の特に卓越せる能力を證明する武力

及び法制さへも、その始源は希臘より學び受けたものであり、その整備充實も、それによつて世界を蓋へる大版圖を開拓・統制し、希臘文化繁榮の地盤を用意するに役立つた觀があるのである。

人々は近世文化の黎明を文藝復興運動に見出し、この運動の本質を古代文化の再生に求める。併し謂ふ所の古代文化とは、運動の當初に於て專ら羅馬の文化であつて、希臘文化は羅馬文化の復興を介して初めて呼び出された。即ち文藝復興運動を先導せる伊太利の人文主義者達は、先づ祖國の前身たる羅馬の榮光を偲んで讃嘆これを久しうし、やがて羅馬文化の更に深く遠き源流に遡つてつひに希臘文化を吸收するに至つたのである。

中世文化の基調を成せる基督敎も、中世世界を支配する前に先づ羅馬を獲得した。即ち羅馬が當初の頑迷を棄てゝ基督敎に歸依し、ヘブライ語及び希臘語の聖書を羅甸語に飜譯し、又羅馬帝國内の神學者が敎義の基礎づけを行ふことによつて、基督敎の世界的生命は不拔に培はれた。新興ゲルマン民族はそれ故に先づ羅甸語を介して基督敎化せられたのである。かくして羅馬は、その政治的勢力の强大さと、それにも增して廣く長かりし羅甸語の生命との故に、古代希臘文化のみならず中世基督敎文化をも、近世歐洲民族の共通の財寶として保有し傳播したのである。

史家は羅馬を大なる湖に譬へ、百川これに注ぎ、百川これより流れ出たことを述べる。これに注げる百川の中、特に顯著なる主流は、上述の如く、さきには希臘文化であり、次では基督敎文化である。而もこの兩文化は世界文化全體の基本潮流に數へられるものであつて、一たび羅馬に注ぎ込むことによつて世界的地盤に浸潤し、やがて羅馬の崩壞の後も、新しき生命に蘇りつゝ、近世世界文化の主流を形成して來た。若し羅馬人の壯業雄圖がな

かつたとしたら、輝ける希臘民族の學藝も、基督の聖なる敎も、單に地方的・局所的文化たるに止まつたかも知れない。吾々はそれ故に重ねて羅馬人の文化史的功績をば、傳播者・普及者のそれとして讃美するのである。

二　羅馬敎育史の時代區分と主要問題

羅馬の政治史並びに文化史に於ける時代區分に從つて、羅馬敎育史の時代區分とその各時代に於ける主要觀點とを、吾々は次の如くに豫定したいと思ふ。

第一期は羅馬の建國（753 B. C.）よりアウグスツスの帝政時代（Augustus, 31 B. C.—14 A. D.）の出現する迄でその大部分が共和政治時代であるから、吾々はこの期間の敎育事實及び敎育思想をば、共和時代の敎育として叙述することゝする。この時期の初め、羅甸民族はチベリス（Tiberis）河口の羅馬（Roma）を中心として國を建て、やがて貴族を主とする共和政治となり、外は次第に四隣を攻略して版圖を擴め、内は貴族・庶民の抗爭を緩和して法制を整へ、かくて武力と法制とを特色とする堅固なる國家を建設した。かゝる建國・創業の雄圖は羅馬人本來の質朴・剛健にして意志的・實踐的なる性格を益々練磨して、玆に古き羅馬の國風を形成し、その雰圍氣の裡に實直・健全なる敎育は行はれた。この間にも既述の如く、希臘文化は間接に學び取られたけれども、全體の時代精神は寧ろ羅馬固有の面目の發揮として特色づけられてゐた。然るに前二世紀の中葉、希臘をその屬領としてより、希臘文化と希臘的敎育との直接輸入が漸く行はれ初め、後の帝政時代の文化と敎育との前階を形成した。但しこの時期の希臘の感化は、より强大なる國粹思想の反撃・警戒によつて、未だ充分には羅馬人の生

活及び思想に浸潤するに至らなかつたのである。かくして共和時代の教育史に於ては、建國・創業の雄圖を通じて培はれたる原始羅馬的國風が、その家庭教育・學校教育及び社會教育の上に如何に素朴・質實なる反映を示したか、並びにそれ等が、やがて萌し初めたる希臘的影響の下に如何なる變動を受けたか、又その事實が憂國の人士の如何なる教育的反省—教育思想—を生ぜしめたかといふ諸點が中心問題である。

第二期はアウグスツス帝の頃より羅馬の衰亡に至る間で、吾々はこの間の教育事實及び教育思想をば、帝政時代の教育として叙述する。アウグスツスの治世はアテナイのペリクレス時代に比すべき羅馬黄金期であり、世界を蓋へる大版圖は一家の如くに統一せられ、首都羅馬は壯大・美麗の限りを盡してプルタルコスの所謂「世界を平和の港に繫ぐ錨」となつた。而もまた凌落の素因はこの極盛の蔭に醸されつゝあつたのである。即ち既にして敵國・外患なき强大なる國内には、享樂・奢侈・殘忍の風潮が滔々として流れ充ち、所謂羅馬の榮華とその凋落とが時代の大勢を特色づけたのである。この帝政時代の教育史に於ては、かゝる國風に影響せられて先づ往年の堅實なる家庭教育が如何に衰頽し、又社會が如何に教育的職能を失墜して大衆を墮落に逐ひやつたか、それにも拘らず學校教育のみは、何故に且つ如何なる方向に發達し繁榮したか、といふ諸問題が主要觀點である。こゝでは吾々は、一面に於て羅馬とその全屬領とが如何に狂熱的に希臘化されて行つたかを見ると共に、他面それが如何に大羅馬の現世的生命の滅亡を原因づけたかを究めねばならぬ。

第一章　共和時代の教育

第一節　共和時代の國風と教育事實

共和時代の國風と教育の理想及び內容　共和時代を貫く羅馬國民の教育理想は、一言にして、强き意志の人、實踐の人を養成するにあつた。古典時代の希臘國民—特にイオニア種族によつて代表せられた希臘的面目—の特徴は既に早くから、眞理のために眞理を觀、美のために美を觀る所の觀照（テオーリア）の生活を示し、理論的透徹と藝術的洗錬とを人生の上に表現することに彼等の德—彼等の教育理想—は存した。そこでは單に强壯なる身體が求められる代りに、均齊と調和とに美化された身體が讃へられ、精神的にもあらゆる價値方向を多方的に圓滿に實現せる「美しき善き性質」が追ひ求められ、而もかゝる善美の精神と身體との不可分に結合せる狀態が人生の望ましき姿として仰ぎ慕はれた。然るに本來の羅馬人的理想は、希臘に於ては寧ろ特例と見らるべきスパルタ的精神に近似しながら、それを單に軍國征戰の要求にのみ局限せずに、和戰何れの地盤にも擴大し、戰に於て飽迄も强く、平和に於て統制・秩序を尊重し、權利・義務を恪遵し、その身と家と祖國とを堅き操守と舊き傳統とに安固ならしめることに求められた。かゝる心情・行爲こそ羅馬に於ける「人らしき資格」としての德（virtus）であり、この德を具へたる「善き人」（vir bonus）が、希臘に於ける「美しき善き人」に對して、羅馬人の本來の生活理想であり、同時に共和時代を貫く教育理想であつた。要するに希臘人が「觀照」の「閑暇」を有したのに對して、羅馬

人は「實踐」の「多忙」に終始し、希臘人が青春的な理想主義（Idealism）に生きたのに對して羅馬人は大人びた現實主義（Realism）に生きたのである。

かゝる教育理想は當然教育の內容の上に注目すべき特色を現はした。第一にそこでは、希臘の自由民が殆んど關與しなかつた經濟生活が、羅馬國民の重要なる生活內容、從つて教育內容であつた。農牧の民を奴隸としてその上に君臨した希臘自由民とは異つて、羅馬人は貴族と雖も本來チベリス河畔の農牧業を自ら開拓せる人々であり、自然（Natura）のまゝの荒地を耕作（Colere）すること、そして開墾され調整された土地（Colonia）を建てることは、實に羅馬人に於ける文化（Cultura）の原義であり、謂はゞ農耕（Agricultura）の精神が羅馬文化の精髓であつた。更にエトルーリアや大希臘等との間に通商も早く開け、羅馬人の文化は一面これを動因として促進せられた。かくして經濟生活は羅馬國民の注目すべき特色であつて、かの十二銅板法に財產上の權利・義務、その防衛や相續等に就て詳細に規定してあるのを見ても、これが如何に重要なる生活內容であり、從つて教育內容でもあつたかが窺はれるのである。

第二に羅馬はスパルタや初期のアテナイと同樣に、四隣に敵を負うて發達した國であるから、軍事が國民生活の主要內容であつたことは言ふ迄もない。エトルーリアのウェイー攻圍戰に於て軍隊に俸給を與へてより職業的軍人が漸次に增加したとはいへ、羅馬本來の面目は國民皆兵であり、從つて軍事は國民教育の主要內容であつた。

第三に羅馬教育の主要內容は政治的生活であつた。これも希臘のそれと軌を一にせるものである。「議場」

（Comitium）と「市場」（Forum）と「演壇」（Rostra）とは、實に羅馬の成人が青少年子弟を率ゐて絕えず出席する場所であり、彼等の若き耳目は、そこに國事が講せられ、裁判が開かれ、憂國の熱辯が揮はれるのを見聞した。そしてそれ等の事の規範・準則が十二銅板に刻せられてあるのを、彼等は暗誦したのである。法律的思想、政治的訓練は、實に羅馬の國民教育を他の如何なる國の教育にも優つて特色づけた內容である。

土地を開墾し、自然を價値化する所の文化は、やがてかゝる仕事を原初に於て開始した祖先、若くはかゝる仕事を守り掌る神に對する禮拜（cultus）となる。單に農耕に限らず、商業に軍事に家政に政治に、苟も人の價値的行動に關する限り、夫々に守神があり、夫々に宗教的儀禮法式があつて、これを禮拜し遵奉することは、原始的民族の通有性であるが、羅馬に於ても亦かゝる宗教的要素が日常生活に深く結合してゐた。そして家の父は同時に家の祭司であり、母や子女は、父に從ひ父を助けて、共に祭事を營むことによつて、傳統的宗教に導入せられ、訓練せられたのである。かくして宗教的信仰と儀禮とは、堅實なる羅馬文化の根柢であり、同時に羅馬教育の主要內容であつて、十二銅板法もこの方面に關する條令を多分に含んでゐる。

以上の如き經濟生活・軍事生活・政治生活・宗教生活は何れも少青年が先輩壯年者の實踐に參加し若くはこれを親しく見聞することによつて與へられた教育內容であるが、これ等の內容を文獻に收めたものとして重要なる教科材料となつたものに十二銅板法と英雄偉人の傳記とを數へることが出來る。十二銅板法が如何なる內容と意義を有するかは、既に隨所に述べ來つた所で推知せられるであらう。英雄偉人の傳記が教育內容として重要なる役割を演じてゐたことは羅馬に於ける注目すべき事實である。プルタルコスの『英雄傳』は希臘羅馬の各方面の

偉人を比較論述した列傳であつて、帝政時代の著作であるが、併しこの書に纏められるまでの材料としては、既に早くから偉傑の傳記が何等かの形態に於て、傳へられてゐたことが推定せられる。そして羅馬の青少年達は、恰も希臘に於けるホメロス詩篇の如く、それ等の傳記に親しみ、而もホメロスの神々に對するよりも更に親近なる關係に於て、地上に大なる足跡を遺せる人々を追慕し、これを學び倣つたものと思はれる。以上の如き理想及び內容を有する羅馬の教育は、次にそれが、如何なる場所に於て、如何なる人々により、如何にして實施せられたかを見る場合に、一層具體的に吾々の前に展開せられるであらう。

家庭教育　建國以來共和時代を通じて、羅馬教育の最も主要なる場所は、あらゆる健全なる教育が然る如く家庭であり、そして家庭教育の中心は母であつた。子女に健全なる道德的並びに宗教的基本情操を培ひ、正しき人生觀・生活態度の根柢を築いたのは母であつて、キケロの所謂「母の膝下に教育せられること」(educari in gremio matris) は、實に羅馬教育の常道であつたのである。この事の結果として、婦人に對する尊敬は、基督教以前にあつては、羅馬人に於て他の如何なる國民に於けるよりも高く現れた。特に既婚の婦人を意味するマートローナ (matrona) といふ語は、同時に尊敬・高貴・有德といふ副次的意味を伴つてゐた。街上に於ても男子は敬意を以て夫人に道を讓り、又夫人に對し、若くは夫人の面前に於て、無作法の話をする者は罰を受けるのであつた。要するに母は一家の中心として家族一同から仰がれ、その子女や下婢達をば、身を以て範を示しつゝ、教導したのである。

夫人は又その夫が會食や會議や裁判等の公共の席に出る場合はこれに隨從して、知見を廣め、その名聲・德望

に於て時に男子に匹敵することもあつた。故に夫婦間の相互の尊敬と信賴とは頗る强く、建國以來五百年もの間(前二三一年まで)離婚の沙汰を聞くことがなかつた程である。

かくの如く健全・純潔なる雰圍氣の裡に子弟は心身を薰陶せられ、長じて後は兩親の仕事や娛樂に參加しつゝ、到る處に謹嚴・實直なる羅馬的精神を呼吸してゐたのである。健康にして力强き身體、神への敬虔と法律の尊敬、言動の謙虛と堪能、服從・堅忍・節制・勤勉、理解力、自己の力と國家の統制とに對する信賴、凡そかくの如き諸德が幼少の間に養はれた性情であつて、かゝる子供こそ長じて物分りのよき人、善良なる父、有爲なる市民となつたのである。

次に父は子供に對して絕對の權利を有してゐた。十二銅板法の第四表たる「父權」(patria potestas) の規定によれば、父は不具・畸形の初生兒を直ちに殺す權利を有し、又子供の生涯を通じて、監禁し鞭撻し、鎖に繫いで農耕の勞役に服せしめ、殺害し又は賣却し得る權利を有し、公職高位に就ける後の子供に對してすらこれ等の權利を有してゐた。かゝる絕對權を有する父は同時に子供の教育の主なる擔當者であつた。即ち父が家に於て、若くは國や市區の祭壇に於て、神や祖先を祭る場合には、子供等を補助者として伴ひ、又舊き英雄や政治家の讃歌を唱へる時には子供等にも聞かせ、父が他に招かれた時にも子供等を伴つた。又耕作・播種にも子供等を參加せしめ、乘馬・水泳・拳闘・劍術等をも父が子供等に範を示して練習せしめ、且つ讀書・習字・計算及び法律等生活に必須なる知能をも子供等は父から學んだのである。そして又子供等は父から、元老院や民會や兵員會や戰場や陣營等に於ける有樣を語り聞かされることによつて、未來の有爲なる公民・戰士たる準備を、家庭に於て與へ

られつゝあつたのである。

母と父との外に家庭教育に參加せるものとしては、共和時代後半に、童僕と家庭教師とがあつた。即ち羅馬が大希臘地方を併せるに及んで、希臘の奴隷若くは希臘語及び希臘文化に通ぜる羅馬の奴隷が、童僕として、上流家庭に雇はれるに至つた。そして初期の童僕はその高き教養と純潔なる品性とを以て、家に於ても、外出先に於ても、よく兒童の言動を監督指導し、家族から尊敬と權威とを與へられてゐた。彼等に與へられた種々の呼稱、即ち監督者（custos）・仲間（comes）・教師（rector）・王（rex）・主人（dominus）等を見ても、童僕の高き地位と多樣の職責とを窺ふに足るのである。尙ほ上流家庭では、早くより特別の教師（magistri）を聘して、兒童に初步の教科を教授させ、希臘文化移入後は、希臘の文法教師を家に招聘することも行はれた。

學校教育　家庭教師を聘することは上流家庭のみがなし得る所であるから、一般民衆に初步的知能を普及させるためには、學校の必要があつた。羅馬の學校は何れも私立で、而も時代の進展と共に、漸次に程度の高きものを生じ、共和時代を通じて、結局初等・中等・高等の三種を有するに至つた。既に共和時代の初期、十二銅板法制定の頃から、市場の特定の小亭（ludus）に、主として年長の婦人のための初等學校が存したことを史家は傳へてゐる。故に少年のための學校は更に早くからあつたことが推定せられる。これ等の初等學校は「ルードゥス」（ludus, pl. ludi）と呼ばれた。それは本來「遊戯」・「競技」等の語義を有し、轉じては閑暇に任せて片手間にする仕事を意味するものであつて、即ちそこで學習する讀書・習字・算數等が、羅馬の初期に於ては、生活の主要な內容ではなく、從つて教育內容としても重要性を有せず、子供が閑暇を埋める遊び仕事の如くに考へられてゐ

たことを示してゐる。

かゝる初等學校は、市場や街の三叉路等にある小屋の中に設けられ、後世この程度の初步知識を「三叉路的知識」（trivialia scientia）と呼んだのは、學校が三叉路（trivium）にあつたことから起つたものである。前二五〇年頃の有名な元老院議員スプリウス・カルウィリウス（Spurius Carvilius）が學校を開き教授に熱中してから、この種の初等學校は益々普及して來た。

初等學校の教科內容は讀書と習字と算術とであつた。十二銅板法の暗誦も讀書と結合して行はれた樣である。（希臘國民教育の主要教科たる體育と音樂とが羅馬に於てつひに教育の本質的內容とならなかつたことは注目すべき特色である。）これ等を教授する人を讀書教師（literator）と呼んだ。讀書の教授法は、先づ文字の名稱と順序とを、次にその形と發音とを教へ、然る後に綴字を教へた。この綴字は教へ方が頗る拙劣で修得が遲く、教師は鞭を加へて漸くこれを學ばしめた。喜劇詩人プラウツス（Titus Maccius Plautus, 227—184 B. C.）の皮肉な誇張によれば、兒童は綴字を誤る度毎に、その身體の皮膚を下女の上衣の樣に染められねばならなかつた。讀書に次で間もなく習字も課せられ、教師は初め兒童の手を取つて書方を教へ、次に文字の手本を與へ、更に短文の手本を與へて、模し習はしめた。習字用具としては、蠟を布いた板と、鐵筆（stilus）とを用ひた。羅馬人に取つて特に重んぜられた教科は算術で、そのためには既に相當年長の少年も特別の「算術教師」（calculator）の許に通學した。羅馬の數字は記數法が不統一であり、且つ十進法でなかつたので、筆算の外に、十進法に基く指算と算盤とが用ひられた。指算は左手の指を以て一より九までと十より九十までとを表し、右手の指を以て百より九百ま

でと千より九千までとを表し、一萬以上は何れかの手を身體の特定の場所に觸れる身振によつて示された。この指算は東方諸國や希臘に於けると同樣に伊太利に於ても中世期まで一般に行はれ、商取引その他の日常計算に利用せられた。算盤（abacus）は、石・木材又は金屬の板で、これを種々に用ひて數を表した。又幾何圖形は板の上に砂を布いて鐵筆で描いた。公私共にその收支記入には計算板が用ひられた。

希臘文化の輸入と共に、初等教育の教科目としても希臘の詩人の作品が採用せられ、それを教へるために「グラマティクス」（grammaticus）若くは「リーテラーツス」（literatus）と呼ばれる「文法教師」が、先づ上流家庭の教師として、次で學校教師として現はれた。ホメロス詩篇は羅馬に於ても永く中心的教材であつた。かく希臘の教育內容が採用されたことは、羅馬の教育が眼前直接の實利主義より高き理想主義的立場にまで進んだことを意味する重要事實である。やがて希臘語の教材の外に、希臘作品の羅甸譯並びに羅甸作品も用ひられるに至つた。即ち大希臘から羅馬に來たリヴィウス・アンドロニークス（Livius Andronicus, 284—204 B. C.）が『オデュセウス』篇を羅甸語に譯してより、それは昔く羅馬の文法學校に用ひられ、又續いて各種の希臘作品の羅甸譯が行はれた。カラブリア（Calabria）のルディアイ（Rudiae）に生れ、サルディニア（Sardinia）から羅馬に來たエンニウス（Ennius, 239—169 B. C.）も亦希臘の詩を羅甸語に譯し敎へた。更にペルガモンから羅馬に大使として來たクラテス（Crates）は前一五七年に初めて文法を羅馬に導入したと言はれてゐる。かくの如くにして、共和時代末期には、從來の初等學校の外に、より高き程度の「文法學校」が出來、そこでは希臘語及び羅甸語の文法並びに希臘・羅甸の作品が「文法教師」によつて、教授せられたのである。

文法學校の教師は、やがて同時に希臘の修辭法（雄辯術）卽ち議會や法廷に於ける論難辯護の術をも教へた。スエートーニウス（Tranquillus Suetonius）によれば、文法學校教師は、その生徒が當時漸く勢力を得つゝあつた修辭學教師（rhetor）の許に走ることを防ぐために、修辭學を教へたのである。故に文法學校の生徒中にはそこから直ちに法廷に赴いたものもあつたとのことである。然るにその後專門の希臘修辭學教師が次第に增加し、而もそれが羅馬の國粹思想の反感を買へるものゝ如く、前一六一年に元老院は、時の統領をして「共和國の福利のために哲學者と修辭學者とが羅馬に居ることを許さざる旨」を告示せしめてゐる。それにも拘らず時代の大勢は制し難く、羅馬人にして修辭學校を開く者さへも漸く現はれ、前九二年に時の監察官は次の如き警告を發布してゐる。「聞く所によれば、或人々は昨今新しき種類の教育を始め、我國の青年が彼等の學校に集り、彼等は自ら羅甸修辭學者と稱し、青年はそこで終日を空費するとのことである。吾人の祖先は、子供等が如何なる教授を受け、如何なる學校に通ふべきかを規定して來た。この先祖の規定と風習とに反する昨今の新風潮に吾人は賛することを能はず、又それを善しと認めることも出來ない。故に吾人は、かゝる學校を開き又かゝる學校に出席しつゝある者に對して、吾人はそれを非と斷定する旨を告知するのは、吾人の義務であると考へるのである。」かくの如く修辭學校は羅馬の爲政家の壓迫を受けたにも拘らず、時勢は有能の士をして、自己の辯護のためにも世に名聲を博するためにも、修辭學（雄辯術）の必要なる所以を益々痛感せしめ、特に上流子弟のこれに赴く者が次第に增加して來たのである。但しこれが整備せる學校制度として隆盛を示したのは、帝政時代に入つてからであつた。

社會教育　上述の如き家庭教育及び學校教育を受けた後、男子は公民として社會の公共生活に參加する。男子十七歳の三月十七日を「チーローキニウム」(tirocinium) といふ。それは青年が新兵(tiro)として新に軍籍に入る日卽ち元服の日を意味するからである。この日に、青年は家族一同から祝福せられ、母の溫情溢るゝ訓言を受けた後、父や親戚・友人等に伴はれて、市場(フォルム)に行き、長官の前で、市民の制服たる白の外衣—所謂トガ (toga 或は toga virilis)—を着せられ、長官の訓告を受ける。次に社殿(カピトーリウム)(capitolium) に赴き神々に供物を獻じて國家の忠良なる市民たることを誓ふ。これ等の儀式終了後、祝宴が開かれ、その家族の親戚や知友の間に贈物が頒たれたのである。

一般下層階級の青年は元服と同時に父と共に農業若くは商業に就き、戰に召集せられない間は、その家業に從事した。上流の青年は元服後、舊き風習に從つて、各自の素質及び希望に應じ、「軍人候補」(tirocinium militae)「政治家候補」(tirocinium fori)「辯論家候補」(tirocinium eloquentiae) となり、夫々先輩に就て實地の教導を受けた。軍人たるべき者は、困苦缺乏に堪へるために身體を鍛錬し、毎日チベリス河に浴して水泳を習ひ、又乘馬・狩獵・槍投等を練習した。これ等の訓練の後、軍營に加はつて實戰を經驗し、軍人として實地に修練を積んだのである。政治家たらんとする者は定評ある政治家に就き從つて、法律的並びに政治的事件の處理を手傳ひ見習つた。又法律を學ぶためには特定の法律家に私的教授を受け、先づ私法事件に關して實地に修練し、次に雄辯術をも修めて公の政界に働く樣になつた。辯論家候補者は、初期に於ては特定の辯論家に從つて直接に實地の活動に參加したが、やがては特に雄辯術の教師に就て學ぶことゝなつた。それも初めは「希臘語雄辯教師」(rhetor

graecus)に就て一定の課程を修めてゐたが、後に「羅甸語雄辯教師」(rhetor latinus)が現れるに及んでこれにも併せ就くことゝなつた。雄辯術は理論的學習たる講述 (dissertere) と實地練習たる演習 (declamare) とに分けて修練し、前者に於ては、教師が雄辯の本質や模範演說 (例へばキケロの時代にはカトーやグラックスの演說) に就て解說し、後者に於ては、生徒をして特定の問題に關して贊成及び反對の議論、卽ち「說得演說」(suasoriae declamationes) と「反駁演說」(controversiae declamationes) とをさせたのである。

前二世紀の中葉、希臘本土が羅馬の屬領に歸して以來、希臘の哲學が羅馬に移入せられた。但しそれは純然たる眞理への憧憬からではなく、羅馬人本來の實踐的要求から、換言すれば辯論家・政治家として、身を修め、知見を磨き、有能練達の士となるための要具として、哲學が學ばれたのである。一方またこの時期の希臘哲學自身が、古典時代の純粹さと學的眞摯さとを失つて生活の方便化したものであつたが故に、哲學に關する限り、希臘と羅馬とは當時同じ雰圍氣の中に、彼から此へ傳播し感染して來たのである。卽ちそこでは、哲學諸思潮間の當初の區別は次第に曖昧化して折衷的色彩の下に採用せられた。併し就中實直嚴肅なる本來の羅馬的風習に適應するものとして、ストア學派の克己節欲の道德哲學が最も多く學ばれた。それに次いではエピクロス派の快樂主義道德哲學も羅馬の自由思想的・無信仰的・享樂的傾向の人々の間に相當迎へられた。又アカデメイア及び逍遙學派の哲學も、それ等の純理的色彩の故に、僅少の眞面目な研究的・思索的態度の人々の間に行はれた。吾々はこれ等希臘・羅馬哲學それ自身の論究をば一般哲學史に讓り、教育史としては後に、當時の羅馬の教育思想家達が受けたる教養として、これ等哲學諸流に就て再說するであらう。

因に當時は一般文化の進展と共に、女子の教養も一般に高められ、かのカチリーナ（Catilina）陰謀事件（64—62 B. C.）に參加せる女丈夫セムプローニア（Sempronia）の如きは、希臘的及び羅馬的學識を敎へられたる女」として讃へられてゐる。

尙ほ希臘學藝の移入と共に書籍の蒐集、筆寫、販賣等も漸く起り、共和時代末期に於て既に、筆耕人（scriptores, literatores）、手記（autographum）、書籍（codex）、書籍販賣人（bibliopolae）、書店（taberna libraria）等が存在したことを史家は傳へてゐる。

扨て以上の如く羅馬本來の敎育が次第に希臘的敎育に影響せられると共に、知育の方面は著しく內容と高度とを增したけれども、德育の方面は却て次第に衰頽しつゝあつた。羅馬人が伊太利半島を統一した時は、同時に堅實なる道德的・宗敎的傳統を失ひ初めた時であつた。卽ちそこには個人主義的・利己的野心乃至は享樂的傾向が次第に萌しかけてゐた。果してその後の羅馬は外に益々世界的帝國の大を致しながら、內には內訌・黨爭が漸く露骨となり、紛亂の度を加へつゝ、共和時代の終焉に近づいて行つたのである。そしてかゝる道德的頽廢も亦希臘的學藝の移入と共に、憂國の志士の反省を促さずには措かなかつた。吾々はかくして今や共和時代末期の思想家による文化の批判、國民への誡告、卽ち敎育思想に就て述べなければならない。

第二節　共和時代末期の敎育思想

一　敎育思想の發生とその全體的特色

敎育思想の發生　何時何處に於ても敎育思想は、一般文化並びに敎育事實への批判・反省として發生する。そしてこの批判・反省は、文化及び敎育の事態が何等かの新契機に依る變動乃至混亂を來して、心ある人々の注意を喚起することによつて始めて行はれる。恰も希臘の歷史に於て、古き希臘より新しき希臘への推移と共に敎育思想が發生した如く、羅馬に於ても亦共和時代の末期に、國運の隆盛と希臘文化の導入とによつて、建國創業以來の羅馬的面目が漸く動搖し改變し來れる時に、それへの反省として敎育思想が發生した。卽ち內外自他の文化が混合し新舊兩要素が對比的に眼前に現れたとき、人々は舊きものゝ長短を吟味し、新しきものゝ權限を檢討することの必要に迫られ、こゝに國民子弟をして何を如何にして學ばしむべきかといふことの問題——敎育的反省——に向はざるを得なくなつたのである。

敎育思想の代表者とその全體的特色　かくの如くにして共和時代末期に發生せる敎育思想は、主として次の三人によつて代表せられてゐる。第一にカトー（Marcus Porcius Cato, 234—149 B. C.）は舊き羅馬的精神を最も鮮明に體現し支持して新しき希臘的風潮を極力排擊し、第二にキケロ（Marcus Tullius Cicero, 106—43 B. C.）は羅馬的精神の基調に立ちながらも希臘的敎養を最も自由に豐富に學び採り、その人格と思想とに於てこの時代の最

も輝かしき精髄を指示し、第三にワルロー（Marcus Tereus Vorro 116—28 B. C.）は前二者の中間的地位に立つて複雑なる教養と方向とを併せ含み、移り行く世相を適確に表現してゐる。これ等三人の思想家を通じて吾々は併しなほ羅馬の國風が全く爛熟の域には到らず、依然として共和時代の堅實性に支へられてゐるのを見る。そして又これ等の人々の教育思想が未だ學的體系と根據とを有せずして、たゞその憂國經世の抱負主張の裡に斷片的に教育思想を藏してゐるに過ぎないことは、後の帝政時代の組織的教育思想と對比して、一般に時代の學的未熟さを暗示するものである。

二　カトー

その生涯　マルクス・ポルキウス・カトー（Marcus Porcius Cato）は、その曾孫に當るマルクス・ポルキウス・カトー・ウチケンシス（M. P. C. Uticensis）と區別するために、大カトー（C. Major）と呼ばれ、又彼の監察官としての峻嚴さの故に監察官カトー（C. Censorius）とも呼ばれてゐる。彼は前二三四年に、ラチウム州内の古都ツスクルム（Tusculum）に生れたがサビーニ州内なる父の農場に於て育てられた。先祖に就ては全く知られてゐないけれども、彼自身の語る所によれば、父は勇敢な武人らしき人であり、祖父も屢々戰功を立て、戰場に於て乘りつぶした五頭の馬に價する褒賞を以て、國家からその勇武を表彰せられたとのことである。羅馬人は、家柄の故ではなく自らの勳功によつて名聲を博した人々をば一般に「新人」（homo novus）と名づけることを慣習とし、カトーをも亦新人と呼んだ。併しカトーは、官職や名聲に於てこそ自分は新人であるが、それも實は遠き祖先の勳功と德とに負うてゐるのだと言つてゐた。彼の名は初めプリスクス（M. P. Priscus）であつたのを、後にその才幹の故にカトーと呼ばれたのである。それは羅馬人が賢明なることをカツス（catus）と呼んだことに由來してゐる。

前二一七年カトーは十七歳の若冠を以て初めて戰爭に出陣し、當時伊太利を荒し廻つてゐたハンニバルの軍と戰ひよく困苦缺乏に堪へて剛勇を顯はした。爾來この第二ポエニ戰役の間、屢々出征して戰功を立て、戰の閑暇にはサビーニの農場に歸つて、質朴な農耕生活に身を委ね、又附近の人々のために辯護士として無報酬で活動し辯論を修練した。

彼の近くに羅馬の勇將クーリウス・デンタートゥス（M. Curius Dentatus）が曾て住んでゐた小屋があつた。デンタートゥスはサビーニやサムニウムを征服し、エピルス王プユルルス（Pyrrhus）を放逐して、羅馬最大の偉勳を立てながら、而も自らこの小さき農場を耕しこの小屋に住んでゐたのである。曾てサムニムウの使者達がこの小屋を訪れたとき、主人は竈に身をかがめて蕪菁を煮てゐた。使者達は多額の金を提供せんとしたが、彼は「こんな食物で滿足してゐる人に金の必要はない」と言つて、使者達を返した。そして金を所有することよりも、金を所有せる人を征服することの方が遙かに立派な仕事であると考へてゐた。カトーは實にこの偉人デンタートゥスの舊跡を屢々訪ねて、これ等の感懷に心打たれ、自らの生活に於て勞働を愛し奇侈を斥ける念を强くしたのである。

ファビウス・マキシムス（Fabius Maximus）が、やはり第二ポエニ戰役中に於て、タレンツムを占領したとき（209 B. C.）カトーもその下に屬して從軍したが　個々プユタゴラス學派のネアルクス（Nearchus）といふ人に接しその教說を傾聽した。ネアルクスがプラトンの言葉を引用して、快樂は惡への最大の誘惑であると言ひ、肉體は精神の第一の障害であつて、精神は肉體的感覺から出來るだけ離脫することによりその害を免れ純化せられると說くのを聞いて、カトーは益々質素と克己とを愛する樣になつた。

扨てカトーの農場の隣りに、知名の貴族ワレリウス・フラックス（L. Valerius Flaccus）といふ人が農場を持つて居り、その人はカトーの召使達から主人の人と爲りを聞いて感服し、一日會食に招待してカトーのすぐれた素質を知り、羅馬に於て公的生活に入るべきことを說得した。かくしてカトーは羅馬に居を移し、先づ辯護士として知己を增し、やがてワレリウスに引立てられて次第に政界に進出して行つた。卽ち前二〇四年には「財務官」（quaestor）となり、スキピオ（Scipio Africanus）

に從つてシシリー島及びアフリカに出征した。この間にカトーはスキピオの奢侈浪費をいたく憤激し、羅馬に還つてからこれを元老院に告發して彈劾した。(羅馬への歸途彼はサルディニアに寄り、既述のエンニウスを伴つて來たと傳へられてゐる。)更に前一九九年には造營官(aedilis)となり、前一九八年には長官(praetor)となつてサルディニアを管轄し、質素を旨としてよくこれを治めた。前一九五年に恩人寄友たるフレリウスと共に統領(consul)となり、西班牙と戰つて大勝を獲、翌年羅馬に凱旋した。(この時戰場で使つた軍馬をば、國へ輸送するに要する國費を省くため彼地で賣却してしまつたことの如きは、彼の面目を示すに足る挿話である。)何前一九一年には統領アキリウス・グラブリオ(Acilius Glabrio)に從つて、ハンニバルの援護者アンティオコス(Antiochos)を希臘に破り、特にテルモピュライの戰勝に功を立てた。この後カトーは主として内政に活躍し、國粋的思想を持して、貴族達の間に漸く高まりつゝあつた希臘的奢侈を警め、スキピオ一家の排擊には殊に力を盡した。前一八四年に、貴族側の猛烈な反對にも拘らずフレリウスと共に監察官(censor)に選ばれるや、益々極端にその主義を實行し、後述の如き峻嚴なる監察方針と希臘的國風の排斥とを敢てした。晩年(その歿する前年)カトーは羅馬の使臣としてカルターゴに赴いた。それはカルターゴ人とヌミディアのマシニッサ(Masinissa)王との間の紛爭の原因を調査する目的であつたが、彼はこの時第二ポエニ戰役後のカルターゴが毫も疲弊の色を有せず却て豊物たる意氣を以て興隆しつゝある實狀を目擊し、羅馬に對するやがての脅威を痛感した。そして急遽歸國してこれを元老院に警告し、演壇に立つ度毎に、その演題の何たるを問はず、常に「カルターゴは滅ぼされねばならない」(Delenda est Carthago)といふ標語を以て聽子吼した。かくて彼は第三ポエニ戰役の空氣を國内に醸成せしめつゝ、前一四九年八十五歳を以て羅馬に歿したのである。

カトーの著述としては、羅馬の歴史を取扱つた『由來記』(Origines)、その息子への教訓を書いた『童子訓』(Praecepta ad filium)並びに『道德論』(Carmen de Moribus)、農家の生活に於ける諸方面の運營を論じた『田園生活論』(Scriptores Rei Rusticae)があり、又キケロによつて賞讃せられた百五十の演說を遺してゐる。(Cicero, Brut. 65)これ等の中『田園生活論』を除く外は何れも今日斷片を傳へてゐるに過ぎないけれども、吾々はそれ等の斷片を通じて、カトーが如何なる思想

と態度を以て、羅馬の古き國風を擁護し、新來の希臘的國風を排斥したか、又その子供の教育に於て如何にそれを具體化したかを窺ふことが出來るのである。

羅馬の國粹保存と希臘的國風の排斥　カトーは生粹の羅馬人的素質を具へ、質實剛健にして勤勞を愛し虛名を避け祖國への熱意ある關心を抱いてゐたのであるが、その身の榮達と共に、當時の上流社會に漸く浸潤しつゝあつた希臘的國風に接し、それとの對立によつて益々本來の性格を硬化して行つた觀がある。

プルタルコスの評傳によれば、カトーは雄辯に於て羅馬のデモステネースと呼ばれたけれども、併し彼に就て一層讃嘆せられたのはその生活態度であつた。蓋し雄辯家は既に先驅があり、その理想は青年達に取つて珍しくなかつたけれども、自ら耕し粗衣粗食に甘んじ、さゝやかなる住居に住み、生活に必要なるもの以上をば持ちもしなければ望みもしなかつた所の偉人は、實に珍しきものとして仰がれたからである。當時國土の膨脹と共に、樣々の風習や生活樣式が入つて來て、世の常人は或は勞苦によつて疲弊し、或は享樂によつて衰弱したのに對しカトーがその何れにも克ち、而も單に少壯血氣の間だけでなく、既に幾多の高官を勤め終つて老境に入つてからも尙その生活態度を變へなかつたのは、時人の感嘆を集めるに充分であつた。彼は實に卓越せる競技者の如く、不斷にその身を鍛錬し、最後までその心を變へなかつたのである。

自ら語る所によれば、彼は百ドラクメ(約四十圓)以上の價の衣服を用ひたることなく、長官や統領となつても奴隷と同樣の飲料を用ひた。魚や肉は三十アス(as)—一アスは約一錢—だけを市場から買つたが、それも彼が肉體を强健にして軍務に役立たせたいといふ奉公の精神からであつた。曾て刺繍のついたバビロニアの體服を人

から贈られたが、彼は直ちにこれを賣却した。又その住居は何れも壁が塗つてなかつた。彼の使用した奴隷は價額千五百ドラクメを超えることなく、美しい奴隷よりも寧ろ頑強な奴隷を選び、そして彼等が老齢で用に立たなくなると、無駄な養育費を使はないで、直ちに賣却した。使ひ馴らした家畜や軍馬と雖も不用となれば無情に賣り棄てたのである。一般に彼は買はずに濟ますことよりも安價なものはないと考へ、不必要なものは假令僅かの價額でも高價であると考へてゐた。かゝる生活態度はプルタルコスの批評してゐる如く、吝嗇又は冷酷とさへ思はれる程であつたが、而も彼はそれによつて國帑の支出を減じ收入を增さんとする愛國心を發揮したのである。故に治者としてのカトーは實に謹嚴恪勵そのものであつた。彼は曾て長官としてサルディニアを管轄してゐたとき、唯一人の奴隷を從へ徒歩で領内を巡察した。又常に自ら語る所によれば、彼は未明に起き出で、私事を全く放擲して、終日公事に盡瘁し、そのために反對者の怨嗟を招いたとのことである。そして又彼は、惡事を爲して罰を受けないことよりも、寧ろ善事を爲して報酬を受けないことを望み、且つ他人の過失はすべてこれを恕し、自らの過失は毫もこれを許さないと言つてゐた。併し彼が監察官として、一貴族マンリウスをば、白晝その娘の面前で妻に接吻した故を以て、放逐した如き事例を見れば、他人の罪過を責めるのに、如何に峻嚴であつたかを窺ふことが出來る。彼は國民の奢侈に對して重稅を課し、又冗談に、市場を尖つた石で敷きつめて怠惰な者共が寢ころぶことの出來ぬ樣にせよ、などゝ言つて、國民の懶惰遊逸を警めた。

かくの如きは實に勤勉實直なる羅馬本來の國風を最も極端に保持し發揚したものであるが、他方カトーは希臘文化の導入が、國民の奢侈逸樂の禍根であるとし、極力希臘風の排斥のために奮鬪した。彼は曾て希臘に出征

し、通譯を介してアテナイ人と話つたことがあつたが、その時彼の簡潔な言葉が冗長な希臘語に通譯せられるのを聞いて、アテナイ人が驚いたと言つてゐる。そして、又概して希臘人の言葉は口から出るが羅馬人の言葉は肺腑から出ると思はれたと彼は言つてゐる。前一五五年にアテナイは、アカデメイア學派のカルネアデース（Karneades）やストア學派のディオゲネース（Diogenes）等を使者として羅馬に遣はし、アテナイ人に與へられた或る不利な訴訟判決を取消されんことを乞うて來た。元老院がこの事件の決定に荏苒日を送つてゐる間に、彼等哲學者は羅馬人の狂熱的尊信を受けその雄辯に魅せられて青年達は彼等の講筵に雲集した。カトーはその狀態をいたく憤激し、元老院に向つて、早くこの事件を決定し、希臘哲學者をして速かに故國の學校に歸つて希臘の子弟を教へしめ、羅馬の青年をば舊來の通り國法と長官とに傾聽せしめよ、と警告した。カトーは哲學及び一般希臘文化を甚だしく嫌惡し、ソクラテスをば空論を弄び國風を破壞し國民をして國法に背かしめたものであると非難し、又イソクラテスの學校を嘲罵して、その學生は老年に至るまで政治學を學修し冥界に行つてからミノースの前でそれを論ずる積りであると揶揄した。かくて彼はその子を警めて、羅馬は希臘の文字に充されるときその國を失ふであらうとまで說いたのである。プルタルコスによれば、カトーは（希臘語を學び希臘語の書籍を讀んだのは晩年であるが）早くより希臘的教養を具へて居り、その演說に於て巧みにツキディデスやデモステネースを引用し、又彼の著述は希臘の物語や情調によつて修飾せられ、彼の唱道した格言や標語は希臘文學からの飜譯を多く含んでゐた。それにも拘らずカトーの思想と生活とは常に羅馬的精神によつて貫かれ、反希臘的愛國の志士として彼は史上に足跡を印したのである。

教育の實際及思想　監察官として羅馬國民の教育者であつたカトーは、よき夫、よき父として、家庭教育の最も典型的な指導者であり、治國の熱意にも劣らざる顧慮と才能とを以て齊家の事に盡力した。妻や子供を毆打する男は、彼の言ふ所によれば、神聖なるもの〻中の最も神聖なるものに暴力を加へるのである。そして又善良な夫は偉大なる元老よりも更に賞讃に値するものである。古のソクラテスに於て讃ふべき點は、そのロやかましき妻と愚鈍なる子供等とに對して優しく接したことに存する。

か〻る見解を抱けるカトーは、その息子の生れるや、公事の外には何事にもまさつて息子の教育に熱中し、妻が息子に入浴させたり襁褓を着せたりする時は必ず側に附添つてゐた。妻も亦賢母であつて、自ら子供を養育し、その奴隷の子供等にも我が子と同じく乳を與へて、彼等の間に同胞の親しみを感じさせる樣にした。息子が物心つく頃になるとカトーは自ら讀書を教へた。彼にはキローン（Chilon）といふ立派な教師が奴隷として屈はれてゐたが、彼は子供の教育の如き貴重なる仕事を奴隷に任せるに忍びなかつた。かくて彼は讀書のみならず、法律に於ても、體育に於ても、自ら子供の教師となつた。そして槍投・武器の操作・乘馬・拳闘等を練習せしめ、寒暑に堪へる鍛錬を施し、チベリス河の急湍渦流に泳ぐことを教へた。彼は又息子をして祖國の歴史を知らしめ、偉大なる先人の感化に浴さしめんとして自ら羅馬史即ち既述の『由來記』（Origines）を書き與へた。更に希臘學藝への感染を防ぐために、羅甸語を以て羅馬的精神に基ける『童子訓』（Praecepta ad Filium）を書き、健康法・農業・雄辯・軍事・法律諸般の事項を簡潔なる訓言に纒めて、子供に與へた。その訓言の多くはカトーの面目を反映する頑固偏狹なものであつたが、中には眞に傾聽すべき金言も含まれてゐた。「事柄を把握せよ、言葉はおのづから從はん」（Rem tene, verba sequentur）といふが如きはその一例である。又すぐれたる雄辯家の條件として、率直健全なる理解力、强固なる心情、迫力ある辯舌の才を擧げ、特に、善良なる人のみ眞の雄辯家たり得べきことを高調した。更に彼の『道德詩』（Carmen de Moribus）には例へば、吝嗇及び貪慾（avaritia）、未だ詩なく詩人なかりし古の堅實なる時代、人生は鐵の如く磨かざれば錆を生ずるといふ警喩などを含んでゐた。尙カトーには他の人々の金言名句を集めた『金言集』（Apphthegmata）の著があつたと言はれてゐる。

カトーの生活と思想とは、かくの如く謹嚴實直にして永遠の教訓を含めるものであつたから、彼の名を以て傳へられた諸々の訓言は、羅馬時代及び中世期を通じて、少青年並びに大人の讀物として廣く愛誦せられた。ハドリアヌス（Hadrianus, 117—138 P.）帝の時、羅馬國粹家肌の修辭學者にして偉大なる教育者たりしコルネーリウス・フロント（Cornelius Fronto）は、カトーの言行・功業を絶讃し、伊太利のすべての都市は彼の銅像を建つべきことを奬めた。羅馬のクィリーナーリス（Quirinalis）丘上なる國家守護の女神サルス（Salus）の神殿にはカトーの銅像が建てられ、次の如き文字が刻せられた。「カトーは惡に傾き沈む羅馬國家をば、適切なる救治策、賢明なる訓練と指導とによつて、再び起上らしめた。」これは實に彼の功績を最も明確に特色づけた言葉である。

カトーはかくの如く國粹的志士として、反希臘主義者として、政治に教育に畢生の奮闘を續けた。併し「荒野の說教者」に比すべき彼の熱烈なる教說も滔々たる時代の大勢を輓回することは出來ず、新しき希臘的國風は愈々羅馬の人心に浸潤して行くのであつた。そしてこの大勢に反抗する代りに、よくこれに乘じこれを利用して、時代の典型的人格と思想とを練成したのが、次に述ぶべきキケロである。

三　キケロ

その生涯　マルクス・ツルリウス・キケロ（Marcus Tullius Cicero）は前一〇六年に、ラチウム州内のアルピーヌム（Arpinum）市の近郊に生れた。母ヘルウィア（Helvia）は名門の賢夫人として有名であるが、父方の家柄については明かに知られてゐない。キケロといふ名は「埃及豆」（Cicer））を意味し、彼の先祖に、鼻の先が豆の裂目の如き窪みを有する人があつて、この名を得たのであらうと言はれてゐる。叔父のルキウス（Lucius C.）は雄辯家アントーニウス（M. Antonius）の友人であり、キケロ一門の中にも雄辯家があつた。キケロは弟のクィンツス（Quintus C.）と共に教育せられたが、この二人の兄弟の聰明好學の故に、父は羅馬に居を移し、其處で良師を選んで二子の教育を託した。その師の中で特に有名なのはアンティオケイア（Antiocheia）の詩人アルキアス（Archias）であつた。元服の後ト占者にして元老院の有力なる政客ムキウス・スカイウオラ（Q. Mucius Scaevola）に就て法律を學んだ。前八九年に統領ポンペイウス・ストラボ（Pompeius Strabo）に從つて伊太利諸市と戰つたのは彼の生涯を通じて唯一回の從軍であつた。かのマリウス（Marius）とスルラ（Sulla）との内亂の間にはキケロは何れの黨派にも屬せずして、專ら法律・哲學・雄辯術の研鑽に沒頭した。卽ち哲學をば當時羅馬に滯在せるエピクロス派のファイドロス（Phaidros）、アカデメイア派の領袖ピロン（Philon）及びストア派のディオドトス（Diodotos）に學び、雄辯術をばロドスより羅馬に來た使臣モローン（Molon）に就て學んだ。内亂がマリウス黨の勝利によつて平和に復するや、キケロは辯護士としてクィンツス其他の人々のために法廷に立ち、その雄辯と正義に對する熱意果敢の故に名聲と信望とを博した。併し間もなく前七九年に彼は希臘に渡つた。それは表面上は健康のためであつたが、事實は多分スルラ殘黨の復讐を恐れたからであらう。彼は先づアテーナイに六箇月を過し、アスカロンの人にしてアカデメイアの學者たりしアンティオコス（Antiochos）に哲學を、デーメートリオス（Demetrios）に雄辯術を學び、又生涯の親友ポンポーニウス・アティクス（Pomponius Atticus）を得た。それより小亞細亞に渡り、アドラミュッティオン（Adramytteion）のクセノクレー

ス（Xenokles）、マグネシア（Magnesia）のディオニュシオス（Dionysios）、カリア（Karia）のメニッポス（Menippos）等を訪ひ、つひにロドス（Rhodos）島に渡つて、先輩モローンの子なるアポローニオス（Apollonios）に雄辯術を學び・ポセイドーニオス（Poseidonios）に哲學を學んだ。この時アポローニオスは羅甸語を話らなかつたので、キケロに希臘語を以て演說すべきことを命じた。キケロはこの機會に自分の希臘語の缺點を矯正せられることを望んで熱心に演說した。居合せた人々はその巧みさに驚嘆して互に顏を見合せた。アポローニオスは默して深く物思ひに沈んでゐたがキケロがこれを憤つたのでやつと口を開いて叫んだ。「キケロよ！　余は實に汝を賞讃し驚嘆する。だが余は希臘の運命を憐む、何故ならば吾等希臘人に殘されたる唯一の名譽が一敎養と雄辯とが一汝によつて羅馬人等に奪らされるのだから。」と。キケロは希臘的敎養に於て實にかくの如く卓越し、一たびは故國の政治的煩累を厭つてアテーナイを墳墓の地と定めんとする底意さへも抱いてゐたのであるが、前七八年スルラが歿し、且つ故國の知己と希臘の恩師との熱心なる勸說があつたので、前七七年に羅馬に歸つた。回復せる健康と益々進歩せる雄辯の才能とを以つて彼は公共生活に進出し、前五七年にはシシリー島に財務官として赴き、翌年羅馬に歸り、それより、造營司、長官等の官職を經て、前六五年には統領となり、これより政界の中樞に活躍することゝなつた。彼は當初より民黨と閥族黨との何れにも偏せざる立場にあつたが、統領となつた後は、庶民側の革命を防止し國家を安泰ならしめるために自己を保守的閥族黨に結合し、ポンペイウス（Pompeius）をこの計畫に推薦せんとした。併しカイサル（Caesar）とクラッスス（Crassus）とポンペイウスとが第一回三頭政治を組織して（前六〇年）、元老院に對抗するや、キケロはこの三頭政治に好意を持ち得ず、從つて彼等の勢力に保護せられることも出來ずして、他方民黨の護民官クロヂウス（Clodius）と激しき反目に陷り、身の危險を感じて前五八年に羅馬を逃亡し、マケドニアのテッサロニケ（Thessalonike）市に身を寄せて、憂悲の日を送つた。翌五七年羅馬に於ける友人達の熱心なる召喚によつて彼は歸國した。前五二年に不本意ながらキリキアの統治者として赴任することを强ひられ、任地に於て國王の如くに振舞ひ、前五〇年羅馬に歸つた。時恰もカイサルとポンペイウスとの内訌が起り、彼はポンペイウスに味方して出征したこともあつたが、併しカイサルは彼に對して好意と尊敬とを失はなかつた。そしてキケロ自身も大部分はこの内訌の渦中から身を避けて、著作に精進し

た。然るに前四四年カイサルの暗殺後彼は再び政界に出てブルータス（Brutus）に味方し共和黨に屬して活躍し、後更にオクタウィアヌスに近づきアントニウスとオクタウィアヌスとの接近を妨止せんとしたが成らず、彼等の間に第二回三頭政治が成立するや、キケロはその敵として追捕を受けねばならなかつた。彼は危險を避けて諸方を逃げ廻つてゐたが、つひにラチウム州の海岸なるフォルミアイ（Formiae）市に於て追手の兵に殺された。時に前四三年、彼は六十四歳であつた。彼の頭と手とは切られて羅馬に運ばれ、アントニウスの命によつて市場の演壇に釘付けにせられた。

後年オクタウィアヌスがその娘の子供等を訪ねたとき、側々キケロの書物を持つてゐた一人の子供が恐れてそれを外套の下に隠さうとした。併しオクタウィヌスはその書物を手に取り、立所にその大部を讀破して、子供に返しながら、「子供よ、この人は賢い人だ、賢い人だ、愛國者だ。」と言つた。オクタウィヌスは又キケロの子を高官に登用し、更に彼の治下に於て元老院はアントニウスの銅像を撤回し、幾多の名譽を剝奪し、その一門が「マルクス」といふ羅馬人慣用の姓を用ひることを禁止した。これは實にキケロに對する羅馬國民の好意と尊敬とを反映するものである。

キケロは羅馬第一の思想家且つ雄辯家であつて、その著作は、雄辯術・政治學・倫理學・形而上學・神學等の各方面に亘り、更に各種の場合、各種の人々のためにせる辯論及び書翰を併せて實に浩瀚なるものである。それ等の中特に教育思想を窺ふに足るべき主要文獻は『國家』（De Republica）・『法律』（De Legibus）・『至高善と至高惡』（De Finibus Bonorum et Malorum）・『ツスクルムの論爭』（Tusculumae Disputationes）・『大カトー又は老齢』（Cato Maior sive De Senectute）・『ライリウス又は友情』（Laelius sive De Amicitia）・『義務』（De Officiis）・『神性』（De Natura Deorum）・『卜占』（De Divinatione）・『運命』（De Fato）・『考案』（De Inventione）・『雄辯家』（De Oratore）・『雄辯家ブルツスへ』（Ad M. Brutum Oratore）・『ブルツス又は名雄辯家』（Brutus sive De Claris Oratoribus）・『雄辯斷章』（De Partitione Oratoria）等である。但し今日に傳はるものは多くはこれ等各々の斷片に過ぎない。

羅馬の全體的特色　上述の如き生涯が明示する如く、キケロは羅馬人的性格を希臘人的教養によつて洗錬し、この

の兩文化の融合せられ行く時代相を躬ら體現せる者であつた。純粋の羅甸種族として生れ、羅馬風の堅實なる家庭教育を父母に受け長じて希臘學藝の各部門を夫々專門教師に就て學び、更に希臘及び小亞細亞に遊學し、歸つて祖國の政界に生命を堵して奮鬪し、而もその間の閑暇を各種學藝の研鑽と著作とに費した彼に於ては、羅馬人的なる實踐（プラクシス）と希臘人的なる觀照（テオリア）とが誠によく調和してゐた。それ故に彼は、羅馬國民によつて「愛國者」・「救世家」と讃へられたと共に、「自らの有する一切の人間的教養、特にも高等なる學問的並びに藝術的識見は希臘人に負うてゐる」と自白したのである。

キケロの思想家的業績は、主として修辭學と哲學と教育思想とに求められるのであるが、これ等何れの領域に於ても上述の希臘羅馬兩要素の融合が見られる。即ち第一に彼は羅馬第一の雄辯家・名文家として羅甸語散文修辭法の典型を遺し、今日に至るまで古典的羅甸語の代表者と仰がれてゐるのであるが、その語彙に修辭に引用句に彼は多くの希臘的要素を交へ、それによつて從來の卑俗なる羅甸語を洗錬し醇化し整頓したのである。第二に哲學者としての彼は希臘哲學の諸契機を攝取しながらこれを羅馬人的、實踐的要求より折衷した。從つて哲學史は何等の創見をも彼に歸する所がないのであるが、この事は偶々彼の本來の地位を語るものであり、延いては彼を有力なる一代表者とする羅馬哲學の全體的面目をも暗示するものと見なければならぬ。第三に彼の教育思想は、上述の修辭學者・哲學者としての彼の思想を教育の領域に具體化したものであるから、吾々は次に項を改めてこれを叙述し、それに於て上の第一・第二の點をも窺ふことにしたいと思ふ。

一般教育思想　キケロは教育の本質をば、人間先賦の素質の完成と觀た。そして人は萬物の靈長であり、人の精

神の最高機能は理性に存し、理性の完全なる實現が德であり、而してこの理性は注意深く發展せしめることを必要とするが故に、教育は人に於て特に重要である。人は自己を深く省みることによつて内に神的なるものを見出すであらう。これを自己に内在する神の姿と考へるとき、この貴重なる賜物を損ふが如き言行を慎まざるを得ない。換言すれば人は本來善への素質を潜在的に具へてゐるのであつて、それを教育によつて實現しさへすれば、善に導かれ幸福に到り得るのである。キケロにあつては、「幸福なる生活」(Beata vita) が人生最高の目的であり この「幸福なる生活に到るの途は德 (Virtus) そのもので充分であり」そして「人は哲學によつて善き强き人 (Vir bonus et fortis)(有德の人) とせられる。」こゝに彼が「哲學」と言ふのは理性の啓培に外ならぬが故に、理性の教育こそ人を有德即幸福に到らしめる所以であつて、この思想はまさしく希臘哲學を貫く根本原理である。

キケロは併し教育を以て單に個人の幸福の途とのみ考へることなく、それが同時に國家のためであると考へてゐた。「吾人は青年を教へ導くことより更に大なる若くは更によき奉仕を國家になし得るであらうか」(Quod enim munus rei publicae afferre maius miiusve possumus, quam si docemus atque erudimus iuventutem?) 特にも現時の道德的頽廢の故に迷路に陷らんとする我國の青年達を引留め正しき道に向はしめんが爲に異常の努力を要する時に當つては、(教育は一層重大なる報國の途である)。勿論この學問 (哲學) に向ふ者は少數に過ぎないかも知れぬ。併し少數でも結構だ。その人々の努力は國家に絶大なる影響を與へるであらうから。」キケロが哲學に關する著作に精進したのは實にかゝる教育報國の意圖に基くものであつて、これはプラトーン・アリストテレース等の希臘哲人の先蹤に倣へるものである。而も羅甸語を以て書いたのは、彼の告白によれば、羅馬人が希臘

語の哲學書から離れて哲學を修め得んがためであつて、こゝに彼の國粹思想が現れてゐるのである。

扨てすべての人々に共通に必要なことは、早くより善への萌芽を助長し、惡の根源たる感能的享樂を斷つことであつて、そのために最も重要な教科は宗教である。神への敬虔なる心情を培ひ、迷信を根絶して、よき傳統的信仰を國家のために維持しなければならぬ。「國家はその究極最高の基礎を宗教に置くが故に、國民は早くより、神々が萬物の支配者であり人生の利害の洞察者であることの信仰に導かれねばならぬ。それによつて人は愚かしき驕慢や罪惡から免れ、タレースの言へる如く、人の見る一切は神々に充たされてゐる、との敬虔な心情になるであらう。そしてそのときこそ人々は神殿に在る時の如き清淨な心を以て生活するであらう。

よき傳統的信仰の保持を主張したキケロは又羅馬の古き國法にも絶大の尊敬を拂つてゐた。「若し何人かゞ法律の資源を求めるならば、十二銅板法の唯一冊の書籍は、あらゆる哲學者の藏書にも優つて、權威と效益とを有するに相違ない。」彼はかく絶讃して、リュクルゴスやドラコンやソロンの法制に比べてそれが如何にすぐれてゐるかを說き、羅馬の先輩が法制的識見に於て希臘人その他のあらゆる國民にも優つてゐたことを誇り、法律の學修は辯論家たらんとする者の必須の要件であることを指摘してゐる。吾々はこゝにもキケロの國粹的思想を見るのである。

キケロは又兒童の心的發達について詳密に觀察し、これを前提として教育の任務を說いてゐる。即ち彼は先づ動物發達に一瞥を與へた後、人類の發達に推論し、「初生兒は極めて弱く殆んど精神を有せず、やがて僅かの力が生ずると手足と感覺とを練習し初め、立つことや手を動かすことを努め、又自分の養育者を認知する。それから

他の兒童等と交ることを喜び、遊戯を好み、物語を聞きたがる。又自分が餘計に持つてゐるものを他人に與へて喜び、家の内に見出す物事に好奇心を抱き、考へたり學んだりすることを始め、會ふ人々の名前を知りたがる。仲間と競爭しては勝利を誇り敗北に落膽する。そしてかゝる發達の各段階に於てあらゆる德への素質が見出され、その素質は格別の教授を要せずして、德の僅少なる模範によつて喚醒まされ、この内在的な種子がやがて德の芽を發し花を開くのである。即ち人は生れながらにして活動・勤勉・寛大・親切等の本能を有し、又認識・思慮・勇氣の素質並びにそれへの反對に對する嫌惡を具へてゐる。これ等の先天的能力よりして哲學者の理性の光も點ぜられ、この光を神的な導きとして進むとき、本然の目的に到達する。併し人が未熟で知的に幼稚な間は、吾人の本然の力は霞に蔽はれて明かでなく、長ずるに從つてそれを自覺し、且つそれ自らに於ては未だ不完全であつて教育により更に發展させねばならぬことを知るに至るのである。」かゝるが故に吾人は、アポロンの『吾等自らを知れ』(noscere nosmet ipsos) といふ言葉を實現するために、吾人の心身の諸能力を知りそれ等の全き實現に努力しなければならぬ。この全き自我の實現にこそ「至高善」(summum bonum) は存する。そして自我の完成は諸能力各々を完成することに外ならぬのであるが、但し肉體の完成は精神の完成の基礎としてのみ必要であつて、精神の價値に對する肉體の價値は太陽に對する星の如くに微々たるものである。因にキケロは希臘的體育をば全く非難し、その道德的弊害を好んで指摘してゐる。

キケロは又兒童に對する環境の重大性を考へ、環境の力によつて、正しき用語や思想の高貴なる表現さへも制約せられることを說いた。又賞罰の注意を述べて、すべての罰は、言葉によつてゞあれ行動によつてゞあれ、何

等の侮辱を含むべきではなく、又それは罪過に適應し、且つ同一の場合には同一の衡平さを以てなさるべきこと、又怒を以て罰することは中庸を失ひ易きが故に假令叱責の場合にも怒や不機嫌を混ずべきでないこと、そして叱責された者は、吾々叱責者が一層の苦痛と不快とを自ら忍びつゝも彼のために敢て叱責したのであることを知らねばならぬこと等を指示してゐる。

キケロは更に生徒に對して、その教師及び學校に感謝を捧ぐべきことを勸めてゐる。「吾人の中、立派な教育を受けたる者にして、その教育者、その教授者、指導者に對し、又その精神を培ひ養はれたる無心の場所に對して、内心深く感謝の思ひ出を有たざる者があり得ようか。」その感謝の念は特に國家に對する獻身的な愛によつて表現されねばならぬ。換言すれば人は國家のために教育せらるべく、祖國が吾々國民を生み教育するのは、吾々が何等祖國への奉仕をなさずして自己の安逸を求め世上の煩累から逃避して安靜に暮すためではなく、寧ろ精神と才幹と識見との最大多數を祖國の利益のために要求し、その剩餘だけを吾々個人の私用に供せしめるためである。それ故に吾人は國家を益するに足る學藝を學ばねばならぬ、それが智の最大の仕事であり、德の最大の顯現最高の活動であるから。

キケロは名譽心をば教育の主要動力として尊重し、それを善への本質的動因と考へた。國家はその法制に於て、國民が懲罰の恐怖によつてよりも寧ろ名譽心によつて惡から遠ざかる樣に工夫しなければならぬ。既に兒童に於て、その遊戯は人間性を示現するのであるが、名譽心は最も有力有效に働いてゐる。この心情はあらゆる手段を以て涵養促進せらるべく、而も單に青少年期に於てのみならず、成人期に於ても、善への最も强き刺戟であ

り、惡に對する最も忠實なる防禦者である。

キケロは羅馬の思想家中特に教育に於ける個性の尊重を力說した人である。而も彼によれば、子弟は各自が、自らの素質を內省吟味し、自己の長短の最も嚴しき裁判官とならねばならぬ。この事は少青年期にあつては就中重要である。蓋しこの時期は模倣性に富み、又師長の尊重する所に傾き赴くからである。

最後にキケロによれば、青年期の最大の危險は性慾及び感能的傾向に存するが故に、教育者はこの點には特に注意を拂はねばならぬ。そして享樂に對しては心身を武裝せしむべく、そのためにはあらゆる軟教育を排して硬教育を施し、心身の勞作をすゝめ、本然の羞恥心・名譽心を涵養すべきである。假令青年が勞苦の休養として享樂を求める場合にもその度を過さぬ樣に注意し、且つ常に禮儀を守り、他人の批評を眼中に置かねばならぬ。

辯論學教育論　以上はキケロに於ける一般的教育思想の要點であるが、彼は辯論家の養成に就ては特に論を成してゐる。辯論家は羅馬に於ては、論客・政客として法廷や議場に活躍する人である外に、教師であり著作家であり牧師でもあつて、一般國民の齊しく憧憬せる理想人であり、キケロの言へる如く、「羅馬が世界の大國家となり平和が實らさせれたる後は、功名の野心ある青年にして、辯論術の達成に一切の努力を傾けんことを考へざる者は殆んどなきに至つた。」特にキケロにあつては、眞の雄辯家は卽ち眞の有德者であるが故に、彼の辯論家教育論は一般教育思想を特に羅馬の當時の國情に照して具體化せるものと解し得べく、從つて羅馬的なる教育の理想と內容と方法とを見る上に頗る重要性を有するものである。

キケロによれば、將來の辯論家に必要なるものは、先天的なる素質及び才幹と基本的教養とである。就中主たる條件は豐富なる素質である。「青年がその音聲・容姿・動作其他の性質に於て辯論家たるに適してゐさへすれば彼が多少性急な又餘りに熱烈過ぎる口調・話し振りを有つてゐても、余は敢て彼を拒ばまない。余は豐富な精神力を感ぜさせる樣な、……そして多少それを剪り詰める餘地のある樣な青年を好むのであるから。そして余は青年が同時にすぐれた善良な人である場合にのみ、辯論術の修養に熱中すべきことを勸め、若し如何に努力しても中等程度の力しか發揮し得ない青年に對しては寧ろ方向を他に轉ぜんことを望むのである。

第二に併し、先天的なる素質及び才幹を有する者も、その準備時代に於て普く基本的教養を積むことが必要である。何故ならば有爲の辯論家たるべき者は、辨證論者の鋭さ、哲學者の豐富な知識、詩人の表現法、法律家の記憶力、名俳優の音聲・身振等を具へてゐなければならぬからである。そして辯論家たるべき者は不斷に辯舌そのものを練習する必要がある。「人はよく語ることによつて、よき語り手となり」「わるく語ることによつて、必ずわるき語り手となる。」故にキケロは、卽席演說をも尊重はしたが、併し充分に準備して演壇に立つことの方が一層よいとした。特に筆に書くことをば、內容を精細に知り、構想を周到にし、用語を適確巧妙ならしめること等のために最も有益なる準備として奬めた。「書くことは辯論家に取つて最もよき示範者であり教師である。」尙キケロは希臘の名詩・卓論を學んだり、それ等を羅甸語に譯したりすることが、雄辯術の修練に有效であることも告白してゐる。

次に辯論家はその語るべき內容に就て知識を有たねばならぬ。「知識なくしては如何に流暢なる言葉も空虛であり滑稽である。」この見地よりキケロは辯論家が、歷史を學び特に羅馬古來の法制や慣習に通曉すべきこと、哲學

の各部門に亘つての知識、特に實踐哲學即ち人間生活に關する知識を有すべきことを說いてゐる。併し哲學者の有する知識の外に、辯論家は人間のあらゆる性情とそれを動かす原因とに關する知識を必要とする。換言すれば辯論家は單に自らが知識を有するのみでなく、その知識を他人に向つて有效に働かしめねばならぬが故に、人間の感情や理解力を知り、且つ憤怒や悲哀や憎惡等を起さしめ又それ等を反對の心情に轉ぜしむべき原因を知らねばならぬ。勿論これ等の知識は哲學者も有するものであり、その他あらゆる知識に於て哲學者と辯論家とは異なる筈はないのであるが、唯その知識を得る目的が兩者に於て異なるのである。即ち哲學者は自己一身の閑暇を樂しく過すために知識を追求し、雄辯家は人を感化感動せしめ、國家を益するために知識を獲得し活用するのである。キケロのこの見解は、希臘末期の哲學者と本來の羅馬人的面目との對比をよく指示せるものである。

かくて結局辯論家の本領は知識を具へて且つそれを表現する修練を積むことである。ソクラテスが「すべての人は自ら知れる事に關しては雄辯家である。」と言つたが、キケロによればこの言葉は未だ眞を盡して居らない。勿論知識は必須條件ではあるが、併しそれを表現する言葉を如何に整へ磨くべきかを知らなければ、眞の雄辯家になり得ないのである。ソクラテスの言葉は、空虛なる辯論を弄ぶ當時の所謂ソフィステス達への警告であるが、キケロの批評は偶々ソフステス的雄辯家とキケロ的雄辯家との相違を指示してゐる。

因にキケロは雄辯家の基本的修養として前述の如く歷史や哲學を勸めながら、政治學に對しては青年がこれに關與することに反對した。即ち青年が政界の動きに心を動かされ、徒らに功名榮達に憧れて精神を損ふことを惧れた彼は、政治學をば、既に充分圓熟せる精神と性格とを前提とする學科と考へ、それは賢人大市民にして殆んど神的なる人の仕事であるとしてゐる。

辯論家の陶冶理想と陶冶內容とによつて具體化せられたキケロの敎育思想は、その後紀元第一世紀にはクィンチリアヌス（Quintilianus）によつて繼承せられ、第四世紀にはラクタンチウス（Lactantius）、第十二世紀にはサリスベリー（Salisbury）、第十四世紀にはペトラルカ（Petrarca）、第十六世紀にはエラスムス（Erasmus）によつて夫々復活顯揚せられた。殊にペトラルカやエラスムスを機緣とする人文主義運動の進展は勢の趨く所つひに十五六世紀の敎育的關心をして專らキケロの模倣に集中せしめ、所謂「キケロ主義」（Ciceronianism）を現出せしめるに到つた。キケロの敎育史上に於ける重要性は、かくして兩後の敎育史を通じて屢々想起せられるであらう。

四　ワルロ

その生涯　マルクス・テレンチウス・ワルロ（Marcus Terentius Varro）は前一一六年にサビーニ州の古都レアーテ（Reate）に生れた。初め羅馬の文法敎師アイリウス・スチロ（L. Aelius Stilo）に就て學び、後はアカデメイアの哲學者アンチオコス（Antiochos）を師とした。これ等の師は何れもキケロの師でもあり、キケロとワルロとは友人であつた。ワルロは海軍の司令官として戰功があり、又ポンペイウスの副官・代將として西班牙に出征したが、カイサルがポンペイウスを亡ぼすに及んで、彼は部下の軍をカイサルに讓り、自らは希臘に渡つて暫時滯在し、後カイサルに許されて、書籍の蒐集整理の監督者として使はれた。この後彼は蟄居して文筆に親んでゐたが、やがて第二四三頭政治の出現と共に彼の生命は危險に瀕したので暫時逃亡して身を隱し、後オクタウィアヌスに保護せられ、財產の大部分も回收することを得たが、その浩瀚なる著書は殆んど湮滅に歸した。晩年は平安の中に研究を續け、前二八年八十九歲を以て歿した。

彼は羅馬第一の博學者と言はれ、その著書も七十四部六百二十卷に上つたと言はれてゐるが、今日その一部の傳はれるものゝ中主なるものは、『田園生活論』(De Re Rustica)・『羅甸語論』(De Lingua Latina)・『學科論』(Disciplinae)・『兒童教育論』(Catus de Liberis Educ ndis)・『諷刺詩』(Saturae) 等である。

教育思想　ワルロは或意味に於てカトーとキケロを綜合せるが如き地位に立つてゐる。即ち一方に彼はカトーの如き謹嚴率直なる性格を以て古の良風時代を慕ひ、あらゆる方面に眞の羅馬的なものを求めながら、他方にはキケロの如く希臘の學藝を愛好し、希臘に關する博學多識をその著述に於て實證した。カトーが監察官として又著作家として當代の道德的頽廢と戰つた如く、ワルロは鋭き諷刺を以て當代の弊風を酷評し、その改善に努力した。彼の『諷刺詩』は實に古の羅馬の質朴敬虔なる國風の讃美と當代の墮落の攻擊とに充たされ、又婦人の間にまで浸潤せる虛榮奢侈の大勢に對立して、田園生活の單純さと善美さとがそこに描かれてゐる。

兒童教育に關する著書『兒童教育論』は、嚴肅愼重な教育家が、硬軟中庸の立場に立つて述べた教育思想を盛り、又環境や交友が兒童に與へる影響に就ての警告、女子に對する救護の勸奬等を含んでゐる。學校の教授科目に就ては、『學科論』九卷に九自由科即ち文法 (Grammatica)・辨證法 (Dialectica)・修辭學 (Rhetorica)・幾何學 (Geometria)・算術 (Arithmetica)・星學 (Astrologia)・音學 (Musica)・醫學 (Medicina)・建築學 (Architectura) の各々に亙つて百科全書的に述べてあり、これは中世期に擬出したこの種の書物の原型となつた。これ等の學科目を學校の教科とすることに於て、ワルロその人が假令羅馬人的性格を保持したとしても、時代の大勢は既に羅馬の希臘化に向つて滔々と進みつゝあつたことを、窺ひ得るであらう。

第二章　帝政時代の教育

第一節　帝政時代の國風と教育事實

アウグスツスの治世と羅馬黃金時代　ユーリウス・カイサル (Julius Caesar, 100—44 B. C.) の偉業を繼ぎ、その歿後の紛亂を平定したオクターウイアーヌス (Octavianus) は、既に長く共和政治の誇りに慣れて來た羅馬の民心を洞察して、自らは國王 (Rex) とか獨裁官 (Dictator) とかの稱號を避けて、唯軍の總帥たるイムペラートル (Imperator) の名のみを用ひてゐたが、上下の信望と全政權とは事實上その手に獨占せられ、元老院は從來神々に對してのみ獻ぜられた尊嚴者 (Augustus) の尊號を彼に奉つた。これより羅馬は、外形上共和政體を繼續しながら、實質的には帝政となり、西羅馬帝國の滅亡まで約五百年間、史家の所謂羅馬帝政時代(31B.C.—476 A. D.) を現出するに至つたのである。

アウグスツスの治世は (31B.C.—14A. D.) アテナイのペリクレス時代に比すべき羅馬黃金期であつて、これまで外戰內亂に費された國民の關心と精力とは、今や平和生活の醇化と向上とに向けられ、文運鼓ひ起つて、羅馬文化をその頂點にまで導いた。アウグスツス自らは、その腹臣の將相マイケーナース (Maecenas) と共に、大いに文藝を保護勸奬し、詩人ウェルギリウス (P. Vergilius Maro)・ホラーチウス (Q. Horatius)・オウィディウス (P. Ovidius Naso)・史家リーウィウス (T. Livius Patavinus) 等は何れもこの時期に輩出した。蓋し共和政治の實質的滅亡を慨く人士はその鬱憤を文藝に於て晴さんとし、一方アウグスツス帝はそれが自己への反感を轉

向せしめるに便利であることを知つて、益々文運を促進したのである。帝はまた當時漸く勃興しつゝあつた圖書蒐集の熱に乘じて、オクタウィア圖書館（Porticus Octaviae にあり）及びパラーチーナ圖書館（Palatinus の寺院にあり）を建設した。更に又帝は首都羅馬の美化に盡力し、寺院や劇場や浴場をば、世界に跨がる大版圖の各地より集めたる大理石や黄金を以て眩ゆきばかりに美裝せしめた。かくて「その承けたる瓦の羅馬を大理石の都市として遺した」といふ帝の豪語は決して單なる豪語ではなく、又セネカが世界を一家の如くに考へる當代の人々の感懐を述べ、プルタルコスが羅馬をば世界を平和の港に繋ぐ錨と名づけたのも至當の表現であつた。

國風の頽廢と教育の大勢　アウグスツス以後約二百年間は、所謂五賢帝卽ちネルウァ（Nerva, R. 96—99）トラヤヌス（Trajanus, R. 98—117）ハドリヤヌス（Hadrianus, R. 117—138）、アントニウス・ピウス（Antonius Pius, R. 138—161）、マルクス・アウレリウス（Marcus Aurelius, R. 161—180）の如き名君が相繼ぎ、外征に內治に偉績を擧げて、羅馬帝政の極盛期を示した。而もまた凌落の素因はこの極盛の藭に醸されつゝあつたのである。卽ち既にして敵國・外患なき强大なる國內には享樂・奢侈・殘忍の風潮が滔々として流れ充ちた。そこでは家庭教育が先づ頽廢して、不品行・自由結婚・離婚が一般に行はれ、父母の惡感化は子女の童心を汚損し、童僕及び家庭教師は阿諛・利慾のみを念として教育の誠心熱意を缺き、かくて羅馬的なる情意の陶冶に久しき地盤となり來れる家庭教育がつひに崩壞したのである。更に社會の大衆は低劣なる快樂に陶醉し、猛獸や劍客の爭鬪殺戮が日夜觀衆を狂喜させ、厖大なる版圖に信仰は雜然と入亂れ、世界を家とする人々に個人主義的傾向は益々浸潤して、社會は今や往年の堅實なる教育的機能を全く失墜した。この間にあつて唯學校教育のみは歴代帝王の積極的保護

勸奬により頗る發達したけれども、それさへも知育を主とせるものであつて、この主知的傾向が偶々衰へ行く國運を反映してゐたのである。かくの如きは國風の大勢であると同時に國民教育そのものゝ大勢であつて、吾々は次にこの教育的趨勢をば、家庭教育、社會教育及び學校教育の各方面に互つて稍々詳細に敍述しなければならぬ。

家庭教育の頽廢　帝政時代の道德的頽廢は先づ家庭生活の破壞に於て現はれた。そして家庭の中心たる母親達は往時のマートローナ（Matrona）の威嚴を棄てゝ今や家政と育兒とを奴隷の手に放任し、自らは美粧と興行見物と戀愛とに熱中した。古來の嚴肅な宗教的結婚式（Confarreatio）は稀になつて、自由結婚が普く行はれ、不義と離婚とは日常の茶飯事となつてしまつた。中には二十度も結婚した婦人があつたと傳へられてゐる。勿論婦人の墮落は反面に於て男子の墮落をも意味するものであり、兩親のかゝる頽廢的生活が子女に與へた惡感化に就ては殆んど想像に餘りあるであらう。更に又童僕及び家庭教師の腐敗も子女の童心を汚損する主要原因であつた。彼等は唯報酬のみを念頭に置いて、子供にも主人にも甘言と阿諛と卑屈とを以て仕へ、純眞なる好學心と眞摯なる教育熱とは彼等の態度の何處にも見出されなかつたのである。

社會風教の頽廢　帝政時代の羅馬社會の墮落を證明する第一の事象は流血の慘事に狂喜する殘忍の風潮であつた。羅馬人に取つては、人間が或は人間と戰ひ或は猛獸と鬪つて死んで行くのを觀ることが最大の快樂であつたのである。アウグスツス帝の時既に劍客（gladiator）の鬪技が流行し、帝は一日に百二十人以上の人間が相鬪ふことを禁止したが、それも無效であり、トラヤヌス帝は一萬人の奴隷を鬪技場に上らしめた。猛獸を相手とする鬪技にも、ポンペイウスの時既に六百頭の獅子が、アウグスツス帝の時四百二十頭の象が使用せられ、

チトゥス（Titus）帝は一日に五千頭の猛獣を殺した。而も觀客は人間よりも猛獣の方に聲援し、人間の流血を最も好んだ。貧しい男が闘士の鮮やかな一撃の下に殺され、その屍體が運び去られて行くのを觀衆は亂舞して見送り、又死に瀕して生命を乞うてゐる男に對し、觀客席の一婦人は寶石に飾られた腕を差し伸ばして、その乞を拒絶し、彼に殺さるべきことを命じた。時には又三十隻の船を海上に戰はせて觀衆がこれを狂喜し、その戰の愈々激しくその犧牲の愈々多數なるに從つて大衆は益々陶酔したのである。

かくの如き殘忍なる享樂と結合して奢侈浪費の風潮が昂じて行つた。例へば辯論家ホルテンシウス（Q. Hortensius Hortalus, 114—50 B.C.）はその庭の樹木に葡萄酒を注がせ、皇帝ウィテルリウス（Vitellius, R. 69 A.D.）は毎日四回の大饗宴を催し、而もその第二回目以後は（當時の風習に從つて）嘔吐劑をも用意して置いた。

更に帝政時代の宗教も決して健全なものではなく、世界を併呑した大帝國は渾沌雜然たる信仰をも併せ取らねばならなかつた。かくて羅馬在來の國民的信仰の外に希臘の神々を始めとして、埃及のイーシス（Isis）・セラーピス（Serapis）、フェニキアのベール（Baal）・アスタルテ（Astarte）、波斯のミトラス（Mithras）、猶太のエホバ（Jehova）等の諸神が信仰せられ、皇帝セウェルス（Aurelius Alexander Severus, R. 222—284）の如きは、自邸の禮拜堂にあらゆる宗教の開祖を合祀し從つて例へば、希臘の神オルプェウス（Orpheus）やピュタゴラス派の哲人アポローニオス（Apollonios Tyneios）がアブラハム（Abraham）や基督と共に祀られるといふ奇觀を現出した。かゝる信仰の混亂時代にあつて、有識階級の人士は、或はそれ等の統一的把握に惱み、或は端的に信仰一般に背を向け、無智の民衆は信仰の矛盾をも意に介せず、迷信との區別をも顧慮することなく、唯自己に好都合なる考

へ方に於て雜然たる信仰をその儘に受容れた。この淺薄安逸なる態度が堅實なる道德生活の保障となり得ざることは自明であつて、羅馬の信仰の混亂はそのまゝ國風の頽廢の結果でもあり原因でもあつたのである。

圖書館の發達　以上の如き家庭教育の破壞、社會風教の頽廢によつて情意の陶冶が衰へ行くことに反比例して、人々は知識による救濟を求め、知育のみは異常の進展を齎らした。その現れとして先づ見るべきは圖書館の發達である。既にカイサル及びアウグスツスの親友たりしアシニウス・ポルリオ（C. Asinius Pollio）は、カイサルの意圖を承けて、アェウンチーヌス（Aventinus）丘上なる自由の女神リーベルタス（Libertas）の社殿に圖書館を創設し、希臘及び羅甸の文獻を蒐集した。既述のアウグスツスのオクタウィア及びパラーチーナ兩圖書館はこの例に倣へるものである。更にトラヤヌス帝はウルピア（Ulpia）圖書館を、コンスタンチーヌス大帝（Constantinus, R. 306—337）はユーリア（Julia）圖書館を建立し、紀元第四世紀には羅馬市内だけでも二十八の公立圖書館が出來た。これ等は一面歴代皇帝の好學心に因ると共に、又政策的意味も含まつてゐた。それほど國民一般の知識欲は增進し、私人も有產者は圖書館を設けて自己の氣品を誇る風があつた。かくて圖書館は、宮殿に於ても別莊に於ても浴場に於ても、その主なる裝飾施設となつたのである。

教育制度の發達　國民知育の勃興は教育機關の設備改善と教師の地位の向上とを促し、歴代の帝王はこの點に關しても亦積極的に盡力した。即ち先づウェスパシアーヌス（Vespasianus, R. 69—79）帝が教師の生活條件の改善に意を用ひ、羅甸語及び希臘語の修辭學校教師に對し年々國庫補助金を給した。又トラヤヌス帝は貧兒の教育に留意し、且つ屬領に於ける學校教育の發達に盡力した。ハドリアヌス帝は自らも學者であつたが、アテナイウム

(Athenaeum) といふ高等程度の學園をば、ユピテルの社殿カピトーリウム (Capitolium) に起し、修辭學者や詩人をして其處に講演教授せしめた。そして任を終へた老學者には恩給を與へ租稅を免除した。次でアントニウス・ピウス帝もアウディトリア (Auditoria) と稱する宮廷學校を建てゝ子弟の教育を圖り、又全國の修辭教師及び哲學教師に恩給と名譽の地位とを與へた。マルクス・アウレリウス帝も亦當時國庫の窮乏にも拘らず、アテナイの哲學學校の教師並びに修辭學校教師に對する恩給を定めた。アレクサンデル・セウェルス (Aurelius Alexander Severus, R. 222—234) 帝は更に羅馬に修辭學・文法・醫學・數學・機械學・建築學の寄附講座を新設し、且つ貧學生に對する奬學費を規定した。ディオクレチアーヌス (Diocletianus, R. 284—305) 帝は三〇一年の布告により全國教員の俸給を統制して授業料の昂騰を防止した。つひにコンスタンチーヌス大帝は、從前より行はれてゐた教員の特權、即ち公役免除・裁判特例・國庫給受領の三特權を確立するに至つた。

教師の資格檢定制度も亦右の諸制度と並行して發達した。即ち從來は前任者が後任者を推擧することに一任してあつたのを、マルクス・アウレリウス帝の時初めて最も卓越せる人々より成れる檢定委員會に於て教師候補者を嚴重に試驗することゝなつた。然るにこの制度もやがて衰へて教師の資質が低下したので、ユリアーヌス (Julianus, R. 361—363) 帝は再び教員檢定制度を布告した。その檢定規定によれば「教師たるべきものは、先づその品性に於て、第二にその辯舌に於て、卓越してゐなければならぬ。自分は自ら各町村に出張して親しく各人に接する事能はざるが故に玆に令して告げるのであるが、教鞭を執らんとする者は輕卒にこの職に身を委ねることなく、官廳 (ordo) の認可を受け、第一流の人々の委員會 (curiales optimi) の承認を經ることを要する。」こ

れを以て見ても、教師の資質の吟味を重要視した當時の教育的關心を覗ひ得るのである。

初等教育及び中等教育　初等學校の內容は共和時代と同じく讀み書き及び計算であつた。希臘語の教科書として『學習會話』(Colloquia Scholastica) があり、教師又は優等生がこれを範讀し他の生徒がそれに倣つて讀んだものと思はれる。又速記 (tachygraphia) も帝政時代には普く行はれ、そのために特別の「速記者」(notarius) に就て學んだ。中等學校の內容は共和時代よりも遙かに廣汎になつた。クィンチリアーヌスによれば、中等教師たる「文法教師」の職分は、先づ「正しく話すことの知能」(recte loquendi scientia) と「詩の解說」(poetarum enarratio) とを授け、次に各種の普通學科を教へることであつた。教材として最も多く用ひられたのはホメロスの詩で、それはすべての解釋及び批評の出發點であり、文法の基礎であり、學校生活そのものゝ諸方面もそれに結合して說かれた。ホメロスに次いではウェルギリウスの作品が用ひられ、キケロの作品も亦行はれた。補助學科として神話が教へられる事も益々盛になり、それはやがて歷史教授の前階でもあつた。即ちストラボ (Strabo, 54 B.C.—24 A.D.) の言へる如く年少兒童は神話によつて好奇心、知識欲を開發せしめられ、長じては現實の物語 (歷史) を學ぶのが至當とせられたのである。而して神話の教科書としてヒーギーヌス (C. Julius Hyginus, 64 B.D.) の作と傳へられてゐる『物語本』(Fabularum Liber) が廣く行はれ、歷史の教科書としては希臘の學者デキシッポス (Herennius Dexippus, c. 210—273) の史書が多く用ひられた。ハドリアヌス帝の時フロールス (Florus) が、羅馬建國よりアウグスツスに至る迄の羅馬史を書いたが、その簡潔さと修辭の巧みさとによつて、中世期に至るまでも愛讀せられた。又東羅馬帝國のウァレンス (Valens, R. 314—378) 帝の治下に於てエウトロピ

ウス（Eutropius）が、羅馬建國よりウァレンス帝に至るまでの羅馬史綱要を十卷に著述したものは最も多く使用せられた。更に史實の記憶に便するため詩の形に叙述することも行はれ、詩人アウソニウス（Ausonius, c. 310—390）がエラガバルス（Elagabalus, R. 218—222）帝に至るまでの歴代帝王の歴史を六脚韻の詩に詠じたのはこのためであつた。尙地理教授に於ては、第三世紀の地理學者ソリーヌス（C. Julius Solinus）の著作『事物備忘錄』（Collectanea Rerum Memorabilium）が最も多く用ひられた。

教授方法に關して先づ注目すべきは、教科書の普及の未だ充分ならざりし時代に於て、教師が自ら「筆記」（dictata）を作り、これを生徒に暗誦せしめることである。次に直觀教授の重要性も既に知られ、神話や歴史地理の內容を繪畫に示すことが行はれた。ホメロスの詩の教授にテオドーロス（Theodoros）の『イリアの圖繪』（Tabula Iliaca）が用ひられ、歴史書に戰爭の圖とそれを說明する希臘文字とが並べ記されてゐたことの如きは、その例である。地理教授に地圖を用ひることも行はれ既にアグリッパ（M. Vipsanius Agrippa, 63—12 B.C.）が世界地圖の作製を準備し、アウグスツスがこれを完成せしめたが、この大地圖に倣つて、學校用の部分的地圖が多數に作られた。羅馬帝國內の各屬領の自然及び人事を記した『旅行地圖』（Itinerarium Pictum）も行はれた。

教養階級の資格としての希臘語の重要性は帝政時代に入つて益々加はり、クィンチリアーヌスの如きは、後述の如く、羅甸語に先立つて希臘語を教授すべきことを說いた。この希臘語及び羅甸語の教科としての文法（grammatica）の外に音樂（musica）・幾何（geometria）・算術（arithmetica）・天文（astronomia）・修辭學（rhetorica）・辨證法（dialectica）を加へた七科が所謂「七自由科」（septem artes liberales）として、高等教育の豫備課程たる

中等教科に確立したのもこの時代である。

因に當時の羅甸文法書にして後世長く行はれたものは、羅馬のドナーツス（Donatus, c. 355）の文法書三卷（Ars Gramatica tribus libris comprehensa）と、コンスタンチノープルのプリスキアーヌス（Priscianus, 6th cent. A.D.）の文法書十八卷（Commentariorum Libri XVIII.）とである。

高等教育　七自由科による豫備的教養を獲得せる者は進んで高等教育を受けたのであるが、將來政界に活躍せんとする青年は先づ修辭學校に學んだ。修辭學校の教授は理論的及び實際的の兩面に分れてゐた。理論的方面に於ては、修辭教師が或は教科書により或は講義筆記によつて雄辯術の理論を講述した。そして講述內容は希臘並びに羅馬の有名なる詩人・歴史家・哲學者・辯論家等の作品に結合して行はれた。次に實際的方面に於ては、先づ文筆による表現を練習させ、その題材も初めは傳說・物語（例へばロームルスが狼に哺乳させられた話など）に就てそれの反駁（anaskene）と證明（kataskene）とを行はしめ、やがて偉人を讃嘆し低劣なる人物を非難する論文や、人物の比較論評を試みさせた。更に多數の學生が德や不德の「共通の題目」（loci communes）に就て論述することが行はれ、最後に個々の具體的問題（例へば都會と田舍と何れが住みよきか、軍人と法律家と何れが好ましきか等）に關する論文が練習せられた。次に口述の演習も易より難に漸進的に課せられ、初めは或る事件に關して人を諫止し若くは勸奬するための「說得演說」（declamationes suasoriae）が練習させられ、更に或る事件に關する彈劾及び辯護の「論爭」（controversiae）が修練させられた。而して辯論術の最高の段階は「卽席に演說すること」（extempore dicere）であつた。是等各種の演說は學生に行はせると共に、教師自らも實演して模範を

示したのである。

修辭學校は併しながら、一面には時代精神の墮落と共に辯論の形式のみが尊重されて內容が閑却せられたことにより、他面には功利名聲を目的として諸國を遍歷するソフィステス的辯論家の橫行によつて、紀元第二三世紀頃より次第に墮落して行つた。

修辭學校の課程を修了したる者は更に哲學學校で學んだ。その敎科目は論理學(logica)・辨證法(dialectica)・數學(mathematica)・物理學(physica)等を含んでゐたが、就中主要なるは倫理學(ethica)であり、そしてストア學派の思想が最も優勢であつた。併し概して帝政時代の哲學には何等の獨創はなく、折衷的通俗哲學の特色を帶びてゐた。プラトンの傳統を繼げるアカデメイア學派も、アリストテレスの衣鉢を承けたる逍遙學派も傳承的古典の註解傳達以外には何等の新機軸も出さなかつた。但し哲學學校及び哲學者に對する外的條件は、歷代帝王の保護政策と有志者の好意とによつて大いに惠まれてゐた。卽ち學校や講座が增設寄附されたものが多く、個人としても優遇された學者が少くなかつた。アウグスツス帝に於けるアテーノドーロス(Athenodoros)、チトゥス帝に於けるムーソーニウス(Musonius)、ネルウァ帝及びトラヤヌス帝に於けるディオ・クリソストムス(Dio Chrysostomus)、マルクス・アウレリウス帝に於けるルスチクス(Q. Junius Rusticus)、チベリウス帝に於けるトラシロス(Thrasylos)等はその例である。

修辭學や哲學が希臘よりの輸入傳承に過ぎなかつたのに對して、法律學だけは羅馬人の天才によつて獨自の發展を遂げた。共和時代には法律學は修辭學よりも地位が低く政治や裁判に就ての有力な活躍者は辯論家であつた

が、帝政時代に入つてはその位置を顚倒して法律家が辯論家の上に立ち法律學の專門的修養は今や有爲の人物の必須の資格となつて來た。こゝに學としての法律學の發達が促されたのである。アウグスツス帝の下に、アンチスチウス・ラベオ(M. Antistius Labeo)は公法及び私法に關し、アテイウス・カピト(C. Ateius Capito)は私法に關して、夫々權威となつてその發達に貢獻し、この兩權威はやがて羅馬に法律の二大學派を起らしめた。卽ちカピトの學派は既往の法律・判例に忠實なる歷史派となり、ラベオの學派は法律の一般概念に從つて現存の法律の進步を圖る純理派となつた。かくして法律學者は立法司法行政上の重要職分を以て國事に參劃することゝなり、且つ彼等の間に法律の整理編纂の事、法律の敎育を後輩に施す事が行はれるに至つた。ハドリアヌス帝の治下に於て、サルウィウス・ユリアヌス(Salvius Julianus)が試みた『法令集』(Edictum Perpetuum)は法律整理の一例である。法律敎育は普通の自由科は勿論、歷史及び哲學の素養をも必須の前提としてその上に行はれ、その敎授方法は一般向の講義と狹き範圍の學生に對する體系的敎授とに分けて行はれた。一般向の講義は特に興味ある法律問題を取扱ふこと(questions tractare)を主とし、體系的敎授は指定の敎科書に就ての講述及び討論から成つてゐた。この場合の敎科書としては、入門的講義たる『通論』(Institutiones)、法律問題を中心にして述べられたる『問題書』(Quessiones)、各種の法律學說を分類し系統づけたる『體系書』(Digesta)等があり、ガーイウス(Gaius, 110—180)の『通論』の如きは就中有名なものであつた。後に東羅馬帝國のユスチニアヌス(Justinianus, R. 527—567)帝が、トリボニアヌス(Tribonianus)以下十六人の法學者を委員とし六年の歲月を費して完成せる羅馬法四部卽ち(一)古來の法規中現に效力を有するものを集めたる Codex.(二)大法律家の著書を

拔萃せる Pandects.（三）初學者のための法律通論たる Institutiones（四）帝の代に新に發布せられたる新法律集 Novellae は實に上述の如き法律學及び法律教育勃興の成果であり、これこそは羅馬國民最大の文化的業績となつたのである。

因みに醫學は羅馬に於てはその地位極めて低く、トラレス（Tralles）の人テッサルス（Thessalus, c. 54 A. D.）が僅か半年にして醫學を修了し、程度の最も低い弟子を集めてそれを教授してゐた例を見ても、當時の醫學の學的地位を覗ふことが出來る。ガレーヌス（Galenus, 130—200）に至つて醫學は大いに進歩し隆盛せられ、その影響は頗る廣かつたが、それでもなほ醫學を專門とする高等程度の學校はつひに設立せられなかつた。

帝政時代の學術の中心地は羅馬・アテナイ・コンスタンチノープルが主であつたが、その他アフリカ・小亞細亞・歐羅巴の各地に學術の淵叢が傳播した。高等教育の學校として特に主要なる地位にあつたのは、羅馬及びアテナイの大學であつて、各地からの學生がそこに雲集し、それ等の學生に就ては、鄕國を離れる時の手續、在學地に於ける宿所、日常の起居動作等に亙つて詳細嚴格なる規定が作られるに至つた。

要するに帝政時代の教育は、家庭教育と社會教育との頽廢の中に獨り學校教育のみが、而も知育を偏重せる內容に於て、大いに發達した。これは實に崩れ行く世相の反映として、又衰へ行く國家の表徵として、屢々歷史に繰返される事象である。かゝる教育事實に對して、然らば當時の思想家達は如何なる反省批判を向けたであらうか。これが即ち次節に述べんとする帝政時代の教育思想である。

第二節　帝政時代の教育思想

一　セネカ

その生涯　ルキウス・アンナイウス・セネカ（Lucius Annaeus Seneca）は前四年頃西班牙南部のコルドゥバ（Corduba）に生れた。父のマルクス・アンナイウス・セネカ（Marcus A. S.）は知名の辯論家であつた。幼きセネカは兩親に伴はれて羅馬に移り、薄弱の身體にも拘らず熱心に辯論術及び哲學を修め、特にストア派の哲學に强く影響せられた。長じて辯護士となり大いに聲名を博した。クラウディウス一世（Claudius I, R. 41—54）の治世第一年に、セネカはコルシカ（Corsica）に追放せられた。それは彼が帝の姪なるユーリア（Julia）と親しくしてゐたのを、皇后メッサリナ（Messalina）が嫉妬したからである。併し八年の後帝の他の姪なるアグリピーナ（Agrippina）が皇后となるに及んで、セネカは再び召還せられ、長官（Praetor）の職に擧げられ、又皇后の先夫の子なるドミチウス（Domitius）——後のネロ（Nero）皇帝——の師傅として優遇せられた。紀元後五四年クラディウス帝が歿してネロ帝が即位するや、セネカは帝の不德の性行を抑制することに貢獻したと共に、他面また自己の地位を利用して莫大なる富を致した。併しネロ帝は母アグリッピーナを殺して（この事にはセネカも加擔し且つこれを支持し是認する書翰を草して元老院に提供せしめてゐる）後益々亂行に陷り、やがてセネカの存在を厭ひ、その富力を羨望した。彼の庭園や別邸は帝のそれを凌ぎ、彼の雄辯は帝を壓倒し、彼が帝の乘馬や歌の不器用を嘲罵したことは帝の大なる反感を誘發した。帝に親ぶる側近者達はつひに帝に奏めてセネカを斥けんことを圖つた。セネカは身の危險を感じ、自ら引退を乞ひ、その全財產を帝に獻ぜんことを申出た。帝は併し流石に過去の恩義に心を責められ、財產の提供をば却下し、愛護と尊敬とを裝つて、セネカを引退せしめた。セネカは爾來簡素寂寥の生活を送り、病を口實として（事實また靜息を息つてゐたが）羅馬にも殆んど出ることなく、專ら研學に身を委ねた。然るに六五年のピーソ（C. Piso）の陰

謀は、ネロ帝にセネカ處刑の口實を與へた。即ちこの陰謀に對するセネカの關與は頗る不明であつたにも拘らず、帝は護民官の一人を遣はして死を宣告せしめた。セネカは妻や友人達の同情の涙に包まれながら、哲人らしき從容たる態度を以て、腕と脚との動脈を切開して、こゝに七十年の生涯を自ら斷つたのである。

セネカはアウグスツス時代以後の羅馬に於ける第一の思想家・文筆家であり、その豐富なる內容と穩健なる見識とは、所謂『道德書簡集』(Epistulae Morales) 百二十四篇に收められゐる。彼の教育思想も亦この中から取出し得るのである。

教育思想　セネカの根本思想は、理性による感性の支配に德と幸福との本質を見出す所のストア哲學に據つてゐる。彼によれば人間の理性は神性の顯現であり、神的精神の一部であり、神が人の身に宿れるものである。人はこの神への近似性の故に、地上の生活から高く向上し得るのであり、又まさにこの點に各人の尊嚴が認められるのである。併しながら理性に對立して、人にはまた反理性的衝動としての感性が働き、この感性との爭鬪にこそ最大の道德的課題が存する。而もセネカによれば、單に感性の抑制といふが如き緩漫なる程度によつてではなく寧ろ感性の根絕によつてのみ、人は眞の德と幸德とに到ることが出來る。哲學は實にこの爭鬪の指導者である。自己の罪過と闘はんがためには先づ罪過を知らねばならぬ。故に彼は「罪過を知るは幸福の始である」(Initium est salutis notitia peccati) といふエピクロスの言葉を引用して、これは實に至當の言であるとし、自己の罪過に對する認識と苛責とよりして、德への憧憬を生じ、幸福に導かるべきことを說いてゐる。而してそれをなさしめるのが哲學であつて、「哲學（といふ業）は、（精神の）健康に有效であると同時に又甘美なるものである」(Philosophia partier et salutaris et dulcis est.)。

かゝる見地はまたセネカをして人間一般に對する普遍的なる愛の教說を抱かしめた。階級貧富に拘らず、すべての人々を愛し、その人間性を尊敬し、その罪過を憐むべきことは、セネカの道德論の最も輝かしき頂點であり彼が基督教義に影響せられたとの附會說の行はれたのも、恐らくはかゝる基督教的教說に由來するのであらう。

上述の根本思想はやがてセネカの教育本質觀を規定してゐる。彼によれば教育は、情欲の克服によつて理性の支配を促進し道德生活に貢獻する限りに於てのみ價値を有する。而して人間は本性上惡に傾いてゐるが故に、この意味の教育は愈々必要である。人は精神に病を以てこの世に生れ、教育者はこの病を治する醫者である。「何人に對しても善き心が惡き心に先立つて現れることはない。」(ad neminem ante bona mens venit quam mala) 而も「德は決して教へられ得ざるものではなく」(non dediscitur virtus)、「一たび吾々に善が植ゑられるや、それは永久の所有となる。」(semel tradit nobis boni perpetua possessio est.) 故に教育者は、宛も病弱の身に對する醫者の如く、先づ出來るだけ優しき言葉を以て子弟の心情を治療し、忠告によつて德に向はしめ不德から離れしめねばならぬ。然る後に漸次に、嚴格なる訓誡・叱責・懲罰に訴ふべきである。賢き懲罰は外科醫の器具の如く、吾人を益せんがために吾人を苦しめるものである。

セネカは又子弟の個性に適應せる教育方法を主張し、練習による習慣の養成を高調し、特に理論的教說よりも具體的示範を尊重した。「教說による途は長く、模範による途は短く且つ有效である。」(Longum iter est praecepta, breve et efficax per exempla) 彼は尙當時の教育者が徒らに外面的・非實用的なる知的教授に偏し、博學者、衒學者をつくりつゝあるのを慨嘆して、「吾人は生活のためにではなくて學校のために學んでゐるのである。」(Non

vitae sed scholae discimus) と非難し、これより後「學校のためにではなくて生活のために學ばれねばならぬ。(Non scholae sed vitae discendum) といふことが、生活に役立つことを目的とする教授の標語となつた。セネカはかく教授に於ても道德教育を終局の目的として謂はゞ「教育的教授」ともいふべき主張を唱へ、この見地より教科目をも考へ、德への知見を得るための哲學と、神の攝理を知るための自然研究とを有益なる教科として推奬した。彼はまた多藝・散漫を戒め、醫者を度々變へては傷は癒え難く、植物を屢々移しては强壯に育て得ないと說き、更に書籍の多過ぎることも精神を害ふものとして、權威ある少數の書籍を充分に精讀すべきことを勸めた。最後になほ、セネカは教師に對する忘恩を强く戒めた。彼によればすぐれたる知識、高貴なる教養を吾人に與へてくれる教師の價値は、吾人がそれに對して支拂ふ報酬よりも遙かに高價であつて、吾人は教師の骨折には報い得てもその教へる內容には報いることが出來ず、教師の勞働には報酬を支拂ひ得てもその貢獻に對しては支拂ふことが出來ない。故に吾人は教師をば、親しき友や愛する眷屬と共に、永く尊敬しなければ らない。セネカは師弟の情誼をかくも貴く美しく考へてゐたにも拘らず、曾ての門弟たりしネロ皇帝から、恩に報ゆるに仇を以てする非道の仕打を受けた。彼の教說はこの皮肉なる運命を通じて愈々痛烈に感ぜられるのである。

二　クィンチリアーヌス

その生涯　マルクス・ファビウス・クィンチリアーヌス (Marcus Fabius Quintilianus) は、紀元後三五年頃西班牙のカラグリス (Calagurris) に生れた。父は羅馬で活躍した可なり知名の修辭學者であつた。故にクィンチリアーヌスが若い頃から教育

のために羅馬に送られたことも驚くに當らぬ。彼の師の中には有名な文法教師レムミウス・パライモン (Remmius Palaemon) や、劣らず名のあつた修辭學者ドミチウス・アフェル (Domitius Afer) が居た。彼は自分の教育が終ると故國へ歸つて修辭學を教へたものと思はれる。といふのは、やがて彼は六八年に西班牙の一州たるヒスパニア タラコネシス (Hispania Tarraconensis) の知事ガルバ (Galba) に連れられて羅馬に出て來たからである。羅馬に於ける彼は純粹の公立修辭學校教師として拔群の成功を遂げ、彼の門下には、小プリーニウス (Caius Plinius Secundus) や、皇帝ドミチアーヌス (Domitianus, R. 81—96) の姪ドミチルラ (Domitilla) の二人の孫等があつた。彼はこの皇帝によつて勳章を授けられ、又「執政官相當官」(Consularia ornamenta) の稱號を賜はつた。又さきにウェスパシアーヌス帝によつて起された國庫俸給を最初に受領したのも彼であつた。法廷に於て辯護士として成功した證跡も彼の著作の中に一再ならず發見せられる。二十年間の教職生活は彼に羅馬第一の修辭學教師の光榮を與へたけれども、家庭の彼は早くから不遇であつた。卽ち彼の妻は僅か十九歲の時二兒を遺して歿した。又二兒の中次男は五歲にして歿し、唯一の望をかけてゐた長男すらも十歲にして歿したのである。かくて晩年の彼は漸く憂愁に堪へずして公職を退き、著述に從事しつゝ、紀元第一世紀の終頃に歿した。

彼の著述には『(羅馬) 辯論術衰頹の原因』(De Causis Corruptae Eloquentiae)、『辯論教授論』(Institutio Oratoria) 及び妻を殺して告發されたナイウイウス・アルピニアーヌス (Naevius Arpinianus) の辯護論がある。この中最も主要なるは『辯論教授論』である。

辯論教授論の價値とその構成　クィンチリアーヌスの大著『辯論教授論』(Institutio Oratoria) は辯論家 (orator) の養成を論じたもので、彼が二十年間の體驗を二箇年餘りの述作によつて大成したものである。彼の自覺によれば、既に希臘及び羅馬の先輩達がこの問題に就て多くの著述を遺してゐるのに、更に格別の獨創なき新著を企てることは大いに躊躇したのであるが、而も友人達の勸說もだし難く、且つ又希臘羅馬の先輩は、辯論家養成の事

をば、基礎的教養を積める者の上になさるべき領域として、その華やかなる上層建築のみを論究したのに對し、彼は人目を惹かざる基礎工事が充分に築かれなければならぬとの見地から、將來の辯論家をばその幼時より論述したのである。

更にクィンチリアーヌスによれば、「完全なる辯論家」(orotor perfectus) は同時に「善き人」(vir bonus) でなければならず、從つて單に辯論上の特殊な才能に優れてゐるだけでなく、人間として、私的生活にも、公的活動にも、あゝゆる美點を有する者でなければならぬ。換言すれば從來哲學の領域として考究された倫理學上の諸德や諸々の知識は辯論家の智德として玆に論ぜらるべきであり、キケロが既に明示せる如く、哲學と修辭學とは理論的にも實踐的にも結合せらるべく、すぐれたる人は同時に哲人と辯論家との兩性質を兼備すべきである。

クィンチリアーヌスの辯論家養成論は、上述の見地よりして、教育過程としては幼時の基礎的陶冶より所謂辯論術の最高段階までを貫き、その內容としては當時の學藝の殆んど全領域を含めるものであつて、恰も希臘に於けるプラトン教育論の如く、玆では羅馬に於ける最も體系的なる教育論が建設せられたのである。彼はかゝる根本的立場を闡明せる「序說」(Proœmium) に於て、同時に全體の構成を次の如くに豫示してゐる。● 卽ち第一卷は修辭學教師の手に移される前の基礎教育を論じ、第二卷は修辭學校の基礎的課程及び辯論術の本質を取扱ふ。第三卷より第七卷までは題材の發見 (Inventio) と構想 (Dispositio) とを問題とし、第八卷より第十一卷までは演示法 (Elocutio) そのものを述べ、その中に記憶法 (Memoria) と表現法 (Pronuntiatio) とを含ませる。最後に第十二卷は完全なる辯論家の具ふべき諸條件を總括する。

右の十二卷中第二卷以後の論述は當時の辯論術そのものゝ特殊條件に制約せられて必ずしも永遠的意義を有し得ないのであるが、第一卷の基礎的教育論一般の諸契機を含み、今日なほ傾聽に値する內容である。故に本講に於ては主としてこの第一卷の要旨を敍述したいと思ふ。

家庭教育　先づ父はその子供に就て教育の可能性を確信し前途の希望を抱かねばならぬ。少數の例外を除いて人は一般に豐富なる素質を以て生れるのであつて、それを達成しないのは必要な注意を怠るがためである。勿論素質の優劣は人々によつて差異があるけれども、教育から何物をも得ることがないといふ樣な人は絕對にあり得ない。かくて父は子供の誕生と同時に將來の辯論家たるべき希望をその子に囑して教育に最善の注意を拂はねばならぬ。

何よりも先づ子供の乳母 (nutrix) が品性のすぐれた人で正確な言葉を話すことが必要である。ストア哲學者クリシポス (Chrysippos) に從へば乳母は哲學者であることを理想とするけれども、せめて出來るだけ善き婦人が選ばれねばならぬ。子供が最初に耳にし最初に模倣せんとするのは乳母の言葉であり、而も最初の印象は最も深刻で、わけても惡き印象ほど執拗に殘るのである。故に後年忘れねばならない樣な言葉を嬰兒の中に慣れさせてはならぬ。

兩親に關して言へば、單に父だけでなく母もまた高き教養を有することが望ましい。—クィンチリアーヌスは玆でグラックス (C. Sempronius Gracchus) の母コルネーリア (Cornelia)、ライリア (Laelia) の父ライリウス (Laelius) 等を例示してゐる。—又不幸にして兩親が高き教養を受け得なかつたとしても、その故に子供の教育

を怠るべきではなく、却て益々注意して教育すべきである。

子供の交友に就ても乳母と同樣なことが要求せられ、更に童僕（paedagogus）は充分の教育を受けた者たることを要し、若し然らずんば、少くとも自らの無學を自覺せる者たることを要する。バビロニアのディオゲネス（Diogenes）によればアレクサンドロス大王の童僕レオニデス（Leonides）が王の幼時に教へた若干の誤謬は、大王となつた後にも除き得なかつたとのことである。

乳母・朋友及び童僕が若し上述の如き資格を具へてゐない場合には、少くとも話し方に就ての知識ある人が子供に附いてゐて、乳母・朋友・童僕等が子供の面前で誤つた言葉を使つたならば直ちにそれを訂正し子供の癖にならぬ樣にしなければならぬ。

家庭に於ける言語教授は羅甸語よりも希臘語を先に始むべきである。蓋し羅甸語は日常生活の中に自ら修得せられ且つ又羅甸語は希臘語に由來するからである。併し希臘語を始めてから間もなく羅甸語教授をも始め、やがて兩語平行して教へられるのが望ましい。

世人の多くは遠くヘシオドスの見解を傳へて、子供は七歳以前は教育の效果がなく教育に堪へ得ないから、七歳に達して始めて教育を施すべきだと考へてゐる。尤もヘシオドスがこの見解を述べてゐる『教訓』（Hypothecae）といふ教訓詩が僞作であることはアレクサンドリアの批評家アリストファネス（Aristophánes of Byzantium, 257—180 B. C.）によつて指摘せられたけれども、併しなほエラトステネース（Eratosthenes, 276—196 B.C.）その他の權威者が七歳以前の教育無效論を唱へてゐる。それにも拘らず、子供は如何なる時期にも教育から離されて

置いてはならぬといふ意見の方が遙かに賢明である。道德教育の可能なる幼兒に言語教授の不可能な筈はなく、言語修得の基礎條件たる記憶力は幼時に於て特に强いのであるから出來るだけ早く言語教授を始めた方がよい。

但し幼兒に對して强制的方法は禁物である。寧ろ興味本位で遊戯的に學ばしめねばならぬ。時には朋友との間に羨望の心や競爭心を起させて刺戟し、又褒賞を與へて激勵することが必要である。

要するに幼時の教育は頗る大切であつて、生涯の教育課程の基礎である。人々はプィリポス王がアレクサンドロスの教育をば當時の最大の哲人アリストテレースに託したことを想うて、自らの子供の教育に深甚の注意を拂はねばならぬ。（クィンチリアーヌスは尙こゝに初步の文字教授・讀方教授に就て詳論してゐるが、要するに記憶と模倣とを基礎として確實なる根柢を築くことを主眼とせる意見である。）

學校教育の長所　乳母の手から離れて益々修學に熱中する時期になると、子供を家庭で私的に教育すべきか、學校に送つて公の教師に託すべきかが問題となる。すぐれた思想家や有名な國家の國民性を形成した人々の多くは後者に贊成してゐるが、なほ私教育を奬める人々もあることは蔽ひ難い。クィンチリアーヌスはかゝる事態に面して、學校教育の長所を主張し、學校の存在理由を力說してゐる。彼によれば學校教育に反對する人々の論據は第一に道德的に最も危險な時期にある少年を大勢の中に出すことは品性陶冶の上に望ましくないこと、第二に學校に於ては教師の注意が特定の生徒に偏して普く行屆き得ないといふことに存する。クィンチリアーヌスはこれに對して、第一に道德的弊害は家庭教育にも存することを主張して、父母や童僕の非教育的態度を指摘し、第二に學校教育と雖も、良教師がその力に適するだけの人數を收容しさへすれば個別的注意も行亙り得ることを述

べ、學校一般を拒絶することゝ、優良なる學校を選擇することゝを混同してはならぬと說いてゐる。かく世論を反駁して、更に彼一流の見地より學校教育を推奬し、將來辯論家たるべき者は幼時より共同社會生活に慣れる必要があり、學校生活は生徒をして自らの力を知らしめ、永く變らぬ友情を培ひ、そこでは學友の學ぶ所を自らも學ぶことが出來、學友の受ける賞罰によつて自らも敎へられ、競爭心が（それ自身では惡德であるとしても）美德のために利用せられ、特に兒童は敎師や童僕や父母の敎へよりも學友の刺戟に動かされるものであることを指摘してゐる。

かくの如く學校敎育を支持し基礎づけてゐる所に、吾々は當代第一の公立學校敎師としてのクィンチリアーヌスの面目を想望すると共に、家庭と社會とが敎育的職能を失墜して學校敎育のみが獨り繁榮した當時の大勢を覗ふことが出來るのである。

兒童の個性とその取扱方　クィンチリアーヌスは敎師の第一の任務として、兒童各自の特殊な性質能力を知り、それに適應せる敎育を行ふべきことを力說してゐる。彼によれば兒童の優劣を知るべき主要徵表は記憶力と模倣力とであるが、これ等の能力の長短を察して適當な方策を立てねばならぬ。その他兒童の特性は或は弛緩し、或は剛情であり、或は恐怖によつて改善される者も長縮する者もあり、或は徐々の永續的努力を可とする者も急激の集中的努力を可とする者もある。これ等の傾向を熟知して、叱責・賞讃等を適宜に行ひ、兒童の名譽心を利用するなどして、巧みに敎育せねばならぬ。併しながら兒童は休養によつて氣力を新鮮ならしめることが必要である。又遊戯は彼等の本性であり、且つ彼等の性行を如實に發露し、品性陶冶にも有效であるから大いに敎育的價

値がある。但し無制限の保養は怠惰の習慣をつけるが故に慎まねばならぬ。

最後にクィンチリアーヌスによれば體罰の劍は有害無益である。第一にそれは餘りに醜い罰で奴隷にのみ適はしいものである。第二に叱責のみでは無效なほど低劣な者に鞭を加へても、それは益々鞭に堪へる剛情を養ふだけである。第三に敎師が完全な調育者であるならば、かゝる劍は絶對に必要がない筈である。

かくの如き敎說の中に吾々は、古代敎育者に稀なる兒童心理への洞察とその重要視とを讃すると共に、古の羅馬の嚴格なる調育は既に忘れられて、新希臘時代の自由主義がクィンチリアーヌスの敎育方針の中にも取容れられてゐるのを感ずるのである。

文法敎師の資格と辯論術の基礎學科　修辭學の基礎課程としての文學的敎養を擔當する敎師は所謂「文法敎師」（Grammaticus）であるが、クィンチリアーヌスはこの敎師の具ふべき資格に就て次の諸點を擧げてゐる。即ち先づ主要資格は正しく話す力と詩を解釋する力とである。併し話すことに結合して作文の能力が必要であり、詩の解釋に先行してそれの朗讀法が必要であつて、且つこれ等何れにも批評の力が伴はねばならぬ。更に詩の外に、各方面の文藝作品を讀んで、內容と語彙とを共に豐富にすべきである。その上音樂の素養を積んで韻律のことを會得し、天文學を修め、哲學を學んで、それ等に立脚せる諸家の作品を理解し得ることが、敎師として必須の資格である。最後に雄辯そのものが辯論敎師に必要なるは言ふ迄もない。クィンチリアーヌスはその見地より、文法敎師が文法上の事項に精通せねばならぬとて、希臘語、羅甸語の發音、綴字、文法等に就て詳細なる例を擧示してゐる。

文法教師の資格として擧げられる諸點はやがてその教師によつて教へらるべき辯論基礎教科の內容を示すものである。故にクィンチリアーヌスは、辯論修養の要件としての、正確なる言語、優雅なる言語、發音法、外國語、古語、新語、語源、典據、慣用語、綴字法、朗讀法等に就て論じてゐる。又讀物としては單に辯論の見地だけでなく、道德的見地よりも選擇標準を立て、ホメロス、ウィルギリウス等を初め、悲劇、抒情詩等の作家を擧げ、他面に於て哀歌殊に色情的悲歌の類を避くべきことを說いてゐる。そして作文の材料としてもアイソプス(Aesopus)の物語を改作することを奬めてゐる。

右の文學的修養の外に、希臘人が「普通教科」(enkyklios paideia)として擧げた諸教科も亦辯論術の基礎陶冶のために推奬せられる。その主なるものは第一に音樂であつて、それによつて辯論に必要なる言葉の配置、聲の抑揚韻律表情身振等を學ぶことが出來る。但し情弱淫猥な音樂は玆でも斥けられて、勇渾莊重なものが奬められる。第二に幾何學はそれによつて知力を練磨し論證の圖式的展開を敎へる點に於て辯論術の基礎となる。第三に幾何學を天體に適用して天文學を學ぶことも、宇宙の秩序・宿命を知り、又天體の不思議を解明して恐怖を除くこと等のために、辯論家に必要な基礎的修養である。

最後にクィンチリアーヌスは舞臺俳優からも聲色・態度・身振り等の學ぶべき點の多いことを說き、又この限りに於て、體育の價値をも認めた。但し彼はかくして身振・態度を學ぶことをば、兒童期以上には亘らぬ樣に、且つ又兒童期と雖もこの事に餘りに多くの時間を費さぬ樣にと附言してゐる。

多くの教科の學習可能性　以上の如く多くの必須教科を列擧したことに就て、世上には屢々これを危ぶみ反對す

る者がある。即ちかゝる多方面の教科を同時に課することは兒童の精神を混亂疲勞せしめるものであり、兒童の心身はかゝる負擔に堪へ得るものでもなく、時間數も不足するといふのが世人の論據である。併しこの批評は、クィンチリアーヌスによれば、人間の能力に關する充分の理解を缺くことから起るものである。人間は同時に多くの事をなし得べき敏活さと融通性とを有つてゐる。例へば琴を彈唱する人は歌曲を暗誦しつゝ、調子や抑揚にも注意を拂ひ、右手を以て特定の弦を彈き左手を以て他の弦を抑へたり弛めたりし、而も足踏を以て時間を測つてゐるのである。或は辯論家が突然辯護に立つた時の如き、一事を語りつゝある間に、次の事を考へ、而も言葉の選擇・調律・身振その他百般のことに心身を働かせてゐるのではないか。加之多くの仕事も交替して行へば氣分を新鮮にし活力を回復する。故に教科と教師とを適宜に交替して學習させれば却て多くの事を有效に學ばせ得るのである。且つ兒童が疲勞するといふ如きことは考ふべきではない。却て幼少時代ほど疲勞に堪へ得る時期はなく、又兒童は實に陶冶性、模倣性、愛容性に富み短期間に多くの事を容易に學び得るのである。

その史的地位　以上はクィンチリアーヌスの『辯論教授論』第一卷の要旨である。彼は第二卷以後に於て修辭學教師固有の領域に入り、詳細なる論議を展開させてゐるのであるが、彼の教育論の價値は既に上述の一般的基礎的教育論だけでも充分に確保せられてゐる。蓋し辯論術そのものに就ては希臘以來多くの研究が行はれて來たから、クィンチリアーヌスの活潑なる著述は獨創よりも寧ろ折衷と集成とに特色を有するものであらうし、又辯論家養成の事に關しても近くキケロが卓越なる論述を遺してゐるが故に、クィンチリアーヌスの功績は、既述の如く、これを教育の全段階を通じての考察に擴充し、就中その基礎的段階に於て周到なる檢討を行つた點に存す